# 小説『謎の彼女X』

ドラゴンピリオド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小説『謎の彼女Ｘ』

【Ｎコード】
Ｎ０９５７Ｈ

【作者名】
ドラゴンピリオド

【あらすじ】
“本作品”は、月刊マンガ誌『アフタヌーン』連載中の、植芝理一先生の作品『謎の彼女Ｘ』を下敷きにして作られた二次創作・ファンフィクションです。といっても、“本作品”のストーリーはほぼ原作のままですので、おおざっぱに言って、マンガ作品を単に文章化しただけの物と言えます。ただし、「ほぼ」です。文章化にあたって、「若干」、変えた所があるかもしれません。キャラクターも、原作とは「少し」、異なっているかもしれません。（とりあえず、原作を先に読まれることをお勧めします）以上を了解出来る方

だけ、お付き合いください……。（縦書きＰＤＦ推奨します）

# 第１０話　謎の特効薬

§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§
（この人物紹介ページは縦書きＰＤＦ用に整形しています。）

◆おことわり◆

“本作品”は、月刊マンガ誌『アフタヌーン』連載中の、植芝理一先生の作品『謎の彼女Ｘ』を下敷きにして作られた二次創作・ファンフィクション（ＦＦ）です。
といっても、“本作品”のストーリーはほぼ原作のままですので、おおざっぱに言って、マンガ作品を単に文章化しただけの物と言えます。（滝汗　苦笑）
ただし、「ほぼ」です。文章化にあたって、「若干」、変えた所があるかもしれません。
キャラクターも、原作とは「少し」、異なっているかもしれません。
（とりあえず、原作を先に読まれることをお勧めします）
以上を了解出来る方だけ、お付き合いください……。＞（└┘）＜

◆登場人物紹介◆

卜部美琴（うらべ　みこと）
職業：女子高生　ヒロイン　椿の彼女（周囲には非公開）
属性：恥女　処女　前髪で目を隠した隠れ美少女
武器：麻薬よだれ（一族）　必殺安全ハサミ（個人）
状態：先祖を辿ればそれなりの貴族に連なる。
　歴史の一時期、特殊体質を買われ、為政者に、道具として使われたこともある一族の末裔。
　よだれ関係なしに椿に愛してもらいたい。
椿明（つばき　あきら）

職業：男子高生　主人公　卜部の彼氏（周囲には非公開）
属性：絶世の美少年　童貞
武器：素直な性格　純真な心　綺麗な声　病弱な身体
　まるいケツ　小さなチンポ　全身性感帯
状態：卜部のよだれの虜になっている。
　身体の秘密（いまだに女性ホルモンが異常分泌され、月一の周期で乳首が小さく膨らむ）に悩んでいる。

丘歩子（おか　あゆこ）
職業：女子高生
属性：魔性の美女　眼鏡ロリ
武器：巨乳　舌使い　指使い　胸使い　股使い　その他……
　それなりに悪知恵が働き、タフ。病原菌や薬品、汚物に対する耐性がある上、“舌”を使って分析もできる。
状態：卜部と椿の関係を知る。椿に恋してる。独占したい。
　卜部がジャマ。ただ、自身に攻撃に特化した武器がないため卜部に頼るしかなく、痛し痒しの状態にある。
　上野に謎の弱み（不明）を握られている。ために、上野の異常性欲の処理をほぼ一人でさせられており、マジに身代わりを欲している。（身代わりを差し出している間は休むことができる）

上野公平（うえの　こうへい）
職業：男子高生　大金持ち　悪徳政治家の一人息子
属性：ホモ　両刀遣い　変態　ブサ面　筋肉デブ
　天才科学少年であり策士であり格闘家でもある。
武器：金　権力　巨根　ねじれた性格　桃色の脳細胞　バカ筋肉
状態：絶倫男。平均４個の睾丸を持つ。この睾丸は3日に一度の周期で2個に分裂する。なので放置しておくと陰嚢が破裂してショック死する運命にある。睾丸を消滅させる唯一の方法は、（手法を問わず）絶えず生殖器を使う事である。
　過去の記録では、睾丸数１０２４個にまで増えてしまった

事があり、このときはまさに死の寸前にまで行った。
睾丸分裂の原因として、超古代文明のシャーマンの呪いを受けている、というのが今の所の最有力仮説である。
実際、分裂時に耳を澄ますと、かすかに「……ドグラ・マグラ・エンポリ・エンジ・ドゥホウラ・ヒュンペ・グルンド・ボウラ……」などというおどろおどろしい音声を陰嚢内部に聞くことができる。驚くべきことに、現時点での人類科学技術レベルでは、この音声を録音することは不可能である。
新陳代謝が激しく、体表は絶えず粘性体液に濡れている。体臭、口臭、垢、フケなど、環境汚染レベルに達する。
目的のためなら悪魔的手段を講ずることに躊躇いがない。
過去、５０人以上の美童・美女を強制奉仕させたが、全員廃人寸前まで調教してしまった実績がある。
現在は主に丘にさせているが、これが意外とタフな上、なかなかいろいろケッコウなわけで、重宝にしている。
椿には純情可憐な恋心を抱いていて、同人に対しては、非常手段がとれないでいる。

§§§§§§§§§§§§§

## ■1■

初冬のある一日のことだ。
わたしは風邪で休んだ椿くんのお見舞いのため、椿くんの家に「学校の帰りに寄ります」と電話した。
だけど……一部、変更せざるをえなくなった。

学校から直接行ったほうが早いのに、いったんマンションに帰って、私服の、裾が膝まである暖かなダッフルコートに着替えてから、出向くことになったのだ。なんでこのわたしが、こんな非効率的なマネをしなきゃならないのか？

すべては、丘さんのせいだった。

これは、丘さんの“指令”なのだ。だから――

北風の冷たさが身に染みる中、わたしは少し強めに唇をかむ。

――だからこれは、しかたがないことなのだ。

椿くんの家に着いたころには、身体がひどく冷え込んでしまっていた。

でも、辛いとはぜったい思わない。

だって、これが丘さんの“指令”なんだから。

わたしはその“指令”を完璧にこなすことを求められており、そしてわたしは、当然、完璧にこなせる事を実地で証明してみせるつもりなのだ。これは丘さんへの――

（対抗心？）

今ふっと頭に浮かんだ言葉を、首を振って追い払う。なんで、この、わたくしが、彼女なんかに、そんなことを、思う必要が、あるのだ。

侮らないでほしい。

わたしはそんな安い人間じゃない。

わたしのことを間違っても丘さんと、あるいはその他のクラスメートたちと、同列の存在だと見なしてはほしくない。もし誰かがそのような目でわたしを見るのなら、わたしはその人を軽蔑――すら、しないでしょう。

「……」

だけど、正直、肉体の冷たさは否定できない。（苦笑）

とにかく寒い。

呼び鈴を押し、あらわれたお姉様に案内され、椿くんの暖房のき

いた部屋におじゃましたときには、生き返る思いがした。

■2■

当然だが、椿くんはわたしを笑顔で歓迎してくれた。
ベッドからわざわざ上半身を起こし、頬を染めて、嬉しそうな声をかけてくる。
「来てくれてありがとう。あれ？　制服じゃなくて、私服なんだね」
「いったん家に帰って着替えてきたから」
風邪は治りかけている、と聞いた。だから彼は、このわたしの魅力に、顔を赤らめているのだ。
わたしは机の椅子に腰掛けて椿くんに正面から向き合う。
柔らかな、パジャマ姿の椿くん。いい匂いがする。肌が透明で、すべすべで、つるつるで。
座高が低くて、肩が薄くて、指が細くて。
肩まで伸びた、黒く、つややかな髪の毛。前髪が、繊細なかんばせに、甘くかかっている。
目鼻立ちは、一生懸命きりりとして少年らしく。ただし唇はどうしても果実のようにほんのり赤くて。
彼は、この世に億万といる少年たちの中で、たった一握り、神様から儚さという特質を与えられた男の子。
子供から青年へと急成長する合間に、ほんのひとときだけ出現し、あっというまに走り去ってしまう刹那の存在。
美少年――
その得難い、うつろいやすい美を「夏の一日」に喩えたのは、シェイクスピアだったろうか。
椿くん――
彼は、わたしに正面から観察されて、その瑞々しい頬をまたもや

染める。横を向き、困ったように形のいい唇を開くのだ。
「あの……プリントは？」
「そんなのただの口実だから。まさか、わからなかった？」
「わ、わかるよ。もちろん。そ、そうだよね」
彼は失敗を取り繕うとして、
「あのときと似てるね」
と、思い出話をし始めた。
「ほら、み、美琴の“よだれ”をなめて、ぼく学校を休んでさ……」
椿明（つばきあきら）。とりあえず彼だけだ。このわたし、卜部美琴（うらべみこと）を、ファーストネームで呼べる許可を与えている人物は。
「あのときも、美琴、プリントを口実に、ぼくに会いに来てくれたっけ」
「そんなこともあったかしら。でも、今度は本当の病気だから、わたしの“よだれ”をなめても、回復することはないと思うわ」
「そ、そだね……」
と答えて、彼はモジモジする。
その様子を確かめて、フッ……とわたしは、こっそりと蔑みの笑みを浮かべる。
彼は、椿くんは、このわたしの“よだれ”がなめたくて、しかたないのだ。
（フフン……この変態めが！）
わたしは心の中で、椿くんを罵倒する。
（人のよだれをなめるなんて、なんとも思わないの？　この変質者！）
そう悪態をつきながら立ち上がる。
ビクッ、と椿くんが震えた。

■3■

わたしは椿くんの下半身を覆っていた蒲団を、強引にめくり上げる。
椿くんは、所在なげに、体育座りの格好になり。
開いたスペースに腰を下ろし、わたしは彼の両膝に手をかけると、強制M字開脚させる。
椿くんは、首から上を、みるみる真っ赤にさせて――
わたしは攻撃の手をゆるめない。
両手で、彼の膝頭を、やわやわといじり出す。
椿くんは堪えきれず、やがて甘い、掠れたあえぎ声をあげはじめるのだ。
（ハハン……だらしない！）
なんて椿くんって、マヌケな体質なんだろう。こんなんで濡れちゃうなんて。
わたしは素知らぬふりして、いじり続ける。
「どうしたの？　へんな声だして。お姉様に、聞こえるわよ？」
「あ……あああ……ゆ、許して……み、美琴……だめ……もう……」
椿くんは、小刻みに身体を震わせて。
涙さえ浮かばせて。
とうとうパジャマの股間が、ちんもりと、盛り上がった。
笑ってしまう。
なんて小さいテントなのかしら。
笑いすぎて、わたしの息も、乱れ始めてしまったくらいだ。
まったく、どこまでも迷惑な子供だと思うんだ。
躾けなきゃ、ね……。
左手をじわじわと這わせていきながら、わたしはついに、右手の人差し指を、口に含んだ。

とたん、だった。
瞬間的に、椿くんの目が変わる。

いじられて、暴発寸前、失神寸前にまでなって、顔は恥ずかしい表情を丸出しにしながらも。
それでも、顔のそこだけは、別物のように色が違って。
そう、まるで絶望の闇にさす一筋の希望の光を見つめるような。
せつなくて、すがるような、食い入るような、椿くんの眼差し――
その目の前で。
ちゅぱちゅぱ……ちゅるり……。
口の中から、ねらねらと。
指を引き抜いて……。
その指に。
ねっとりとからみついている、わたしの“よだれ”……。
口唇から指へと、輝きながら透明な糸を引く、わたしの“よだれ”……。
白い細い人差し指に、生暖かく匂うように粘りついている、わたしの“よだれ”……。
「いつもの、日課……」
「あっ……ああ……うん……あ……」
惨めな、どうしようもない最低な男。それがこいつ……。
目が右手人差し指に釘付けで、左手が、今どこにあるのか忘れてしまっている鈍臭い子供。
じらした末に、ようやく指を差し出すと、椿くんは、さかりついた犬のように腰を振るわせながら、指にしゃぶりついたのだった。

■4■

椿くんが気遣う声音で言った。
「ねえ……暑くないの？」
「ちっとも」

バカ？　もちろん暑いに決まってるわ。こんな狂ったように暖房のきいた中、ダッフルコートを胸元まできっちりと着込んでいるのだから。
「そう……あのね？」
「なに」
不機嫌だ。なぜって、服の裏地が、汗ばんだ肌に気色悪く張り付いているから。
「“よだれ”をなめたら、頭の中で、真夏の太陽が見えたんだ」
「……」
不愉快だ。なぜって、突きだした乳首が、ブラのちっちゃな布地に擦れているから。
「そこは海辺でさ……ぼくは美琴と二人っきりで……焼けた白い浜辺の上で……」
「……」
苛つく。なぜって、ヒモが刺激して、股間を匂うように湿らせているから。
「美琴は……ビキニで……それもすごい、ビキニで……」
「……すてきな妄想ね」
椿くんは恥ずかしそうに顔を横に向け、口をつぐむ。
そんな椿くんを見ながら、こいつは、なんて脳天気な豚野郎なんだろうと思うのだ。
矯正不可能な、品性下劣な、精神異常の、愚鈍な性犯罪者……。
だが。

だが、そう罵りながらも、もう一方では。
わたしは、わたしの発する、別の声が聞こえている――

（ああん……あ……あ……明、明、明……あん、あん、あん……あふうン……）

違う！　違う！　違う！　違う！
椿くんは！
ゲス！　低脳！　ゴミ！　汚物！　劣勢遺伝子――！
（明……明……あうあ、あふ、うあああ……あっあああ……明……明！）

ああ！
どっちが本当の自分なのか！？
もちろん、どちらも、どちらも――？

「ハァ……ハァ……ハァ……」
ひたいに生じる、隠しようのない、汗のつぶ。
「美琴……？」
「なにっ」
「……いえ。ごめんなさい」
「――」

もう、限界……暑くて……もう耐えられない！
もう、もう、もう――
今この瞬間、弾けて、全てをさらけ出し――たかった！
（――ああ！　明！　ああ！　明！　わたしを見て！！！）

椿くん見るな椿くん見るな椿くん見るな――！

「ううう……！」
……もちろん、わたしの勝ちだ。
当然、でしょ。こんな、堕ちた、ジャンキーに、見せてあげると、思うの？

「ハァ……ハァ……ハァ……」
身体を濡れ尽くす、匂わんばかりの汗の滝……。
「ほんとに大丈夫？」
わたしは片手で椿くんをドンと突き倒すと、立ち上がり、部屋をあとにしたのだった。

■5■

マンションに帰ると、ドアの前で、丘歩子が待ちかまえていた。
見た目、シャープな感じのする、眼鏡の美少女。
小学生のような背丈に、アンバランスな巨乳をくっつけた女だ。
その女が、わたしの姿を見て、ニヤリと、ふだん教室で見せることのない笑みを浮かべる。
眼鏡をかけたチビの魔女が嗤うと、こんな感じになるのかもしれない。
「ミッション、コンプリート？」
「あなたに報告する義務はないわ」
「私が教えてさしあげた“特効薬”を試したんでしょ？　なのにその態度、少し無礼じゃないかしら？」
「……」
丘さんの“指令”――それが“特効薬”の効果を探ること。
そう彼女が、この“薬（ドラッグ）”の考案者なのだ。
昼間、椿くんのお見舞いに行く、と話してやったら、その大層な頭脳が、一生懸命作りだしてくれたものなのだ。
まあ……効き目は絶大だったと評価してやっていい。なんたって今、その威力を目の当たりにしてきたばかりだ。

（もっとも、“よだれ”を介してだったけどね）
でも、わざわざこいつに教えてやることはない。
「……」
だんまりを押し通していると、丘さんは顔を少し険しくした。
「逆らうつもり？　この私に」
「……」
逆らったとして、どうなのよ？
余裕だった。
「丘さん。脳みそ凍っているの？　そもそも、あなたとは主従関係であるわけでもないし」
このときわたしは少し、いい気になっていたのかもしれない。彼女を甘く見ていたのかもしれなかった。
丘さんは、物の道理、ロジックを飛び越えて、いきなり突き刺してきたからだ。
「あなたの“よだれ”の秘密、みんなにバラすわよ？」
冷静に考えれば、仮にそうすると、彼女自身の不利益にも繋がるので、あり得ない話だったのである。
だけどそのとき。
不意をつかれて、グサリと弱点をえぐられて――
パニクってしまったのだ。

「ま、まって――」
なんということ――！
それだけはだめだった。“よだれ”の秘密。それは、わたしの一族の、いちばんの秘事なのだから！
「おねが――」
そのときだった。
丘さんの指がヒュンと飛んできて、私の口中に突っ込まれたのだ。
わたしの歯が、歯茎が、舌が、顎が、無理矢理犯される――
「んー……んー……んー……」

やがて丘さんは、その指を抜き取り――
「嫌――！」
わたしの抗議なんか意にも介さず、丘さんは、わざと意地の悪い笑みと目つきになって、見せつけるように、指のよだれを舌でなめ取ったのだ。そして――
「……くっ、くくくっ！」
こらえきれないように、押し殺した笑い声をたてた。
「くっくっくっ……美琴って、随分と、アレなのね」
わたしは顔から耳まで真っ赤にして、唇をかむ。
「コートを開いてごらん。――開きなさい！」
それは、容赦ない“命令”だった。
秘密を握られて、わたしは――逆らえない。

■6■

わたしは、言われるままにダッフルコートのトグルを全て外した。
両手で、左右の襟元をつかんだ。――さすがに、躊躇する。
「……」
「……さぁ、なにやってんのよ。早くしなさいよ、どんくさいわね」
わたしは、観念して――
コートを、大きく、開く――
「――」
「……ダイナマイト！」
丘さんが目を丸くし、ついで絶句する。当然だ。顔は赤いまま、わたしは誇る。
この、わたしの、体なのだ。この張りのある大きな乳房、キュッとしまったウエスト、丸いお尻、長い脚。だれにも、負けない！
そして、ああ――！

そして、こんな完璧な肉体をより一層際だたせる、着衣――ブラ、パンティ！
そうなのだ！　コートの下は、下着だけだったのだ！
それも、極小、極薄、極形の、凶悪なシロモノの！
これが、丘さんの“特効薬”の正体なのだった！
（あああ……！）
わたしの、下着姿。丘さんが、息するのも忘れて、魅入っている。
（いや……見ないで！）
椿くんのための、この装い！
（だめよ……だめ……）
明に見つけてもらうはずだった、危険な姿――
「ああ……！」

ほんとうは、丘さんの“特効薬”の“成分”は……ごく普通の……スクール水着だった。
それを自分なりに改良、アレンジした結果が、この下着姿だったのだ。
でも――なんで、よりによって、こんな淫らな下着を選んでしまったんだろう！？
乳首だけを隠す三角形の黒い布きれと、ヒモだけで構成された、ブラに――
おなじく、黒色のヒモパンティ――！
これでは――
恥辱で、わたしの白く透明感のある全身の肌が、赤くなる。
これでは――椿くんの前では、コートを、脱ぐに、脱げない！
こんな姿を見られてしまったら――
「ヘ・ン・タ・イ！　……美琴って、真性の狂い物、呪われた物件だったのね――」
正確無比に指摘する、丘さんの声だった。
「――どうりで、なんて安物臭い人間だと思ったんだ」

さんざんな言いように、カッとなる。だが――このときはまだ冷静だったのだ。
だって、彼には結局、隠し通したままだったから。
“よだれ”を介して、つかの間の幻を見せてやっただけだから。
（そうよ。そうじゃない。ちょっと“雰囲気ある下着”がどうだっていうのよ？）
（逆に、ここまでするわたしのピュアな心に気付かないあなたの方こそ、どうかしら？）
まったく正当たる乙女の純情を、この愚鈍な女に諭してやろうとさえ思ったくらいだ。
だが、そのときだった。

■7■

ガチャリ――
と、となりの部屋のドアが開いたのだ！
不様にも、わたしは体をびくりと震わせる。わたしの、はっきりと怯えた両の目が、前髪から露わになる。
となりには、わたしは背中を向けている。だから、見られてはいない。だが――
こんな変な格好！
その住人の足音から、不審げに、何度もこちらにふり返りながら、エレベーターに歩いていく気配をありありと感じる。
わたしは、辱めにまたしても身が震えた。
丘――！
品行方正、高貴高潔で通している近所の評判を、どうしてくれるのだ――
そう思ったときだった。

バシャリ――！
それは、いかにもわざとらしい機械的なシャッター音。丘の手もと。
デジカメだった！　撮られた！？　今の、わたしの姿を――！
なにものにも動じない、完璧なはずの、わたしの、今の、みっともない顔を――！
そして。
「くっ……」
押し殺した声。
「くっくっくっ……」
それは、だんだんと大きな声になり――
「――はっはっはぁっはあっはっはははははははははッ！」
あたり憚らぬ爆笑となったのだった。
わたしは、このときになってはじめて、コートの前をバッと閉じたのだ。
「ノロマ！　いやはや、とにかく……」
涙を浮かべた目尻をぬぐい、彼女は冷酷に告げた。
「これであんたは私に、絶対服従なんだからね。いいこと？　変態女？」
「く――！」
「返事は？」
わたしは、悔しさを感じた。このわたしが、悔しさを感じた。
気にも留める必要のなかった愚衆の一人にたいして、このわたくしが――！
「――はい」
屈辱だった。
「ウフフ」
勝ち誇った彼女は、小首をかしげて、わたしに告げる。
「手始めに、明様を、もらっとこうかしら、ね？」
「――」

わたしは、唇をかむ。強く、かむ。血が、にじむ――
彼女はもう用が済んだとばかりに背を向けた。
「じゃ、明日ね。スケベ女。ちゃんと出てくるんだよ。でないと、知らないわよ？」
またしても、嘲りのバカ笑いをまき散らしながら、ふてぶてしく歩き去ってゆく。

■8■

取り残された、わたし。
言われるままに、恥ずかしい格好をして、写真に撮られたわたし。
椿くんも、プライドも、何もかも奪われた、わたし。
明日から、公認の変態奴隷として、屈辱の毎日を、生きなければならない、このわたし。

丘歩子――！　この、魔女、め！

いったいどれくらい、立ちつくしていただろう？
ふと、わたしは――
身体を流れる血の音を――感じていたのだった。

それは、久しぶりに感じる血のざわめき――

下部の血！

わたしは、今来た道を、ふたたび歩きはじめる。椿くんの家に向かって。
再度、椿くんに会うために――

（デジタル画像！　それは、回収は不可能だってこと！）
（ではどうする？　対抗策は？）
（簡単！　なぜって、わたしは――卜部美琴、卜部の子！）
凍えたアスファルト。わたしは歩く。
（だけど、その前に）
（椿、明くん――！）
あの売女の毒牙にかかる前に、わたしが、このわたしが、先に――！
その、決意を、胸にして。
丘、歩子――
あなたに、明は、渡さない！

ポケットから、秘密兵器を取り出し、右手に装着する。
それは、街の灯に薄く光る、安全ハサミだった。
その手を、ダッフルコートの内側に、差し入れて――

紐を、切る！

残骸が、身体を滑り、道路に落ちた。振り向きもせず、そのまま捨てて――
「何か落としましたよ」という、親切な通行人の声がかかる。
カッ、と顔が火照った。唇をかむ。
足を速めた。
コートの中で、ぷるんぷるんと乳房が揺れる。
わたしは椿くんの家に向かって、走り出したのだった。

（了）

（あっれれ〜〜上野公平は出番なかった〜〜ごっめーーん　笑　）

## 第４話　謎の、風が強い日

§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§
（この人物紹介ページは縦書きＰＤＦ用に整形しています。）

◆おことわり◆
ファンフィクションです。詳細は１話に記載。

◆登場人物紹介◆
卜部美琴（うらべ　みこと）
椿明（つばき　あきら）
丘歩子（おか　あゆこ）
上野公平（うえの　こうへい）

以上４名は、１話にて紹介済みです。今回の主な登場人物は←

尾形※※（おがた）　原作で下の名前が不明
職業：男子高生
属性：サッカー部レギュラー　ハンサム
卜部、椿と別のクラス（原作では同級生）
武器：サッカーの能力は本物　イケメン
状態：自分の持ち物をよく理解している。
目を付けた女の子を高い確率でモノにしてきた、そこそこやり手の少年である。根は善良であり、ようするにごく当たり前な男の子である。
以下、未来の記述になる。
当人は、望み通りサッカーがらみの生涯をおくることになる。まず部のキャプテンを皮切りに、Ｊリーガーとなり、

やがては代表選手にまで上り詰める。引退してからはコーチとして活躍。かなりの実績を納めた。
ただ、収入のほとんどを「U家」という謎の機関に寄進しており、生活は質素なものだったという。ためか、生涯にわたって独り身を通しており、晩年は若い頃の思い出にひたりながら、寂しく生を終えたとのことである……。

その他男子生徒……紹介省略。
隣の男子大学生……マンションで、卜部の隣の部屋に一人住まいしている。

§ § § § § § § § § § § §

■1■

今日は、制服のスカートを、膝上42センチの丈にした。

事実をあらためて言うのもなんなのだが、わたしはスタイルがいい。脚の長さなんか、身長の半分は余裕である。
だがこんなわたしでさえ、そんなスカートを穿くと、裾が股間ぎりぎり。ちょっとかがんだだけでパンティが丸見えになってしまう。
ただ歩いているだけでも、裾が跳ねて、ちらちらと白い布地を見せてしまうのだ。
スカートの色は黒なので、コントラストも働き、より刺激的に目に映るであろうと思われた。

わたしは、この姿で、一日を押し通した。
朝、生徒たちのもっとも混み合う時間帯をねらって、登校した。

坂道は、極力ゆっくりと上った。
上履きに履き替えるときは、靴を時間をかけて床に揃えた。
先生に指名されたときは、いちいち立ち上がった。
板書を命じられたときは、つま先立ちをし、上の方に答を書き込んだ。
休み時間は、積極的に校内を歩いた。見つけたゴミは、率先して拾った。
時折、人気のない場所にワザと来て、人待ちげに佇んだりもした

――

男子どもにとっては、気の休まる瞬間もなかったろう。みんな、浮ついた顔をして。乗り遅れたら、自分は一生後悔するんじゃないかという、失笑ものの焦りに捕らわれて。
いっとき、わたしの歩く背後は、そんな可哀想な人たちで群をなした。全員、関心ないよ、たまたま行き先が同じなんだよ、というフリをしているのが情けなく、哀れみの涙を誘う。
まさにバカ以外のなにものでもないのだが、今日に限っては、その愚かさ加減を見逃してやらねばならない。
というのも、わたしの方に、むしろそんなバカが要り用な、めんどくさい事情ができてしまったからである。
その仕事をなすために、少なくとも、１０人はほしいのだ。バカが……。
「……」
わたしは唇を軽く噛む。
少し、頭に血が上る。

まったく、迷惑。早く死ねばいいのに。

心の底からそう思う。なぜって――
ほんとはわたし、自分の方が死にたいくらい、恥ずかしかったん

だから！

■2■

いつもだったら、こんな性急なマネはしない。
むしろ遠回りな、回りくどいとも思えるデリケートな手段を採る。
そう、思い出す。
転校初日のあの日のことを。
わたしはその日、即刻即座にその手段を実行して、その日のうちに、記念すべき下僕第一号を、狩り獲ったのだ。

その日その時のことを、実はあんまり憶えていない。
黒板の前で、無気力に自己紹介をし、担当教師のいいなりに、席に座った。
疲れていたのだろう。
すぐに机に突っ伏して、眠ってしまったのだ。
休み時間も、授業中のほとんどの時間も。昼食時も……誘いに来た女子数名に、「眠いから」とお断りして。
そして夕刻。
誰もいなくなった教室。揺り起こしてくれたのが、彼だった。
椿明（つばきあきら）くん――

彼が、実はわたしの隣の席の人だったなんて、後で知ったことだ。
とにかく、そのとき。目覚めて、顔をあげると。そこに。
彼は夕日を浴びていて。
わたしの具合を、心をふるわす、きれいな、透明な声で聞いてきて。

安心させようとしてか、ほんとに精いっぱい、可愛い、可愛い、可愛い、優しい笑顔になって。
制服がダブダブで。かえって、体の線を感じさせられたりして。
わたしは。
彼のことを、新古典主義の絵画から抜け出てきた裸の天使かと錯覚して。らしくなく取り乱して。
普段ぜったい思わないことをいきなり痛感したりして。だんじて存在するはずが無い自分の負の領域を、容赦なく暴かれたような、まったく理不尽な自虐的感覚に囚われて。
ろくに応対もできず、猛烈な羞恥心に苛まれて。
そそくさと逃げるように立ち去ってしまって。
一人取り残された彼は——

このシーンを回想するたびに、なぜか、顔が火のように熱くなる。
置き去りにされた彼は——
偶然、出来上がっていた、わたしのワナに嵌り込んでしまって。
つまり、眠りこけて。
机の上に広がっていた。
わたしの“よだれ”の聖なる泉に、堕ちて、溺れて——

それからは。
つつがなく。椿くんは。
完全にくだらない惨めで使えない、芸術的価値なんてこれっぽっちもない、ゴミよりも劣る最っ低の下僕として、今に至っているのである……。

ああ、何が言いたいのかというと！
つまり。

わたしは今日。
こんな椿くんみたいな、使い捨てにできるバカが。
早急に要り用だった……ということだ。

■3■

授業が終わった。
どうせ居残りするので、当番ではなかったが掃除に参加し、身体を積極的に動かした。
ゴミ箱を焼却炉に持っていく役目を買って出た。
わたしの繊手で校舎の裏手にまで運ぶ姿が痛々しく見えたのだろう。ここで、最後のバカ……と言っていいのかわからないが、一人の男子が掛かった。それも、大物が。
「それ焼却炉まで持って行くんだろ？」
顔を向けると、たしか……尾形くん、だった。
イケ面の、サッカー部のエースで、将来有望な……。
「かせよ。おれが持ってやる」
わたしの返事をまたずゴミ箱を奪い取る。
彼ほどの人材だから、ひょっとして純粋な善意からの行為かもしれず。
迷ったわたしは、判断のために背を見せた。
「じゃ、おねがい……」
「ちょちょちょ、ちょっと！　帰るなよ！　お前に話もあるから、一緒に焼却炉に行こうよ」
余裕の態度でわたしを待っている。カッコつけた苦笑までして、
「それに、お前んとこのゴミ箱だろ？　帰りは自分で持って帰るんだぜ？」
歯をキラリとさせたのだ。

「そう……」
やっぱり、バカの一員だったようだ。わたしは並んで歩きながら、彼の話を聞くことにした。
「お前に話ってのはさ、つまり――」
「卜部って、ちょっとかわってっけど――」
「他の女子とは雰囲気が違うというか――」
「なんか神秘的っていうか――」
「実はおれ、お前が転校してきた日から気になっていて――」
「ふだん、ガード堅くて、なかなか話しかけられなかったけど――」
「でも今日は、その、今日は、なんとなく……おれの言うこと、耳貸してもらえそうなカンジして――」
つまり、だった。
「おれと、つきあってくんない？」
ゴミを焼却炉に落として、空になったゴミ箱を地面に置き、真っ直ぐ正面から、コクってきたのだ。
白状するが、わたしはまだこの時点になっても、彼が真性のバカか、仮性のバカか、どっちのバカか判断に苦しんでいた。それほど彼の態度は、年頃のスポーツ少年らしい、清々しいものだったのだから。
だから。
わたしは、返答がわりに。
試してやることにしたのだ。
「土下座しなさい」

■4■

瞬間、惚けた顔になった。なに言われたのか、理解できない、信

じられない、という顔だった。
わたしは同じセリフを二度も言うつもりはない。
それに、チャンスというものは、古来から、ただの一度っきりと、決まってる。
わたしはゴミ箱を取り上げると、あきれ果てた、という感情を押し殺して、背を見せた。
「じゃ……」
「あ……待って、待ってくれ！」
焦りまくりの尾形くんが、前に回り込む。
「たのむ！　話をきいてくれよ！」
「……」
「いきなり土下座だなんて！　わかるだろう？　せめて、わけ、聞かせてよ！」
彼は、ラッキーだった。このとき、わたしには、時間的な余裕が、なくなりかけていたからだ。
つまりわたしは、寛大にも、ラストチャンスをくれてやることにしたのだ。
「わたしの気持ち、まるで気遣いなしでいきなり告白してくるなんて。無神経にもほどがあるわ。甚大な精神的苦痛を受けた。どうしてくれるのよ？」
「え？　あ？　その――そんなの、その、あれく……あれ？」
彼は、驚いたり戸惑ったり焦ったり泣き笑いだったり、百面相を披露した。
時間切れが迫る。焦りを抑えつつ、わたしは繰り返した。
「土下座しなさい――」

尾形くんは――
「――」
尾形くんは一回息を飲むと、真剣な眼差しをわたしにくれ。
身体を動かした。

地べたに、きちんと正座し。両手をつき、頭を地面スレスレまで下げてみせたのだ。
「すみませんでした……」
当然の結果だが……このとき少しだけ、感動してしまったことを認めてもいい。
だが。
わたしはさらに命じたのだ。テストは、これからだった。
「いいって言うまで、顔をあげちゃだめだからね」
「……ハイ」
ここまで来たら、彼も素直なものである。わたしは満足して。
両手を。
スカートの中に入れ――
白いパンティを、脱いだのだ。

■5■

脱ぎたての、体温の残るパンティ。
それを、土下座した尾形くんの、すぐ前にフサリ、と落とした。
わたしの仕草の雰囲気と、音とで、どんな事態が発生したのか想像ついたのだろう。今の時点で、彼は、耳の先まで真っ赤にさせている。
わたしは脚を少し開き気味にしてから、命じた。
「ゆっくりと……顔をあげなさい。わたしを、見てごらん……」
哀れ。彼の心拍音が、音として聞こえるようだった。サッカーの試合のときだって、これほどの心臓の酷使はなかったろう。
彼は、言われるままに、そろそろと顔を上げてきて。
最初に、白いパンティを、視界に捉えて。

そろそろと。わたしのつま先から、足首、膝へと。ふとももへと。
ここで彼はわざとらしく瞬きをし、目を瞑ったまま仮想視線を上に走らせ、わたしの胸あたりから、見ることを再開させた。最終的に、彼は。
仏の垂らした一本の糸にすがるような眼差しで、わたしの視線を捉えたのだ。
わたしは、彼の顔を黙って見続ける。
それほど、その顔は、おもしろかった。
真っ赤で、鼻穴が開いてて。息がマヌケな音鳴りで。微妙に震えてて。
なにより目が、視線が、ぜんぜん定まらず。わたしの目を見て、鼻を見て、唇を見て、喉元を見て。はっと、また目を見て。
わたしは、必死に、笑いの衝動を抑え込んで。
この位置関係なら、直接見なくとも、視界の中に見えているはずなのである。それを——
思春期の、普通の、健全な、スポーツ少年。必死に——
必死に——

わたしは、ちょっとだけ、腰を振るわせてみて——

最初から、わかっていたけど。
わたしの、勝ちだった。
彼は、尾形くんは。ついに、視線をスカートの中に侵入させて。
丸出しのわたしのソレを、真っ正面からガン見して——
はっと、気付いて。
そのときには。
もう遅い。
自分のやらかした行為を、取り戻せなくて。ミスからの敗北を自覚して。
わたしにとって、まるで映画のような光景だった。

彼は、絞首を言い渡された死刑囚のように、ドラマチックに瞑目し、顔をしかめ――うなだれ――
素直な少年の、真実の姿が、そこに展開されていたのだった。

彼は、悄然と立ち上がる。そして、言った。
「おれは、お前には、不合格だったようだ。よくわかったよ。これほどハッキリと納得させられたことは、生涯なかったってほど、カンペキに理解させられた。お前スゲエよ。貴重な機会をあたえてくれて、感謝する……」
時間がなかった。
わたしは最後に命じた。
「キスして」
当然、彼は驚いて。敗者への労り、気配りならと無用だと、なにやら口にして。
わたしは目を瞑り、顔をあげて。
長い人生に比べたら、キスへのためらいは、一瞬で。
ごくりとつばを飲み込んだ、彼のケモノの気配が近づいて。
身体が、やさしく、強く、抱かれて。
唇が、やわらかく、すぐにむさぼるように重なって。

１０人目、ゲット……。

コトが終わったあと、わたしは地面の白いパンティを拾い上げた。
どうやら、間に合ったようである。だから。
もはや用済みになったそれを、惜しげもなく、焼却炉の中に捨てたのだ。

■６■

綺麗な夕日が、とある一つの教室の中を、照らしている。
その光を浴びて、ヌードで床に転がっているのは、一人の女子生徒。
淫らに崩れた表情、全身白濁にまみれた――
丘さん、だった。

丘歩子。
見た目、シャープな感じのする、眼鏡の美少女。
小学生のような背丈に、アンバランスな巨乳をくっつけた女だ。
その女が、屈強な男子１０人に嬲られている。
制服はボロボロに引き裂かれ、むりやり身体を開かされ。
力ずくで押さえつけられ、四つん這いにされ。後ろから。
ひっくり返されて、前から。
１０人、入れ替わり立ち替わり。なんども、なんども。
最初、口汚く罵っていた彼女は、やがて押し黙り、歯を食いしばり。強情な表情が、徐々に、とろけていき。息を乱し。最後の方では、切なく淫蕩な声をたてて。犬のように自分から腰を振りだして。
自慢の巨乳、恍惚に濡れた穴。
好き放題、いじくられて……。

……といった光景が記録されているはずのメモリーカードを、今。
教室に現れて、１０人から受け取ったところだ。
丘さんは、登場したわたしを見て、目を丸くして。そして、一瞬で事情を把握したようだった。
あらためて、聞くに堪えない罵りの言葉が、とめどもなく噴射される。
対して、わたしは一切口をきかない。
１０人の男子（もはや知れたろう、一日かけて集めた下僕らのことだ）も、一切無駄口をきかない。

このわたしが実行したみたいに、もしかして彼女の方にも、ボイスレコーダーのたぐいの用意がされてある可能性が、あるからだ。
わたしは白手袋で１０枚のメモリーカードを扱い、即座に、自分の携帯から卜部家所有の電脳領域に送信する。
この作業の意味は、彼女には、十分に理解できているはずである。
つまり、デス・スイッチの構築である。
この先わたしが不慮の事後に遭い、一定周期ごとに求められる更新パスワード入力が出来なくなると、全世界に向けて、いっせいにデータがばらまかれるのだ。
悪魔のような彼女に対して、かなり有効な保険になるはずであった。
彼女は、それほど危険な存在なのだ。

ログインパスワードは、シンプルに、
「私、丘歩子は貴方のスケベなメス奴隷です。」
とした。無言のまま丘さんに見せて、確認させる。
作業を終了して、データ消去したカードを、それぞれに返す。
その中の一人。尾形くんは、受取りながら、なんの感情も顔に表さず。たんたんと。
わたしは――こちらも無感動的に、教室をあとにして。
背後から、再開された陵辱の音が聞こえだす。
無理して１０人集めたのは、正解だった。体育会系の男性教師が２人も釣れたのは、幸運だったとさえ思う。
彼女はそれほどに“タフ”なのだ。これが男子生徒5、６人程度だったら、まず逆襲されていただろう。
彼女の罵声に、聞き間違えようのない、つや声が混じっている。
かってによがれ。ついでに、死んでしまえ。この肉袋！
そう願った。

■7■

一仕事終え、ようやく帰宅の途につけたわたしだったが。
そのとき、わたしはいくぶん、心が急いていたのだろう。足早になっていた。
どうも、今日一日、時間に追われているような感じだが。
だけど、できれば、明るい日があるうちに、済ませたかったことがあったのだ。

眼下に徐々に広がる、街の風景。高台の道。
見晴らしのいい岡の上で、周囲に建物はなく、道路しかない場所で。
その頂上で、わたしのことをずっと待ち続けてくれている男の子がいて。

椿くん――

彼は、わたしに気づき、まるで飼い犬の尻尾のように手を振って。
待ちきれず、こちらに駆け寄ってきて。
「うれしい！」
と、それだけを言った。
「なにがうれしいの？」
わたしだって……明とまた会えて、うれしい。
そんな顔は一切見せず、かえって冷笑気味に、聞き返してみたりするのだ。わたしは。
彼は並んで歩きながら、真っ正直に答えた。
「今日は、もう来てくれないのかと、思ったんだ。だけど、来てくれた。だから、うれしい。もしかして、“日課”は明日にお預けになっちゃうのかな、と心配してたりして、ね――」

少し怯えが混じった、十分に庇護欲をそそる笑顔になる。
バカだと思った。
自分で勝手に不安になって、勝手に安心して。まったく、そうやっていつまでも一人でよがってれば、と思うのだ。
それに。
残念なことに、少し、怒りを覚えていた。
彼の蠅みたいな人品に少しでも期待してしまった、自分が１００％悪いのだとは承知している。
だけど――

わたしは、椿くんに会うために、息を弾ませて歩いて来たのだ。
わたしが、約束を破る、なんて、ありえないのに。
わたしは、人から疑われる人間じゃないのに。

それに、“日課”ですって？

あなたは、わたしよりも“日課”のほうを心配してたの？
“日課”って、あなたに必ずして差し上げなきゃならない義務なの？
冗談じゃない。
許さない。
裁判の上、有罪ならば、相応の罰を与えるべきだ、と思った。

「土下座しなさい。いますぐ、ここで」

■８■

椿くんは、拍子抜けするほど従順だった。
一回息を飲むと、真剣な眼差しをわたしにくれ。

そのあとは、実に素直に。
地べたに、きちんと正座し。両手をつき、頭を地面スレスレまで下げてみせたのだ。
ここは学校の裏手ではない。いくら人通り、交通量がないとはいえ……つまり、少しはあるのである。
簡単に、できるマネではなかった。
不覚にも、少し感動を覚えたくらいだ。
「すみませんでした……」
だがさらにわたしは命じたのだ。テストは、これからだった。
「いいって、言うまで、顔をあげちゃ、だめだからね」
「……ハイ」
わたしは満足して、非常に満足して。つまり、非常に満足して。とても満足して。
はっきりと興奮して。興奮して。興奮してしまって。
震える両手を。ぶるぶる震える両手を。両手を。
スカートの中に入れ――

スキンカラーのパンティを、最大限の興奮と羞恥心の中、完全無敵に脱いでみせたのだ！

今日、わたしは2枚、パンティを重ね穿きしていて――
つまり、最後の一枚を、今。彼の前で脱ぎ捨てて――
「――ッ！」
脱ぎたての、体温と湿気、染みと匂いの残るパンティ！
それを、土下座した椿くんの、すぐ前にフサリ、と落として――！
わたしの仕草の雰囲気と、音とで、どんな事態が発生したのか想像ついたのだろう。今の時点で、彼は、耳の先まで真っ赤にさせている。
わたしは脚を少し開き気味にしてから、震える声で命じた。

「ゆっくりと……か、顔をあげなさい。わ、わわ、わたしを、み、見てごらん……」
哀れ！　彼の心拍音が、音として聞こえてくるようだった。彼の今までの人生で、これほど心臓を酷使したことが、はたしてあっただろうか。ないに決まってる……いや違うッ！
これは、わたしの、心拍音だ！　そうだ、これは、実はわたしの喘ぎ声ッ！
「ハァ……ハァ……ハァ……！」
わたしは顔真っ赤だった！
うわあああ！　わたしッ！
お願い誰か助けて下さい！　助けなくていいですああ神様――！
身体が熱い！　汗が、身体をぬらぬらと！　ああ、丸出しのあそこから、スケベな粘液がぬらぬらと――！
恥ずかしい！　恥ずかしい！　恥ずかしい――！
ああ椿くんは！
言われるままに、そろそろと顔を上げてきて。上げてきているうううッ！
最初に、わたしの匂いするパンティを、視界に捉えて。
そろそろと。わたしのつま先から、足首、膝へと。ふとももへと――
わたしは震える、震える――！
風が、吹いた！　神様――ッ！
スカートがめくり上がり、わたしは、わたしは、完全に丸出しの――！
でも、堪えた。堪えた。わたし、堪えたんだ！
手で、スカートを押さえたい！　今すぐマッハで隠したいッ！
でも、でも、でも――！

（ああん……あ……あ……明、明、明……あん、あん、あん……あふうン……）

見て！　見て！　見て！　わたしの、いやらしい、ふしだらな姿を！

（明……明……あうあ、あふ、うあああ……あっあああ……明……明！）

神様だって、今あなたに味方してるんだ！　この風が止まないうちに！

（――ああ！　明！　ああ！　明！　わたしを見て！！！）

腰をくねらした！

この、この高潔で、潔癖なこのわたくしが、男の子の、男の子の視線の前で！

とてつもなく淫らな、スケベな、丸見えさせて。粘液を垂れ流しながら。

前後に、左右に、くねくねと、ヒクヒクと――あああああッ！

一気に喉が渇いた。頭の中が、ぼうっとなり――

わたしは――

わたしは、知らず右手人差し指を、口に含んでいて――

ちゅぱちゅぱ……ちゅるり……。

ぺちゃぺちゃ、ちゃっぷちゃっぷ……。

わざと、下品な、大きな音をたてて。

ちゅるるる……ちゅぱっ、ちゅぱっ、ちゅ、ちゅ、ちゅ……。

指を引き抜いて――

その指に、“よだれ”はねっとり絡みつき――

“よだれ”は輝きながら透明な、糸を引き――

“よだれ”は生暖かく、匂いして――

ふと、気付くと。我に返ると。

椿くんは、椿くんは――

│

│

│

│

わたしの右手人差し指に、目を釘付けにしていて――

■9■

「……」

指を差し出すと、椿くんは、指にむしゃぶりついたのだった。

「あむっ……あむ……うむ……あふっ……」

わたしは、指を引き抜いた。

そのまま。

彼の横っ面を、張り倒した。

くるりと背を向けた。

歩き去る。

わたしの両目は、涙という液体を、とめどもなく垂れ流し続けていたのだった。

■１０■

マンションの姿が、ようやく見えてきたときだ。
そのとき、わたしの背後を、一定の距離を保ちながら歩く人物に、気が付いた。
ああそうか。と思った。
わたし、ノーパンだったっけ。
歩くたびに、スカートの裾が跳ねて、股間が見えるんだったっけ。
お尻のふくらみのラインが、丸出しになるんだったっけ。
ああそうか。
そうかそうか。
そうですか。

エントランス前の階段を、お尻を振りながら上った。下からは、お望みの光景がほしいまま。ご期待に添えることが、できたでございましょうか。
階段を上りきり、エントランスの自動ドアを暗証キーで開ける。
そのころになると、その男は、ぴたりと背後に張り付いて。
いっしょになって、建物内部に入ってくる。
わたしは一切気せず、真っ直ぐエレベータに歩いて。
エレベータの箱の中に、二人して入ったのだ。

ドアが、閉じられて。とたん――
「下部ちゃん……！」
意外にも男がわたしの名前を口にし、抱きしめてきて。

ああ、これはこれは。
ご機嫌いかが、隣の部屋の住人様。たしか、どこかの大学生でございましたっけ？
彼は、わたしを強引に正面に向かすと、左腕で逃がさないように抱きしめて。
右手を、スカートの中に入れてきて。
あらあら、大学生のお兄さん。おスケベでございますねぇ。
どうぞ好きになさいませ。どうせ、こんな場所じゃ、たいしたこともできゃあしません。
あらあら、息が荒くなってます。少しは落ち着いたらどうですか。
大学生のお兄さん。ああ、やっぱりあなたも、バカなんですねぇ……。

そして、準備が整って。

「キスして。お兄ちゃん……」
そう言って、わたしはしやすいように、顔をあげる。
彼は、一瞬だけ信じられないという顔をして、すぐに歓喜する男の顔になり、次の瞬間には、けだものに回帰して。
わたしの唇に、むさぼるように重ねてきて。強引に口を開かせて

---

わたしは、ここぞとばかりに、“麻薬よだれ・特濃”を、ぶち込んでやったものである。

瞬殺。
彼は、あっという間に、堕ちて。
エレベータが階に到着する。ドアが開く。
わたしは彼を支えながら通路に出る。耳に命令を吹き込む。
鍵を出して、あなたの部屋を開けなさい……。

恥辱まみれの一日。
今夜は、血を見ないと気分が収まらない。隠しポケットに入れてある、必殺安全ハサミがうずうずしている。
なに、自分の部屋でなきゃ、たとえ血を流そうが、汚物を垂れ流そうが、知ったこっちゃない。
マンションの防音はカンペキだし。
部屋のドアが開いた。
わたしは、まるで獲物を巣穴に運ぶタランチュラのように、彼を、四角い穴蔵の中に引きずり込むのだ。

今日一日。キスのサービスディだったわ。
そう思うと、堪えきれなくなって、笑いが噴出する。大声で笑った。涙が溢れた。
笑いながら、泣きながら、わたしは壮絶に、男を引きずり込む。

※

卜部美琴と、大学生が、中に入り。ドアが閉じられた。

もはや、音は聞こえない。

## 第２４話　謎の偶像

§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§
（この人物紹介ページは縦書きＰＤＦ用に整形しています。）

◆おことわり◆
ファンフィクションです。詳細は１話に記載。

◆登場人物紹介◆
卜部美琴（うらべ　みこと）
椿明（つばき　あきら）
丘歩子（おか　あゆこ）
上野公平（うえの　こうへい）

以上４名は、１話にて紹介済みです。今回の主な登場人物は←

今井百夏（いまいももか）
職業：グラビアアイドル　芸能人
属性：隠れサド　レイパー
武器：美貌　芸能人としてのキャリア　カリスマ性
覚醒剤　大麻　鞭　ロウソク
状態：卜部そっくりの外見を持つ。これは整形のたぐいではなく、全くの偶然である。強いて言えば、バストサイズが卜部より小さい。
「めぐり愛」と称して、全国の高校に転校を繰り返している。各地での交流をテーマとした写真集を発表していて、これがメインの芸能活動となっている。その他、コマーシャルモデルなど多数のリクエストを抱えており、今が旬のトッ

プアイドルである。

芸能活動に便乗して、各地を巡るごとにプライベートな作品をちゃっかり制作しているが、周囲には完全に秘匿しているようである。

中島※※（なかじま）　原作で下の名前が不明

職業：男子高生

属性：写真部所属　盗撮小僧

武器：高性能ムービーカメラ　その他撮影道具

状態：クラスメイト女子を撮影した素人写真を、クラスメイト男子に数百円程度で売りさばき、小遣い稼ぎをしている。そこだけ見ると、どこにでもいるごく普通のカメラ小僧に思われるが、実はそれこそカモフラージュのために、わざと行なわれているものなのである。

実態は筋金入りの盗撮プレイヤー。そのキャリアは長く、幼少のころからデジカメを手に、近所をうろつき回っていたという。

作品はネットで秘密裏に販売し、それがメインの収入源となっている。その収益はすべて最新の機材に投入され、新しい技術の習得に余念がない。自身に関しても、シャッターチャンスを物にするための、体力、気力の鍛錬。盗撮犯罪人としての嗅覚、危機回避能力、テクニックの学習など、日々スキル向上に努めており、怠りない。最近は外国語会話やコミュニケーション術、心理学のレッスンも受け始めた。もはやプロ（？）と言って差し支えない第一級のカメラマンである。なんでその熱情を健全な方向に向けなかったのか。実に惜しまれる逸材である。

§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§

■1■

わたしが、転校してきた。
もちろん、比喩的な表現だ。
「はじめまして。※※※※といいます。これからよろしく！」
そう、黒板の前に立つ転校生は挨拶した。ニコッと、可愛らしく笑顔を見せて。

目元がわたしよりも少しきつめ。
バストは、比べるまでもなく、わたしの方がおっきい。
それ以外は、鼻や口元、輪郭など顔の造作、頭のサイズ、首の細さ、肩のライン、背の高さ、手足の太さ長さ、ウエスト・ヒップサイズ、まったくと言っていいほど、わたしとうり二つだ。指の細さから爪の形、髪の毛の長さまでいっしょ。多分、体重もそう変わらないだろう。
これで前髪を前に垂らせば、そこにほぼ完璧なわたしが出現する。
世界には、自分と檄似した他人が三人はいると言う。
まさにその一人目が、なんの宇宙的な力が作用したのか、この学校に、このわたしの教室に、転校してきたのだ。
ところで名前、すなわち“本名”が頭に入らなかったのは、この人には強烈なネームバリューがある“芸名”があったからだ。
「ひょっとして、今井百夏（いまいももか）の名前の方が、みなさんには通りがいいかもしれませんね！」
そう、今井百夏。
今まさに旬の芸能人。トップグラビアアイドルなのだった。

以降、本名ではなく、この芸名を使う。
教室の男子生徒がざわめいている。女子の大半も、突然現れた芸

能界の人間に浮ついている。
　さっそく、男子から質問が飛んだ。
「なんでこの学校に来たんすかー？」
「もち、ここで新しい“めぐり愛”をするためでーす！」
　とたん、キャーという女子生徒の歓声があがる。今井さんはその機を逃さず、熱っぽい視線を教室の一人ひとりに走らせ、さらなる嬌声を引き出すのだ。そんなところはさすが、芸能人だと思う。
「このガッコを超強烈にプッシュプッシュしてくれた人がいたんだよー！」
「うわあ、それって誰っすか？」
「ヒ・ミ・ツ〜！」
　幼稚な回答にそこら中から奇声があがる。なんども同じフレーズを繰り返して恥ずかしい限りだが、人心を掴む技はさすがトップアイドルと言えよう。
　当然というか、このころにはわたしはもう、今井さんに対する興味をなかば失っていた。
　別に貶すわけではないが、わたしには、少し軽薄すぎるお方のように思えたのだ。一言で言うと、趣味じゃない。申し訳ないが、もともと芸能界やアイドルというものに、そんなに興味もなかったし。
　じゃあなぜ今井さんを知っていたのかというと、それはまさに、前述の事情があったからだ。（前髪を下ろしたら）わたしとソックリになれるヤツがいる！？　その一点があったため、とりあえずチェックだけは入れていた。ただそれだけのことなのだ。
「そろそろいーだろー……」
　担任の先生の声があがる。
「じゃあ、今井クンの席は――」
　先生の指示を受けて、今井さんは長い脚で優雅に歩き出す。そしてわたしの隣の隣、つまり椿くんの隣の席に着席した。
　横、つまりこちらに向き、挨拶がわりにか、魅力的にほほ笑む。
　自分の美しさを十分に把握しきっている自信に溢れたまばゆい笑

みだった。
そんなことがわかるのだ。なぜって、アレは自分だし。
……しらけた。
それ以上興味を向ける気がなくなり、わたしはうつぶせになり、睡眠の姿勢になったのだ。
だから――
このときわたしは不覚にも、知り損なったのである。
今井さんのご挨拶に。
椿くんが、どう反応したのか、を、だ――

■2■

席が隣、ということもあって、その日一日、椿くんが今井さんのお世話をすることになった。
学校の各教室の案内から、授業の内容まで。雑談で先生の情報とか、地域の話題とか、結構二人で盛り上がっていた様子である。
その熱気溢れる交流は下校時も続き、わたしは彼ら二人の後を間隔を開けてついていく、という恰好になった。
二人は、なんとほとんど肩を触れあうように並んで歩き、笑いあったり、ときおり腕をからめたりなんかしている。そこだけ見ると、事情を知らない人だったら、なんて言ったらいいのか……気の置けない、大親友の、間柄だと思いこんでしまうだろう。そんな……なんて言ったらいいのか……アツアツぶりだった。一言申し添えると、今井さんが一方的に、積極的に、べたべたと接触しているのである。それに対して、椿くんは困惑顔ながらも、まんざらでもない、という素振りを示している。というわけだ。
わたしは、もちろん。ジェラシーとかいう下賤な感情は持ち合わ

せてはいない。ましてや、あの二人に対して、そんなもの抱くわけがないのである！　なんたって、あの椿くんだし、あの今井さんだし。

まあ……。

あんなに積極的なのは、椿くんのみてくれの良さに気づいてのことだろう。かろうじて、その審美眼は認めてやってもいいと思う。

それにしても。

わたしの先を、椿くんとわたしが、楽しげに肩を並べて歩いている。

そうなのだ。

わたしの美しさは今更だからいいとして、あらためて、椿くんは愛らしい少年だと思うのだ。

背の高さは、わたしよりも2、3センチほど低い。彼氏としては、それはどうかと思うのだが、性欲（おもちゃ）の対象としては、それがプラスに作用していると言えるだろう。彼に身近に接するたびに、芳香匂い立つ少年の柔い肉体を抱きしめ、官能を思う存分に貪り尽くしたいという劣情に狂わされるのだ。

だがその一方では、美少年の儚さという、手の触れようのない霊的な高みに頑然と拒絶されてもいる。

彼の美の前に、己の性根の醜さを自覚させられ、激しく鬱に襲われて――

「……」

わたしはゆっくりと首を振る。詮無きことは、これ以上考えないようにしよう。

「……」

わたしの先を、椿くんとわたしというお似合いのペアが、楽しげに肩を並べて歩いている。

もしわたしが、あのように椿くんと歩いたら、あのように見えているのだろうな……。

……バカなことを考えてしまった。自己嫌悪。
軽くショックを感じているその先で。
二人は、わたしと椿くんの日課の場所を、そのまま通り過ぎて行ったのだった。
わたしの住所はここから道が変わる。
そうね、と思う。
一一日くらい、椿くん、大丈夫でしょ《・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・》。
わたしは気持ちをすっぱりと切り替えると、帰宅の途についたのだ。
だから。
このときわたしは不覚にも、気づき損なったのである。
この下校の間、椿くんが。
椿くんが、一度もわたしに振り向かなかったということ、に、だ

■3■

翌、火曜日。
この日も昨日同様だった。二人は始終連れ添い、楽しげに談笑したりしていた。
下校時もまったく同じで、わたしは前日をなぞったような感覚に陥った。
やっぱり一度も後ろを振り向かず、分かれ道を素通りして行く。
椿くんはけっこうミーハーだ。思いがけずアイドルと親しくなれて、舞い上がっているのかもしれない。

でも、いくらトップグラビアアイドルとはいえ、今井さん相手に、ああまで夢中になれるのだろうか……と考えたところで、いきなり得心する。今井さんは、わたしとクリソツなのだ。

椿くんは、今井さんを、わたしの手軽な代用品に考えているのだろう。そう考えると、納得できないこともない……。

一部もやもやした気持ちのまま、わたしは一人、帰宅の途についた。

水曜日。

この日も、まったく同じだった。

学校に来て、一日過ごし、家に帰る。

椿くんはもう、今井さんにはっきり夢中で、わたしに一瞥すらしない。

別に椿くんがどう振る舞おうと、わたしに関係ないのだから何とも思いはしないのだが。

小憎らしいとは絶対思っていない、のだが。

正直、わたしはそろそろ心配になってきていた。別の意味でだ。

というのも。

“よだれ”の投与つまり日課を、これで三日も果たしていないのだ。

このわたしが、取るに足りない下僕の身を案ずるのは滑稽きわまりないことであるのだが、これも主人の務めというものなのだ。健全な一般社会に害が及ばないように管理する義務が、犬の飼い主にはある。保健所も引き取りを拒否するクサレ奴隷を持ってしまった身の不幸は、大いに同情していただけるものと思う。

けっして大袈裟な物言いではない。それほど、わたしの一族の秘術、“麻薬よだれ”は、強力なのである。

「……」

そう――

かつて。

差し障りがあるので、いつか、は言えない。日本の暗黒時代、と

仮に言っておこう。我が一族は、人体実験を行ったことがあったのだ。秘密裏に。
記録によれば、屈強な成人男子の場合、一週間で禁断症状を発症したとのこと。
発狂したのである。
こうなったらもう手遅れで、よだれを与えても、元に戻らなかったという。
かの被験者は、全身の筋力が常人の十数倍に増幅し、拘束具を破壊して施設を脱走。途中、着衣を破り捨て、全裸で人里に侵入し、手当たり次第に婦女子に狼藉をはたらいた。それでも足りず、殺気立つ衆人の監視の中、超人的な手淫にふけったあげく、その最中に心臓発作を引き起こし、死亡したとのことである。
女性の被験者の場合もだいたい同じ。
こちらは十日で発症した。これも脱走し、多数の一般男性の魔羅(まら)をくわえ回ったあげく、詳細は不明だが結果的に、窒息死したとのことである。
ちなみにだが、その被害に遭った人里は、市となった現代に、インキュバスとサキュバスの悲しい物語を伝え残している……。
「……」
話が大幅に脱線した。
ようは、それほど、わたしの“よだれ”は危ないものだということだ。
それを、その投与を、椿くんは、三日も怠っている。
ああ。
あの、大マヌケ。ほんとうに、手を煩わせる愚鈍やっこな人であることよ。
しょうがない。真面目にしょうがない。
うん、これはリアルにしょうがないことだ！
明日は、力尽くにでも、“よだれ”をなめさせよう。たとえ、それが今井さんの目の前のことであったとしても、だ。その結果、お

二人の関係がどうなったって、知ったこっちゃない。そんなものよりも、社会平和の堅持の方が、はるかに大事なことであることは、論を待たない。

うん、そうしよう。そうしよう。そうしましょう♪

そう堅く、決意した。

ところが。

翌、木曜日。

椿くんが、欠席したのだ。それも、無断で。

そして。

今井さんまでもが、欠席していて。こちらも、無断欠席だった。

席が二つ、隣同士の席が二つ、ぽっかりと空席になっている。

彼ら以外はほとんど全員が出席している中、その並んだ二つの空の机は、たいへんに、目立っていたのだった。

■4■

金曜日、朝。二人揃って教室に入ってきた椿くん今井さんは、クラスメイトから早速ひやかしの嵐を浴びたのだった。二人は男子生徒にがっしりと取り囲まれ、おもしろおかしく尋問される。おらおら、うりうりうり、と自白を強要される。

椿くんは顔を紅潮させ、まったくの偶然だとシラを切ったが、信じる人は一人もいない。

ああ、バレない嘘の、つけない少年であることよ。

それでもけっこう頑張ったようだったが、その甲斐もなく、別の方面からもろくも崩れてしまった。

今井さんが、困ったなー、と笑いながらあっさり白状に及んだからだ。

「きのうはねー。アキラと、海に行ったんだよー」
とたん、うおお！　とどよめく男連中。そして、女子生徒。一人、焦りまくりの椿くん。
「もしかして、泳いだんすかー？」
その興奮気味の問いには、今井さん、可愛く小首をかしげて。
「泳ぐって、ハダカで？」
またしても、うおううおう、きゃああ、きゃああ――
バカだ。うちのクラスの連中。バカしかいない。
「なんでそうなるッ！」
「だってー、海行くって決めたの、登校途中に突然だったんだもん。水着なかったしー」
「マジ？　ほんとにマジ、マッパで泳いだの？　二人して？」
「えー、ハダカで泳ぐのー？」
「えっえっえっ、裸で泳いだんじゃないの？」
「水着なかったらー、フツー泳がないよネー」
「えーっ、なんだー、泳がなかったんだ。ちぇー！」
「制服着たまま、泳ぐわけないじゃーん」
「なにそれなんなんだよー！　脱いだんかよー！　どっちー？」
「人はみな、脱いだら、ハダカになるんだよー」
「うわあはは、このヒトー！」
「ウフッ……アキラに、み・ら・れ・ちゃったー」
「ギャーッ」「ギャーッ」「ギャーッ」――

やかまし。

ともあれ、さすが芸能……（コホン）、プロに、翻弄されっぱなしのクラスなのだった。
もう一人の主役のはずの椿くん。笑っちゃう。炎のような赤い顔して、もうちっちゃくなっている。
騒ぎは時間が来て先生が入ってくるまで続き。椿くんやっと解放

してもらえても、休み時間になるとまたしても捕まり、過激に盛り上がる輪の中に閉じこめられて。エッチな言葉責めにさらされる。
うぶで、見た目が可愛いから、さぞかしイジリがいがあるのだろう。だがしかし。
困った。
このあとどうやって、あの子に“よだれ”を届けたものかしら……。
頭が痛い。
そればかりに関心が行ってしまい、だから――
このわたしとあろうものが。
ついに、自力では、気づくことができなかったのである。
目の前で繰り広げられている、クラスメイトの異常さと。隠された悪意に、だった――

■5■

それを指摘してくれたのは、あろうことか、三下魔女こと丘歩子（おかあゆこ）だった。
見た目、シャープな感じのする、眼鏡の美少女。
小学生のような背丈に、アンバランスな巨乳をくっつけた女だ。
昼食の時間。
日の当たるベンチに二人並んで座り、その丘さんが作ってくれたお弁当をパクつきながら、なんとはなしに転校生の話題を聞かせると、彼女は露骨に蔑んでくれたのである。
「ああ、私って、バカだったわ」
なにを今更。と不思議に思ったが、次のセリフのための、つまんない前置きだった。

「アンタの黴が生えた脳みそに、ちょっとでも期待してただなんて。末代までの恥というものだわ」
「なんのこと」
このだし巻き卵、感動ものだ。風味が生きてる。
「あれほどのトップアイドルがやって来たってのにさ。なんでアンタのクラスの連中、あっさり明に譲っちゃったわけ？　普通だったら、争奪戦がおこるとこじゃない」
「あなたの言う普通って、ほんとに普通のことなの？　現実が、見えてないんじゃない」
彼女は一つため息をつくと、万感の思いを込めて、一言つぶやいた。
「バーカ……」
このタコウィンナーもなかなか。手間がかかっていて、それだけでも嬉しいじゃないか。
「明、あの子に、取られるわよ」
「正直、今の段階で、9割9分がた持って行かれてるって感じかな……」
「余裕のようだけど。アンタ、分かってんの？　このままだと明、死ぬよ」
「うん。それには同意してもいい。このままだと明、死んじゃう。だから、なんとか――」
「バカ！」
珍しく、丘さんが怒りで興奮していたのだった。
“死ぬ”意味がズレてる！　アンタほんとどうしたってのよ？　アンタなら何とかするだろうと期待してた自分が許せないよ」
紙パックのお茶を飲む。カラになったお弁当箱のフタを閉じた。
「ごちそうさま」
おいしかった。彼女は料理が上手だ。
「まあまあ食えたわ」
そして頭もそこそこ回る。ときに、わたしに迫るくらいには、だ。

丘さんに初めて顔を向けた。
「聞いてあげる。話してみたら」

■6■

「“アイドル・今井百夏”には、さらにもう一つの“異名”がある？」
と丘さんは、まるでわたしを探るように語り出した。
「……アナタのその様子だと、百夏のこと、何にも知らないようね」
そのとおりだから素直に頷く。これは、別に、恥でもないことだ。
「確実に、—アッチのことに潔癖な明も、百夏の正体を知らない《・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・》」
「……」
わたし、なんにも言葉を挟めない。彼女の説明を待つばかりだ。
「だけど、アナタら二人以外は、ほとんどの人が知っている。知らない人がいてたとしても、もう、現時点では、クチコミで知れ渡っている。だから全員、すんなりと明をスケープゴートに差し出した」
「……話が、穏やかでないわね」
「そうよ。そんな話だもの」
「で？　そろそろ“異名”てのを、あかしたらどう？」
丘さんはわざとらしく一呼吸入れた。会話の主導権を手放す気はないようだ。
「“スクールイーター”。……それが、百夏の正体だよ」
学校喰い。
まどろっこしい丘さんの話を要約する。

今井さんはずばり、“裏ＡＶ界”の、トップアイドルだった――ということだ。

表は、ちゃんとした事務所に所属する人気グラビアアイドル。

裏に回れば、個人事業のＡＶタレント、だとのこと。それも、モザイクも規制もなんにもない、地下で出回る“裏物”の、である。

今井さんは表での知名度を悪利用し、荒稼ぎしているとのことだ。

今井さんは、「自分主演」でビデオ作品を制作する。そのテーマは一貫していて、『学校物』だった。

舞台は、自分が通う高校。

今井さん以外のキャストは、自分の同級生。

監督・編集は自分だが、カメラマンは、これもその学校から人材を調達する。

もちろん、カメラマン役には事情を明かして説得する（相当な金が動く）が、それ以外、すなわちキャスト、舞台にかんしては、事前の許諾がない。（あたりまえか）

すなわち――舞台は、無断借用の本物。同級生は本気になって今井さんと愛を確かめて……。

そのさまを素人カメラマンが隠し撮りをし、結果、実にリアルな映像が得られる、という仕組みである。

作品は、秘密裏にネットを通じて高額で売買され――

あとは、時間の問題。発覚する前に、今井さんは次の舞台へと転校していく――

作品が露わになったその後のことは、関知しない。

その生徒がどうなろうと、その学校の評判がどうなろうと、だ。

たいていは、もみ消しになる。が、ときには自殺騒ぎが起こったり、入学希望者ががた減りしたりすることもある。

それゆえの、異名だった……。

「これが証拠」

と、丘さんが数枚のプリントを手渡す。そこには、なんとこのわたしが、ここではないどこかの学校で、あられもない姿で、だれとも知れぬ生徒と、猥褻に絡み合っている画(え)があった。うわっ、一枚なんかは、性器モロ見えで交接している。やってくれるわ……。

慎重に行くならば、現物のビデオで確認すべきだが、……これは、信用してもいいだろう。

「いまさらカマトトぶらないわよね？」

丘さんが言った。以下、丘さんのセリフが続く。

「みんな、椿明の、穢れのない神がかった美にこまぬいている。誰もが、彼を犯したい嬲りたいと願い、毎晩オナニーしている。せめて彼の、美少年童貞の、見られたら死ぬほど恥ずかしいビデオを覗き見たいと熱望している。男の子も、女の子も」

「ただ――」

「相手は誰でもいいって訳じゃない。明ほどのタマには、それに見合うタマでないと許されない」

「その点、百夏は、ぎりぎり妥協できる、人材(タレント)ってわけ。……理解できたかしら？」

丘さんは、厳しくわたしに言った。

「それをすることによって誰が利するのか。それは、誰に実行可能なのか。推理の基本だわ」

最後に。

「これ以上節穴、と言われたくなかったら、現実をその目でしっかり見ることね。隠しているその前髪を、上げてみたら？」

そうセリフを捨てるとわたしから弁当箱を受け取り、彼女は背を見せたのだった。

■7■

風が吹いた。
わたしは一人、ベンチに腰掛けている。
ビッチな丘さんに、好き勝手言われてしまった。
苦笑する。今日のわたしの星占いは、きっとドンケツだったということでしょう。
首を振る。
今井さんの裏の目的。
そうだったんだよと、別に聞かされなくても。
だれかに言われるまでもなく。自分は自力で解決するつもりだったのである。本当だ。
だって話は単純。椿くんを取り戻すだけ。
たったそれだけのことなのだから。
だから、本気を出すのが、少し遅れた。それだけのことだ。
それを丘さんったら。取り乱したりなんかしちゃって。なんて醜いんでしょう。あまりにも人としての器量が小さすぎる。
わたしはため息をつく。
ああ、賢いということは、辛いものよ。バカの言うことをいちいち聞いてあげて、結果的に尻ぬぐいをしてやらなきゃならないし。
不満を言い出せば切りがない。
「順に、確認しよう……」
わたしは声に出して、気持ちを切り替えた。
今回の出来事。
いろいろと印象に残った点が、多々あった。

※

一つ。今井さんは、わたしにそっくりだ。
二つ。わたしがいるこの学校に、転校して来た。

三つ。転校の挨拶の時の質問、「なんでこの学校に来たのか？」

四つ。それに対する答えは、「この学校を強力に推薦した人物がいた」

五つ。椿くんが、わたしの“よだれ”を忘れるほど、深く今井さんに心を奪われた。

六つ。つい昨日のことだ。彼らは、二人して無断欠席し、海に行った。

七つ。今日は金曜日。今日が金曜日だということに、不思議さを覚える。なんだろうこの感覚は？

八つ。丘さんからの、今井さんに関する、押しつけがましい情報提供。

九つ。椿くんのタイムリミットが迫っている。

※

「……とりあえず」

こんなところだ。

わたしは一つずつ検討する。

※

一つ目。偶然だろう。

二つ目。一つ目が多分に影響していると考えるのが妥当。少なく

とも全く関係ない、ことはないはず。

三つ目。わたしはてっきり、転校は、純粋に、今井さんの芸能活動の一環のことだと思っていた。（「めぐり愛」がテーマ？）

が、今や、わたしは今井さんの「裏の目的」を知っている。

四つ目。これは二つ目に関係している。すなわちその「人物」は、わたしを知っている。

五つ目。芸能人の手練手管に嵌められたから……と、簡単に片づけてしまうのは浅慮というもの。

そもそも、一般に高嶺の花であるアイドルが、なんでノーメリットで、パンピーである椿くんに、積極的にアプローチをかけなきゃいけないのか？

では、その理由（メリット）とは？

一つしかない。椿くんの、そんじょそこらのアイドルを軽く蹴散らす、数億万人に一人という貴重な宝物のような美貌だ。

つまり今井さんは、はじめから、椿くん目的で、転校して来たのだ。

それしかない。

ここまでをまとめると、「強力に推薦した人物」は、椿くんのエロビデオを見たいがために、（椿くんが唯一心を開いている、この）わたしに似ていて、かつ、その手の「裏の趣味」を持っていたタレントを用意した。ということになる。

六つ目。昨日の時点で、あとたった二日待てば、土日の自由時間が来るってのに、なぜか目立つ行動を起こした。

ここだけ取り上げると、なかなかのドラマシーンだ。青春してるんだね、と思わせる。

文字通り、山場なのだろう。ビデオの。

七つ目。繰り返しになるが、昨日は木曜日だったのだ。
つまり今日は、明日という休日の前の、みんなが揃う、この日一日しかない平日なのだ。
だから、この刺激的な話題を今日中に燃やし尽くそうと、みんな異常に盛り上がった。
クラスメイトは完全に、今井さんのサポーターになっていた。
まさに、こっちがつけ込めないほどに。
これは、「計算」というものではないだろうか。

八つ目。ようするに丘さんは、（そしてわたしも、）外部の人間に椿くんを渡したくなんかない、というわけだ。
（ただし丘さんは、相当事情に通じていることに留意のこと）

九つ目。明日明後日は土日で、自由に動かれたら捕まえようがない。
（ただし、作品のテーマは『学校物』であることに留意のこと）

※

「――以上により」
できれば今日中に。
決着をつけなきゃなんない、ということだ。
それも、ハッキリと、今井さんを“ツブス”方向で、である。
椿くんを取り戻すために、今井さんを打ち負かす。降伏させる。
丘さんの話を聞いてしまった現在、今井さんという存在は、いてもいなくてもどうでもいいただの“空気”から、なにやら“悪の組織の大幹部”ほどまでに、めでたく昇格されたってことだ。
ご当人には是非喜んでもらいたい。

まぁ冗談はここまでにして――さて。
「どこから、手を付けたものかしら……」

■8■

考えるまでもない。
カメラマンである。

今井さんの「裏」ミッションで、一番のアキレス腱が、カメラマンなのである。
だって、そうでしょう？
ここさえ押さえてしまえば、今井さんは、作品は、もう、どうすることもできやしないのだから。
つくづく思う。
個人事業の限界。
今井さんは、なんぎな仕事をしていると。
わたしのような“外敵”からカメラマンを守らないとならないし。
それ以上に、“自分と作品”を、“カメラマン”から守らないといけない。
ここで前者に関しては、ある程度カメラマン自身の才覚に任せてもいいだろう。逆に言えば、それができるカメラマンを採用したらいい。
困るのは、後者だ。才覚ある人材であればあるほど、後者のリスクが高まってしまう。
例えば。
性癖によっては、自分にもヤらせろと、途中で撮影を放り出すかも知れない。

報酬をつり上げ、撮影した動画データの提出を拒否ってくるかもしれない。
すんなり提出してくれたとしても、実はこっそりと、コピーしているのかもしれない。
こうしてみると、意外にも今井さんは、立場が弱いのである。

だけど。
これくらい、キャリアを積んだ今井さんは十分に認識しているはず。
当然、カメラマンが裏切らないように、何らかの手段を講じているはずである。
今井さんは、わたしだ。
だったら――
わたしだったら、どうする？
カメラマンに、契約を遵守させるために、どうする？

わたしは、知らず右手人差し指を、口に含んでいて――
ちゅぱちゅぱ……ちゅるり……。

指を引き抜いて――その指に。
“よだれ”はねっとり絡みつき――
“よだれ”は輝きながら透明な、糸を引き――
“よだれ”は生暖かく、匂いして――

わたしだったら――

“心”を縛る。

そして、今井さんは芸能人。さぞかし、素敵な“薬”とも、親しんでいらっしゃることでしょう。

濡れる指先に、わたしの顔に笑みが浮かぶ。
カメラマンは、だれ？　あなたは、だあれ？
この人差し指を突っ込むあなたは、だれでしょう？

思い出す。たった一日前のことを。
木曜日の朝。今井さんと椿くんは、無断欠席をした。
隣同士、二つ並んだ空席のインパクトが強くて、うっかり見落としていたが。
実はもう一人、普通に（風邪の）届け出をして、休んだ人間がいたのだ。

中島くん。

それは、中島くん。
女子の水着姿、パンチラなど、ケチな盗撮写真で小遣い稼ぎをしている、写真部部員だった。

■9■

わたしは慌てて首を振る。
いけない、いけない、侮るな！
彼を――
けっして、見くびってはいけない。
中島くん。
今井さんと契約を結んだ、カメラマン。
それは、つまり。

―このわたしと契約を結んだカメラマン《・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・》。

慎重になれ――わたし！

中島くん。

もとからの、盗撮マニア。

日常的に、警戒は怠っていないはず。危機管理に関しては、ある程度のスキルがあるだろう。

彼を攻略するためには、それなりの仕込みが必要だ。

ここまで考え抜いて、わたしは……。

風が吹いた。

わたしは一人、ベンチに腰掛けている。

風が、わたしの髪の毛を掻き乱した。

「……」

感じる。

身のうちに。

静かに。

怒りが――

わき起こっていることを。

この怒りは。

今井さんに向けられたものではない。ましてや。

椿くん、中島くん、その他のクラスメイトに、向けられたものでもない。

丘歩子――

に、向けられたものだった。
「あの……クソ魔女！」
今回の、この状況。
彼女がさりげなく残したヒントは、意地が悪いくらい考慮に値する。その、悔しさだった。
わたしは――

風が吹いた。
わたしは一人、ベンチに腰掛けている。
風が、わたしの髪の毛を掻き乱した。

■１０■

わたしは前髪を上げた――！

その姿で、教室に戻った。
日常的に騒がしいクラス。その一人ひとりが、わたしを認識したとたん、言葉を失う。教室全体に、沈黙が広がっていく。それを、リアルタイムで観察するのは、なかなか興味深いものだった。
さあ、どうする？
わたしは、怒りで哄笑したくなるのを、必死でがまんする。
これは――
だれかがわたしのマネをしたんじゃない。
このわたしが、わざわざ、だれかのマネをして差し上げたのである。
はっきり言ってこの代償は。
高いよ？

一つのミッションが完了したら、転校して去ってしまう人と。
卒業までここに残る人と。
いったいあなたがたは、どちらを選ぶのかしら？

わたしは自席に座る。
椿くんを挟んで。
同じ顔が、両隣に並んでいる。
さぞかし壮観なことだろう。

午後の授業は、かつてない緊張に包まれて始まり。
そして数時間後、今日の時間割はつつがなく、全て終わったのだった。

放課後が始まる。

■１１■

みんな逃げるように一斉に下校し、がらんと静まった、校舎の中。
綺麗な夕日が、とある一つの教室の中を、照らしている。
その黄金色の光を浴びながら、抱き合い、唇を重ねている二人の人影。
今井百夏と、椿明……。

……といった光景だったのだろう。わたしがドアを開けると、椿くんが反射的に体を震わせ、狼狽し、抱き上げた猫が嫌がるように体を仰け反らして、今井さんの腕から逃れたのだった。
椿くんがこちら向きだったので、先に反応した。対して、今井さ

んは背を見せる向きだ。だから、リアクションが一拍くらい遅れるのはわかる。
「……」
しかし――
「……」
いまだまともな反応なし。
教室のドアの開く音、わたしが入室する気配、最後に椿くんの慌てよう、とあって、それでもパニックを起こさないのは、さすが……芸能人。と言っておこう。なかなか胆が座っている。
というか、ドッキリやハプニングには慣れっこなのだろう。どんなことを仕掛けられても、アイドルとして見苦しいさまは絶対見せない。それどころか逆に、この瞬間も、あの頭蓋の中では、この状況をどうオイシク使ってやろうかと、フル回転で考察しているに違いなかった。
なにしろ、今井さんにとって、わたしは今井さんなのだから。
二人のわたしが、一人の美少年を奪い合うという、とっても刺激的な状況なのだから。
それに、昼からのわたしの態度から、衝突は予想していたはずである。すべては自分の“計算”の内なのだ、と。
今――
ようやく。
今井さんは落ち着いた雰囲気で、体をこちらに回しながら、芝居がかったセリフを口にしたのだった。
「卜部さん。ヤボはおよしよ。勝ったのはわたし。キミは負け――」
もしかして、わたしとの肉弾戦を実行する気でいたのかもしれない。今井さんのその挑発的な言葉は、だがしかし、わたしをみとめたとたん、尻つぼみに消滅したのだった。
今井さんは、今やまじまじと、わたしを見つめるままになっている。
「……卜部さん。あなたのその格好」

そう。このわたしの、この格好。

ワイシャツに、スラックス――男子生徒の姿だった。

わたしはそばの机の上に、さっきまで着用していたセーラー服とスカートを置く。

その上に、さっきまで着用していた白いブラと、パンティを置く。

そしてその上に、―だれかさんのムービーカメラ《・・・・・・・・・・・・》を乗せた。

これで、意味は伝わったことと思う。

中島くんは、わたしの手に、落ちたのだ。

中島くんは、このわたし――今井さんそっくり――という、被写体の魅力に抗しきれなかった。

わたしの画も撮っておけば、あとの編集次第では、作品をよりおもしろく創り上げることができる。その誘惑に、カメラマンとして、彼自身一人のクリエーター（？）として、抗しきれなかったのだ。

すなわち、わたしが彼を捕まえるのではなく――

逆に彼が、わたしを捕まえに来て。そこを、再度逆に、わたしに捕獲された、というわけである。

あとは。

わたしは彼の“心”と制服を奪い、下着姿の彼を床に転がしたままにして、ここにやって来た。

すなわち、今。

こんな素敵な状況を撮しているカメラはない。ということだ。

「なんで、そんな格好を……」

と、今井さんは細い声で今一度繰り返した。よほど、ショックを受けたようだ。

わたしは正々堂々と張り切って答えた。

「あなたと、勝負をするためによ」

「勝負……？」

「そう」
「――」
とたん、だった。
わたしは、ちょっとばかし相手を見くびっていたのかも知れない。反省する。
今井さんが――
今井さんが、加速度的に立ち直っていくそのさまを、目の当たりにしたのだった。
これはあれだ。勝負と聞いて、芸能人の闘争本能に、火が付いたに違いない。
今や、らんらんと目を輝かせて。力のこもった声音で。
「どんな勝負ゥ？　まさかァ、対等の条件でェ、椿くんにどっちか選んでもらう気だったりしてェ？」
わたしのおっきい胸に露骨に見下した目をやり、そして、もはや余裕の態度でルールの説明を要求してくる。なんてふてぶてしい。さすが、わたしである。
「ご冗談を。そんなことするまでもなく、明はわたしの所有物だから。する意味ないし」
今井さんはバカにするように笑った。
「だよねー。そもそも人と、猿まねの猿じゃ、比べるまでもないしィー」
「落ち目のアイドルと比べられたら、そりゃ猿も迷惑というものね」
「一体どんな勝負をご所望なのかしら？　聞いてあげる。話してみたら？」
さあここだ。わたしはそれはもう、自信満々で答えたのである。
“うれしどっきりぽろりもあるよ。アイドル水着騎馬合戦！”」
「はあ？」
「――というのはモチロン冗談。でも、似たようなものね」
とうとうトップアイドルは口を閉ざした。困惑顔で先を促すのみだ。

わたしは言った。
「今着ているこの服は、あなたの盟友のものだよ。それは理解しているわよね？」
今井さんは慎重に頷く。
「つまり中島くんは、今もどこかで、下着姿で転がっているってわけ。なんてカワイソウ……（笑）」
「……」
「バトルの内容を言うわ。あなたは、わたしから、この服を奪い返したら勝ち」
「……はい？」
「逆に、わたしは、あなたから今着ているその制服を奪ったら勝ち」
「バカですか？」
「あなたに――」
机の上に置いたわたしのセーラー服を手で指し示しながら、冷たく言った。
「――下着ごと、わたしの服を着せてあげる。はっきり言って、わたしがあなたのマネをするのは不愉快極まりなかった！　だから、あなたがわたしになりなさい！」
すべて、言い切った。このときわたしは、恍惚感に包まれていたと言ってもいい。今井さんに関する、間もなく訪れる確実な未来予想図が脳裏に鮮やかに浮かび、今までのうっぷんが晴れた思いがしたのだ。
自分が失敗するとは、このとき、つゆとも考えていなかったことを告白したい。
今井さんは――
一回、教室の隅でわなわなと成り行きを見守っている椿くんに目をやり。
「場合によっては」
こほん、とわざとらしく咳をする。その手が興奮で震えている。
「彼氏の目の前で、このわたしに、あなたがハダカに剥かれる。て

こともある。それでもいいんだ？」
「もちろん。そしてもちろん――」
「わかってる。もちろんわたしにも、その可能性があるってことは」
今井さんは、机の上のわたしの制服に目をやる。
「今、あなたはノーブラ、ノーパンなんだ……」
ここでようやく本性が現れた。いまやはっきりと、今井さんは目を下品に、淫猥に光らせていたのである。
「その勝負、受けた。――ほんとうに、いまこれからのシーンを、映像に残せないのが、つくづく残念だよ！」
そして今井さんは突然に。
突然に。
襲いかかってきたのだ。

――椿くんに！

■12■

今井さんは椿くんに襲いかかると、悲鳴を上げ抵抗する彼から、スラックスの革ベルトを、安々と奪い取ったのだった。
それを右手に持ち、一回振り回す。バシッ――という鋭い、ひりつくような音が鳴った。
わたしに振り返った。
ニンマリと悪魔の笑みを浮かべるわたしの顔がそこにあった。
「白状するけど、わたしには、サドっ気があってねェ……。けっこううまく、鞭を扱えるんだ。ちょっと、本気ださせてもらうよ。彼氏の前で、あなたを剥いて、打って、痛めて、嬲って、泣いて許しを請うまで屈服させてあげる。その様子を、わたし自身が、カメラに撮してあげる。一気に有名人よゥ？　感謝してよね……」

最後は高笑いである。これこそ――
わたしは思った。

これこそ、さすがの、わたし――！

理解してもらえるだろうか？　わたしは、本当に、心の底から、そのわたしを、称賛していたのである。
だからわたしは――
わたしは、わたしに向かって。
最大限の敬意を払いながら応えたのだ。

「必殺、安全ハサミ――ダブル！！」

■13■

しゃきんッ、しゃきんッ――と、わたしの両の手に現れた、その武器は――

息つく間もなく風を切り、光り輝き、宙を舞い――

鉄の歯が、獲物を捕らえて喰い刻み――

そして――数秒後。
そこにあったのは。
ベルトの鞭もろとも。
制服を、着衣を、上から下まで粉々に切り破かれた。
トップアイドルの、あられもないその姿――

今井さんは、目が驚愕に見開かれたまま凍り付いたように体を硬直させ――いきなり正気に返り――
悲鳴を上げて瞬間的にうずくまり、自分の裸を隠したのだった。

「フンッ」
ともかくも。
これにて、ミッション・コンプリート。そうなのだ。わたしは、失敗しなかったのである。
わたしはカメラを手に持つと、いまだに震え、目をそらし続けている椿くんの奥襟を引っ掴み。引き摺るように教室を後にしたのだった。

■１４■

休みが開けて、月曜日。
予想していたことだが、今井さんの姿はなかった。ホームルーム時に、担任の先生から、今井さんは転校した、と事務的に告げられる。クラスメイトの方も淡々と受け入れ、彼ら彼女らにとって、この件は、完璧にそれっきりとなったのだった。

マンションに帰ると、差出人不明の宅配便が届いていた。中を開けると、ビデオディスクが一枚。
これも簡単に、予想がついた。
お茶とお菓子を用意して、ある意味ワクワクしながら、ビデオを再生させる。わたしの口から歓声があがった。期待に違わず、そこに表れたのは、嬲られるわたしだったからだ。
もちろん、今井さんである。―セーラー服姿の今井さんである《・・・・・・・・・・・・・・・》。

なんだかとっても懐かしい気にさせられる今井さんは、モザイクがかかって顔が分からない、不潔で巨大なチ〇ポコの全裸少年に、どこかの豪邸のベッドの上で、盛大に強姦されていたのだ。
抵抗できないよう脱力系の薬を打たれて。逆に、神経が過敏になるよう、覚醒系の薬を打たれて。
お人形のように抱っこされ。胸をまさぐられ、股間をもまれて。許して下さいと哀願する口中に、いかにも臭そうな唾液を流し込まれて。
横向きになって、四つん這いの格好にされて。
やあ、わたしのパンティを脱がされて！
後ろから、そそり立つ、硬度ばつぐんの少年の巨根を、ずぶずぶと挿入させられる。
とたん、痛い痛いと声の限りに泣き叫ぶ、自らサドだと告白した、今井さん。だが、どうすることもできやしない。
その上、激痛の悲鳴を上げるたびに背中脇腹に鞭を容赦なく振るわれて、嘘でも強制的に、艶声を口にさせられる。もはや今井さん、涙、涙である——
わたしはその格好を見て、申し訳ないが、腹から笑いこけてしまうのだ。本当に、このビデオは、なんてエンターティメントであることよ。
少年は、交接したままカメラの正面に向き直り、今井さんを太ももの上に座らせ、制服スカートをめくりあげる。隠されていた部分が丸出し、丸見え。露わにされる、清純可憐なアイドルの下半身。すかさずカメラが近寄って——
とってもとってもイヤラシイ交接の画が、モザイクなしで詳細にさらけ出される。
そして、どアップで、映し出された。
その今井さんの股間には——
みすぼらしく垂れ下がった、男性性器があったのだった。

わたしは本当に、心から笑ってやったものである。
本当に――自分が今までやって来たことを、あらためてその身に受けてみるがいい。
まあ、今流行のＢＬとかいうものを体験できるのは、芸（ゲイ）の肥やしになるんじゃない？

■１５■

ビデオを見ながらわたしは思う。
今回の出来事の疑問点。それが次々と氷塊していく。

まず、今井さんに、この学校を強力に推薦したという人物。
それは、わたしを知っている人であり――
都合のいい人材として、今井さんをピックアップできて、さらには転校を実現させる、財力と権力を有する人。
その目的が「椿くんのエロビデオが見たい」という、それだけのために、本当に実行してしまった人。
そのような人物、である。
それが――
それが、今。ミッションに失敗した今井さんを存分に貪っている、この少年。
丘さんの主人にして魔王こと、上野公平（うえのこうへい）その人だ。
彼の究極の目的――純情な心のままに、椿くんと純愛アヌスセックスする――を実現するために、現状をワンステップ進めた。それが、今回の出来事の真相だった。

そして、われらが丘歩子の立場である。

彼女は上野氏の性奴隷として生かされていて、常日頃から身代わりを欲していた。

同時に、思い焦がれている椿くんが、上野氏によって汚されることがないように気を使っていて。

さらにまた、わたしに復讐したいとも考えていた。

今回、その願いが全て叶った。

「それをすることによって誰が利するのか。それは、誰に実行可能なのか……」

よく言ったものである。

なんのことはない。

彼女が、上野氏の後ろで、全ての図を引いていたわけだ。

ビデオは、今もの凄いことになっている。さすが、魔王・上野氏。わたしですら直視が難しくなってきた。はんぱない。生き地獄とは、まさにこのことを言うのだろう。

今井さん、もはや芸能人として、いや、人として、動物として、生物として、再起不能、つまり殺される、に等しいところまで到達して、唐突にビデオが終了した。

わたしは惜しみなく拍手をした。逆説的なまでに、感動的な作品だった。

丘歩子――

あんた、スゴイよ。よくやったと思う。ご苦労さま。また弁当を食ってやってもいい、そう思った。

■１６■

ところで、個人的に、最後まで残った疑問がある。

「椿くんは、なぜあそこまで、今井さんに夢中になってしまったのだろう？」

今井さんは、わたしなのだ。
どっちも同じなのだ。
それなのになぜ、わたしではなく、今井さんだったのだろうか。

「……」
なんだか。
不愉快、な気分になっていく。
わたしは洗面所に行って、歯を磨いた。
服を脱ぎ捨て、全裸になると、ベットに横になった。
明日、アイツの腹を蹴ってやろう。
そう思うといくらか気が晴れ、すんなり眠りに落ちることができたのだった。

※

椿明の部屋。

机に向かって、余念がない予習復習。
ふと時計に目をやり、夜も更けた時間に驚いたように置くペン。
しなやかにする、伸び。

そのあと。
ためらいがちに、手を伸ばす本棚。
参考書の間から取り出されたのは、一冊の写真集。
今が旬の、トップグラビアアイドルの写真集。
自室の中にいながらも、こっそりと窺う周囲。
心をときめかしてめくる、ページの一枚一枚。

そこにあったものは？

美しく魅力的に映し出された、その人物の――

ほほ笑み。

## 第２８・２９・３０・３１・３２・３３・３４話　謎の文化祭（〇）

§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§　§
（この人物紹介ページは縦書きＰＤＦ用に整形しています。）

◆おことわり◆
ファンフィクションです。詳細は１話に記載。

◆登場人物紹介◆
卜部美琴（うらべ　みこと）
椿明（つばき　あきら）
丘歩子（おか　あゆこ）
上野公平（うえの　こうへい）

以上４名は、１話にて紹介済みです。今回の主な登場人物は←

早川愛香（はやかわあいか）
職業：女子高生　生徒会副会長（次期会長最有力候補）
属性：聖女　善女
武器：敬虔な信仰心　献身　おしとやかさ
　同級生　中学時代と変わらない外見
状態：名家の子女。椿の中学時代の同級生である。
　椿の片思いの相手。椿の性格から、オナニーのおかずにもできなかった憧れの対象。ただ、夢精時は必ず早川を夢に現していた。
　早川本人は椿の思いに気づいており、自身も椿を憎からず思っていたのだが、勇気がなくてとうとう何もできなかった。この反省が、現在の積極性、行動力の起因となった。

現在、女子高生であるが、体質からか、中学生当時の顔かたち、姿を保っている。あらためて言うまでもなく美少女。古典的一神教の信者。そこからくる汚れのない精神。かつ、生来の愛らしい性格。頭脳明晰、行動力ありで、学校では役職も相まって絶大な支持を集めている。
あえて言うならば、悪魔・上野と拮抗する存在。

瀬尾　Ｊｏｈａｎｎｅｓ（せお　よはね）
原作では日本人少年男子の外見と、名字、それと早川の彼氏である、という情報しか明らかにされていない。本作では物語の都合上、勝手ながら以下の設定とヨハネの名を与える。
職業：家出少年　ヒモ
属性：不良
武器：ハーフ　愛らしい外見　暴力
状態：歳で言えば小学高学年～中学生くらいか。言葉では敵わないため、暴力をもって、早川を支配下に置きたがる。
早川の愛（アガペー？　エロス？）を独り占めにしようとする。

星の瞳女学院高等学校（ほしのめじょがくいんこうとうがっこう）
現在、早川の通っている私立高校。１７０年の歴史を持つ。生徒数９００名で、その誰もが名家・有力者の子女である。その人脈を束ねれば、もしかして国家権力に匹敵する実力を有しているのかもしれない超名門の女子校である。
生徒の間ではマリア様信仰が盛ん。身分柄もあってか、学内ではほぼ全員が、男子に興味ない、という極めて特殊な状況にある。

星の瞳祭
星の瞳女学院が開催する文化祭。生徒全員が仮装するという伝統を持つ。仮装文化祭。今年のテーマは「ロボット」

外部、とくに一般男子生徒にとってみては、身分違いのお姫様と接触を図れる唯一の機会となっている。

§ § § § § § § § § § § §

## 謎の文化祭（一）

■1■

この日、女子中学生に宣戦布告された。

ほんとにそう思ったのだ。

椿くんとの日課を終えての夕焼け小焼けの帰り道。進路に待ちかまえていたその小娘は――

ニコリと、さわやか朗らかに。

「はじめまして、卜部美琴（うらべみこと）さま」

と、これこそまさしく銀の鈴がころがるような声音をもって、優雅に挨拶をよこしてくれたのである。

目鼻立ちはあくまで優しく、麗しく。ほおは果実のようにほんのり赤くて。形のよい唇には、開く時を夢みる薔薇のつぼみように薄い紅（べに）を引いている。

しっとりとした黒髪は、お人形さんのように腰まで伸びて。前髪は切り下げ、愛らしいかんばせに、品の良い翳りを与えている。

華奢で、肩が薄くて。腰が高くて、つまり足がすらりと長く。手の指は白く細くて、つやつやな爪。

その体を抱きしめたならば、きっとマシュマロのように柔らかで。その瑞々しい張りのある肌からは、甘やかな香（こう）のいい匂いがするのだろう。

そんな――

そんな超優良物件を凛々しく包んでいるのが、青のブレザーに同色のセミタイトスカートだ。

黒のハイソックスに黒のローファー。真っ白なシャツに水色のネクタイ。すなわち学生の制服である。いったいどこぞのガッコだと

思いきや、その上質な生地で作られたブレザーの左胸。あまりにも有名すぎる校章が張り付いていたのだった。
中央に瞳を配した星形の、歴史と斬新さを併せ持ったデザイン。
泣く子もさらに泣きわめく――
私立・星の瞳女学院高等学校――のそれだった！
日本の特権階級の子女がつどう、超名門校である。
その学生を、本物のお嬢様を目の前に迎えて、さすがのわたしも言葉を失う。
ここで早とちりしないよう忠告しよう。わたしはその権威に飲まれたわけではないのだ。つまり――
「ぐうう……！」
おもわず唸る。
つまり、目の前のこの子は――女子高生！（うおうッ！）
こんな幼いナリで、高校生、その事実。わたしの驚きポイントは、まさにこの一点にあったわけで――
はっと気づいたときには――
今もって声が出せないわたしに、このびっくり娘がさらなる追い打ちをかけてくれていたのだった。
「わたくし、早川愛香（はやかわあいか）ともうします」
と名乗ったのだ。

■2■

椿くんの、片思いの、初恋の相手である。

「少し下部さまとお話したいことがあるのですが、お時間はよろしいでしょうか」
物腰柔らかく聞いてくる。わたしは今ごろになってようやく、頭

が回り出すしまつだった。
いらえの代わりに苦笑を一発。調子を取り戻す。
「思い出したわ。わたし、あなたのこと知ってるわよ……」
彼女は天然なのか躾けのたまものなのか、即座にこちらに話を合わせてくる。素直に驚きの表情を浮かべながら。
「まぁ、知っているって、どういうことでしょう」
「以前、椿くんにあなたの写真を見せてもらったことがあるの」
そう、あれはいつのことだったのか。もうかなり昔のことのような気がする。
当時、あの椿くんが本当に真剣に、勇気を振りしぼって交際を申し込んできて。
その平凡極まりないアプローチの仕方にあきれ果て、遠慮なくケチをつけて追い払おうとしたら――
椿くん。
わたしは心の中で笑みを浮かべる。
……早川さん、彼ったらね、あなたの写真を使って、突拍子もないパフォーマンスを見せて、おおいに笑わせてくれたんだよ。
それでわたしのイヌになることを許し、今にいたってるって、わけなのさ。
「ただ……」
何食わぬ顔で、わたしは続ける。
「わたしが見た写真は、中学のころのものだと聞かされたんだけど……どうやら、椿くんに騙されたようね」
と、わざとらしく水を向ける。
「それは誤解というものですわ」
相手は育ちの良さを見せ、平気で個人情報を教えてくれるのだ。
「ご覧の通りなのです。わたくし、成長が遅くて。いつも、子供のようだとからかわれているのですよ」
そして手のひらで口を隠し、クスリと品よく笑うのだった。

「――」
なんか、相手に余裕を感じる。会話の主導権は一応、握っているつもりなんだけど。
子供（の外見）、椿くんの知り合い、ということで、情けをかけて、軽めに振り回してあげているつもりだったのだが。その実は、こっちが一人で、彼女を中心に踊り回っていただけのことだったのかもしれない。
別に焦りを感じたわけではけっしてないが、わたしは相手に好きに話しさせることにした。
「で、わたしに、何の用なの？」
「卜部さまに、お渡ししたい物があって……」
と、ほほ笑みながら彼女は、今まで左手で抱きかかえるように持っていた一冊の薄い冊子を、両手で持ち直した。どうぞと差し出してくる。
受け取る。表紙には、
「……第１７０回『星の瞳祭』」
と、書かれていた。
「……文化祭？」
「ハイ！　今度の日曜日に開催します。ぜひ、卜部さまにお越し頂きたいのです」
「なぜ？　そもそもどうして、わたしのことを知っているの？」
「なぜなら――」
小娘は、あくまでほがらかな表情だった。
「椿様もいらっしゃることになるからです。ねぇ、卜部さま」
そんな顔のまま、このニセ物中坊は、言い放ったのだ。
「あなたよりも、わたくしの方が、椿様により相応しい女だと、強く思いますの――！」
「――」
まるで映画のように、道路に、すっと、黒塗りのロールス・ロイス・ファントム　ＥＷＢ　が、路肩に寄るという配慮すら全くしな

いで停車する。
そして白手袋の初老の運転士が降り、うやうやしく後部ドアを開けるのだ。彼女のために。
「卜部さまにとって、ご興味深いものを、ご覧にいれることができると確信しています。今度の日曜日、楽しみにしてくださいませ。……お時間を頂きましてありがとうございました。では、ごきげんよう」
ゆっくりと頭を下げ、あとはもう一瞥もなしに乗り込み、あれあれと思う間に、道路の彼方に消え去ったのである。

この日、女子中学生に挑戦状を手渡された。
そうとしか、思えないじゃない？
わたしは手元のパンフレットに目を落とす。挑戦状。いかにも子供がやりそうな行為ではないか！
自然に、口元に笑みが浮かんでしまう。
わたしの敵じゃない。はっきり、余裕の笑みだった。
「行くと、言ってないわよ……」
行くけど。多分。おもしろそうだし。
わたしはパンフを鞄の中にしまい、幾分浮き立つように、歩み始めた。

## 謎の文化祭（二）

■3■

翌日の昼時間のことだ。
もう恒例となってしまった、丘さん手作りのお弁当をほおばりながらとりとめのない会話をしていると、突然。
「あっ、そうだ……」
と、丘さんがその話題を振ってきたのだった。
「アンタこれ知ってる？」
そう言いながら鞄の中から取りだしたのは、あのパンフレット。目の前にかざして、三文役者・丘歩子（おかあゆこ）、ニマリと笑う。
「今度の日曜日にやるようなんだけど、『星の瞳祭』。どお？」
「どうって……興味ないし」
とりあえずそう誤魔化す。丘さんはパンフに目を戻し、少し熱っぽい調子でしゃべりはじめた。
「ここ、仮装文化祭ってのがウリなわけよ。去年も行ったんだけどさ、そのときは『戦国武将』がテーマでね。全校あげての模擬合戦のパフォーマンスがあって、そりゃあスゴかったんだから……」
思い出すかのようにうっとりと空を見上げる。
「私受験のとき、身分違いだから風見台（こっち）選択したんだけど。できれば行きたかったなぁ、星の瞳女学院高等学校……」
あの丘さんが。夢みる表情をみっともなくさらけ出している。おのれの分をわきまえているのは結構なことであるが、妄想を膨らますのは自重してもらいたい。それが許されるのは、まともな庶民だけだということを知るべきだろう……まぁいいか、勝手になさいよ。
と、丘さん。
ここで彼女はふと、素顔に戻り、わたしに聞いてきたのだ。

「美琴だったら、ひょっとして行けてたんじゃないの？　なんでこっちに転校してきたのさ」
このときばかりは真実の好奇心の顔をもって返答を促してくる。
彼女は私の一族の、ある程度の知識がある。気にもなるのだろう。
卜部家。
長い歴史ある家系を辿れば、それなりの貴族に行き当たる。あの名門校に入れる資格・財力はあったと思う。実際、転居の際、珍しいことに、一族に進路の希望を訊かれもしたのである。これは、それくらいの願い事だったら聞いてやれるという一種の情愛の表れであり。
うがったことを言えば、エリートがたとの人脈を築けるという目論見もあったのだろう。
わたし自身、他の羨望を集める華やかなスクールライフに全然憧れを持たなかった、というわけでもない。
だが――わたしは風見台という平凡な都立高校を選んだ。

卜部家――

歴史の一時期。
（あるいは、現在も――）
特殊体質を買われ、時の為政者に、道具として使役を命ぜられたこともある、呪われた一族。
もし、星の瞳女学院に行ってたら、どうなっていただろうか。
そこで、わたしよりも位（くらい）が上の者に、いいように使われていたかもしれない。
（女子校なんて、そんなにいいモノじゃないんだぞ！）
ドロドロとした人間関係に巻き込まれてしまうに違いなかった。
誤解してはいけない。わたしはそれが嫌いなのではない。臆病なわけでもない。むしろ、そんな泥沼を自分の能力、才覚で自在に泳ぎ回り、上位に君臨するのは、快感を覚えるほど好きな方だ。

ではなぜ――

「……それは、わたしが卜部の人間だからよ」

ようやく口にした、まるで中学生のような恥ずかしいほど意味のない回答に、丘さんはあっさりと納得したのだった。

■4■

その日の放課後。いつもの日課の場所、岡の上の道で、「よだれ」の餌付けをじらすと、椿くんは何の抵抗もなく白状におよんだ。もともと、隠し事とも思っていなかったらしい。

「そうなんだよ！　美琴、よく知ってたね？」

逆に驚かれもした。

「早川さん、今、悪い男につきまとわれているらしいんだ。その男、街角で一人ぼっちで倒れていたところを、早川さんに情けをかけられたんだけど。それで味をしめしたようで、いつまでもつきまとわって、迷惑してるらしいんだ」

そんな話を鵜呑みにするこの男のマヌケ面を見てやるがいい！

……ま、美少年なんだけどコホンコホンッ。

「大丈夫？　でね、今度の文化祭で、一日恋人役をしてくれって、頼まれたんだ。そのようすを見せつければ、諦めるだろうから、だって。ぼく、一生懸命がんばるんだ」

ああ、椿くん。この、どうしようもない、純真な愚少年よ！　このときばかりは、わたしはこの鈍なポンコツ野郎に哀れみを覚えたのである。

ようするにその『悪い男』というのは、このわたしだ。

文化祭でイチャついてる所を見せつけて、わたしに椿くんを諦めさせ、代わりに自分が首輪のリードを握ろうという魂胆に間違いな

かった。
わたしは額に手をやる。
このバカを、どう殴ってやろうか？　朝を否定して目を覚まそうとしないアホウは、そうやってしかるべきなのだ。
わたしはしょうがないとなかば諦めの心境で諭しにかかる。
「その悪い男のこと、何か聞いてる？」
底の浅い嘘に決まってる。だから、なんにも答えられないはずだった。
ところが。
「ソックスをめくって見せてもらった。かわいそうに……痣があったよ」
「……ふぅん」
１００％、化粧で作った、フェイクだと、思う、が？
どうやら彼奴（きゃつ）、そこそこは、準備をしているようである。ちょっと見直す。

……そんなふうに、彼女を一般人の感覚で真面目に評価し直してしまったのが悪かったに違いない。
それが原因で、これからわたしは、地獄の劫火で炙られることになってしまったのである。嗚呼！
しかも椿くんが、その火を点火したんだ――
「名前も聞いた。そいつ、ヨハネ、て言うんらしいんだ」
「ヨハネ――！？」
声が裏返った。さあ生涯このときのことを思い返すたびに、わたしは悶えることになること決定となったのです！
それほど――
「そう、ヨハネ」
「――」
それほど、わたしのツボを突いた答えだったのだ。だって――

ヨハネだよヨハネ！

どんな法王様なんだよ！？
ヨハネが街角に転がってたんですか！
これは笑うべきなの？　笑っていいの？

ヨハネ！

ヨ・ハ・ネ――！

私は必死に口を押さえる。もう涙がぽろぽろだ！　だって、ヨハネだよ！　ヨハネなんだもん！
「ク～～～～～～！」
このときほど早川さんの感性に感服したことったらないというものだった！
「ハーフだって話」
「！！！！！」
だめだ笑い殺される！　ああ、この、このこの、このわたしが！
なんと、なんと、――笑い・殺☆されるッ――！
早川さん！
あの、世間知らずのお嬢様が、それこそ一生懸命こしらえたウソ話！　この分だと、きっと、天界をも巻き込んだ壮大なる、凝りに凝った裏設定とか、さながら少女マンガの相関図みたいに作成してるんだろう！　もう感動ものだった。
ここまでされたら、もはや行くしかないだろう！　いざッ、文化祭・『星の瞳祭』！　われらが１７０年の伝統のワザを見るがよいッ！

ヨハネだよ！　全員集合っ！

「〜〜〜〜〜〜〜！！！」

わたしはもう必死になって震える人差し指をしゃぶり、驚異の精神力でもって正確に椿くんの口の中に突っ込んでやったものである。

おかげで椿くん。

顔面が崩壊し、身体の筋肉・神経もどうかなったりで、まるで酔っぱらいのようにヒゲダンスしながら、歩き去っていったのだった。

わたしはそれを見て、ついに堪えきれず、それから十数分も笑い続けたのだった。

## 謎の文化祭（三）

■5■

そういうわけで、土曜日、深夜。場所は、畏れ多くも星の瞳女学院高等学校のキャンパスである。

わたしは頭からつま先まで、全身を覆う黒のレザースーツという出で立ちだった。

なんでこんな格好でこんな時間にこんな所にいるのか？　もちろん、勝負のためだ。

ほんと言うと、細工なしに早川さんの挑戦を真っ向から受けるつもりだったのだが。

あれほど笑わされてしまっては、逆にこちらからも、何か手品（マジック）の一つでも見せてやらなきゃ申し訳ないという心境になって。そのためのタネの仕込みに来た、というわけなんである。われながら、少し酔狂だったかもしれない、と釈明しておこう。

エリートの大事な子女を預かる名門校。さすがに防犯システムは厳重だった。

２４時間体制の守衛のいる正門の突破はめんどくさそうだったので、キャンパスをぐるりと取り囲む壁を乗り越えた。

カメラやセンサーの有無を確認してから敷地内を走り、校舎の門へと至る。無駄と知りつつ一応チェックしたが、はやり正面ドアは防犯装置に守られていた。

この分だと、窓も全滅だろう。

わたしは慌てることなしに校舎の壁に添って歩く。ときおり、建築図面と照らし合わせたりして、慎重かつスピーディに歩を進めた。ちなみに、この図面はわたし個人の力で入手したものである。名誉

のために申し添えておく。
少し、汗ばんだ。
小休止する。
「……」
さすがにこの時間。人影は皆無だった。わたしは無人の――と！
緊張して身を低くする。なにかの気配を感じたのだ。
しばらくしてわたしの視界前方に姿を現したのは、一匹のただの犬だった。ほっと息をつく。そして直ちに再度の緊張をした。
というのもあの犬、シェパードのように見えるのだ。
今の時代、ノラ犬、それもシェパードクラスの大型ノラ犬なんか、いない。いないのだ。その証拠に、あの犬にも首輪がされている。ということは、番犬の可能性があるということだ。
と、そこまで考えて、やはり気を緩めた。番犬ではない。番犬ならば、こんな施設では必ず、そう１００％、リードを持つ人間とペアになるからである。放し飼いはしない。
となれば、あの犬は、近所の飼い犬が抜け出してきたものと考えるのが妥当だ。犬ならばこそ、守衛の隙を通り抜けられたのであろう。
今はただ一つ。吠えつかれたら堪らない。
さすがに、番犬用の睡眠剤入りのエサの用意はしていない。まったく想定外のことだ。わたしは身を低く保ち、犬が立ち去るのを辛抱強く待ったのだった。

ようやく犬が向こうに消え去った。行動を再開する。
ある校舎の床下部分。空気取りの穴が開いている。そこに体をダイブさせた。湿った土の感触。埃だらけの蜘蛛の巣。私は匍匐前進し、同じような空気穴から校舎の向こう側に出る。そこは建物に囲まれた、中庭のように思われた。
またしても慎重に移動する。
建物の通路のドア。鍵はかかっていたものの、想像の通り、ここ

にはセンサーが取り付けられていなかった。
さすがに安堵の息がでる。これでだめだったら、潔く退散するつもりだったのだ。
わたしは道具を出し、解錠する。
壁越えも錠前破りも、電子工作も、卜部一族のワザの一つである。ということで納得してもらいたい。
わたしはめでたく、校舎内に侵入を果たした。

■6■

外と比べると、内部の監視網はザルと言ってよかった。むろん、階段とか廊下の要所要所に、思い出したように光電センサーが取り付けられていたのだが、それさえ気をつけていればどうと言うこともなかった。
なにせ、監視カメラがないのが大きい。
これは生徒のプライバシーにもかかわる問題ごとなので理解できたが、ごく一部を除き各室が出入りフリーなのは予想外の驚きだった。どうなってんだろ、ここ。と、他人事ながら心配したくらいだ。

とある一つの教室に入る。すぐに目につくのは、ダンボール箱の山だ。それも、ラメやらフリル、電飾とかで、発想豊かに装飾されている。
わたしはパンフの記事を思い出した。

『星の瞳女学院170年の伝統　仮装文化祭！
その年ごとにテーマを決めて、生徒一人一人がその仮装の出来を競い、文化祭を盛り上げます！
今年のテーマは――“ロボット”！』

そういうわけで、目の前にあるソレは、なんとロボットなのであるそうな。
しみじみとダンボール箱を見る。
超名門校のご令嬢がた。
なにやっとんのかしら……。

とはいえ、少し興味を覚えたのもまた事実。ウフフフッ！
試しに一つ、拝借してみる。
ロボットは、二つのパーツ、大小の四角いダンボール箱で構成されているようだ。
まず、大きい箱の方。下からすっぽり被る。イメージは、ワンピースドレス。箱の上には円い穴があいていて、そこから首を出す。
箱の両側面にも、こちらは少し横長の楕円の穴が開いていて、それぞれ腕が出せるようになっている。……ふむふむ。
箱の肩幅と胸厚は、女子高生平均の身体のサイズとほぼ同じくらい。なかなかジャストフィットしている。少し窮屈とも思えるくらいだが、これくらい小さくないと腕が自由に動かせない。模擬店、アトラクションとかで、腕の動きに差し障りがあったら、やはりまずかろう。穴のサイズ一つ決めるのに、お姫様がた、何度も改良を繰り返したに違いなかった。
箱の丈は、膝頭の上あたり。腕の動きを優先させた箱のサイズなので、下半身には不自由がある。これだとよちよち歩きしかできまい。でも、それがロボットらしさを演出するのかもしれなかった。丈が膝頭よりも下だったらまず歩けないし、逆に上すぎたら見た目がヘンテコだ。
（ロボットの箱から長い生足が生えていたらいかにも変態的でしょう？）
同意して頂けると思うが、あらためて、なかなか考えられたアイテムだと思われた。

ちなみに全生徒みんな同じダンボール箱になっているようなのは、それはあれだ。学校の全体主義みたいなモノなのだろう。素材から完全に個人任せにしたら、おそらくは収拾がつかなくなるし、これは致し方ないことだと思う。

ということで、生徒たちは残された領域、箱の飾り付けで、それぞれ個性を競っているようだった。

わたしはロボットの頭部を両手に持った。小さいダンボール箱だ。頭が通る円い穴が開いていて、ただ被るだけだ。ちょうど両目の高さに、色つきフィルムで覆われた横に細長い窓が開いていて、視野が確保できていた。

「……」

深夜の真っ暗な学校の教室。

そこにぼんやりと突っ立っている一体のロボット。

いやん、ゾクゾクするほど怪談じゃない！

ここに鏡がないことがつくづく残念だった。

わたしはつぶやきをもらす。

「じゃあ、三つ目はこれにしようか……」

手品のタネのことだ。

実は、ここに来るまでに二つほど、タネを仕込んでいる。それは当日の楽しみとして、三つ目はこれだ。ダンボール・ロボット。

自分も、ロボットに仮装する。

それで、学内をカッポする！　まず、目立つことなく移動できるだろう。なによりこちらの姿かたちを消して、早川さんを監視できるのがいい。それでなにか起こったら、その時こそ、出たとこ勝負ということで。

そう決めるとわたしはダンボール箱を脱ぎ、その寸法を測り始めた。

今ここにある一つを盗み取れたら一番楽なのだが、それはダメだ。個数は当然管理されているだろうし、予備はないと考えた方がいい。

なにより盗られたお嬢ちゃまの嘆きを想像すると躊躇してしまうし、
更にはバレたときがやばすぎる。
今から家に帰って、即席で作り上げるしかなかった。
われながら酔狂なことしている。
つくづく、そう思った。

■7■

校舎内の地図を頭に作成しながら、中庭まで戻った。
そのときだった。
わたしは、一つミスを犯してしまったのだ。
気がゆるんだ一瞬の隙。そこを突かれてしまった。

あの犬が――！

いつの間にか、さっきのあの犬が、わたしの横をすり抜けるように走り、ドアの中に入ってきてしまったのだ。
「！　！　！」
おそらくは、わたしの匂いを辿ったのだろう。
中庭まで来て、閉ざされたドアに途方にくれたのだろう。
わたしが帰ってきて、ドアを開けたその瞬間に――
すり抜けられた。
校内に、入り込まれた――

わたしはダッシュで空気穴に向かった！
犬を連れ戻すなんて、不可能である。
それどころじゃあない、今この瞬間にも――
犬が、センサーに引っかかったら！！！

もう犬が守衛に見つかること１０００％前提だ。ドアは開けたままにするしかない。
当然だ、閉じて施錠してしまったら――犬の侵入ルートがなくなる！　それこそ怪奇現象となってしまい、大ごとに発展すること請け合いだった。文化祭開催にも影響が出るだろう。
そうなったらわたしの、みんなの、努力、苦労が水の泡だ。
だったら、管理人の施錠のし忘れと結論づけられることに賭ける方がまだしも可能性がある。
わたしは唇を噛んで、床下の地面を高速匍匐する。
ああこんなにも、自分を罵ったことは、過去に例を思い出せないほどの、大失態だった！
慎重に空気穴から身を乗り出し――あとはもう、走った。
心臓が破れそうだ！
この瞬間にも、全校に非常ベルが鳴り響く恐怖に襲われる！
本当に！
本当に、なんてドジを踏んでしまったことか――！

壁を踊り超えた！

目立たないように駐車させていたスクーターのエンジンを掛け、スクランブルさせる。
流れる夜の街の光景――
かなりの時間走り続けて、追跡者がいないことを確認して。
ようやく。
そこでようやく、わたしは、一息ついたのだった。

わたしは歯を噛みしめる。
今回のことは、大いに反省し、胆に刻もう。
でも今は、立ち止まるという選択肢はない！
あとわずか数時間で、誰もが待ち望んだ大文化祭が始まるのだ。

ここまで来たら、ミッションを遂行するだけ。
そしていつもの通り、こちらが望んだ結末を手にするだけである！
唯一の心配は、あの犬――！
あの犬（ワンコ）が、今からのミッションに、どんな影響を及ぼすのか未知数だ――
わたしは首を鋭く振って、不吉な予想を振り払う。
大丈夫だ、あの犬の影響はない！
大丈夫だ大丈夫だ大丈夫だ――
自分に言い聞かせ、わたしは歯を噛みしめる。
――大丈夫。わたしにはできる。できる。できるんだ。今度もぜったい成功するんだ！

――

ふだんのメンタルトレーニングのたまものだった、と言えよう。
わたしは、犬の意識を、失敗のイメージを、完全に切り捨てられたのだ。
唇に笑みを浮かべることさえできた。わたしは、動き始める。
さぁ、ミッション・スタートだ！

## 謎の文化祭（四）

■８■

午前９時３０分、開門！　『星の瞳祭』とカラフルにレタリングされた手作りのアーチが飾られた、正門が開放される。すでに大挙して群がっていた他校の少年男子、青年たち。そして丘さんのような夢みる少女グループの団体や、さらにはイベントマニア、名門おたくといった年齢不詳の人たちが、文字通りドッとばかりに禁断の聖域になだれ込んだのだった――！

「ようこそ！」

「ようこそお越しを！」

「わたしたちの『星の瞳祭』へ！」

なにしろ大集団なのだ！　門の両脇に並び出迎えるお嬢様たち。このときばかりは、普段ならぜったいに出さないであろう大きな声で、歓迎の挨拶を叫んでよこすのだった。

ただし、そのお嬢様たち。

全員がダンボール・ロボットなのが可笑しいところなのだが。

上流階級のナマのお姫様目当てで集まった一部のマニアの男性にはお気の毒様と言葉をかけてやりたいところだ。

様々に飾り立てられたロボット。道の左右にそれぞれ１０体ずついる。ぎこちなく、窮屈に体をかがめて歓迎のポーズを精一杯表現している。そのダンボールの底から突き出ている両足は、黒のハイソックスに黒のローファー。筐体の側面から伸びている両腕は、真っ白い長袖のスクールシャツだ。つまり、箱の中身は真面目に制服姿のようである。わたしはまずその点を確認した。

この、整列したロボットたちの出迎えを抜けると、次にアタックをかけてきたのが、キャンパスをファジーに動き回る、メイドロボ

たちである。
「どうぞ！　サービスでぇす！」
「遠慮なくお受け取りください！」
彼女（ロボット）たちは声をからして、手当たり次第に来訪者に紙コップを手渡している。受け渡した後に、その人に差し出されるのが、巨大な油差し――を模した水筒（ウォーターボトル）だ。コップに注がれる中身は、それぞれのロボットにより、お茶だったり、果物ジュースだったり、コーヒー、紅茶だったりしている。普通に考えれば喫茶店で提供されるはずの飲み物が、ここでは場所関係なしに、敷地内のあちこちで、なかば強引に無料でサービスされていたのだ。何度も捕まって何度も飲まされている可哀そうな人も、何人もいた。……可哀そうというか、ありゃ喜んでいるな。もち、男の子である。
笑……。
はっきり言って、この光景は想像以上のできごとだった。これが皮肉というものか、このわたしにも紙コップが手渡され、ウーロン茶を注がれたりするのだ。歩きながら一口のみ、二口のみ、その味を確認しながら、わたしはなにやらくすぐったい思いで、ニヤケ顔して先に進んだのだった。

空を見上げると、ああ、いいお天気だ……。青空が気持ちよく広がっている……。
広場では、ロボットが書道パフォーマンスを行っていた。ポップな曲をＢＧＭにして、敷いた大きな紙の上で大筆を器用に操っている。思わず魅入ってしまう。一作品書き上げたときなんか、他の観客といっしょになって拍手、歓声をあげた。ロボットの体に一滴も墨を跳ねとばさないあたり、鮮やかなものだ。それと、お嬢様もサ○ンなんか聞くんだなぁと、下世話なこと思ったりした。
芝生の一角のステージ上では、数体のロボットが三味線、ギター、サクソフォン、ドラムでバンドを組み、これも器用にしかもなかなか聞かせる演奏をしている。

別のコーナーでは、2体のロボットが漫才を演じている。「がちゃーん」「うぃーん……」ボケとツッコミ、しっかりやってるよ。もう空気が、バカバカしくも楽しい雰囲気に、彩られているカンジだった。

アハハ、いいなぁ……。

わたし、こっちの方が、よかったかも……。と思ったり？　フフッ！

わたし、ほほ笑む。

わたし、静かに両目をつむる……。なんてさわやかな風！　これが、この伝統校に吹き続ける風なのね。

わたし、ゆっくりと両目を開き――そして。

「――」

わたしは、いつものわたしに。

「――」

いつものわたしに、立ち戻っていたのだった。

「――！」

わたしは校舎の中に入る。頭に入れていた地図（マップ）を思い起こし、奥まった方のトイレに直行する。今の私の服装は、赤いチェック柄のスカート。そして、真っ白なドレスシャツに、黒のハイソックス、

黒のローファー。
ビンゴだ。
私は個室に入ると、持ってきた手荷物を展開させる。
それは、最初は折りたたまれたダンボール紙であって――
みるみるうちに、立体に起こされてゆき――

数分後、個室から現れたのは、どこから見ても完璧な、『星の瞳』製ロボットだ。
わたしは、この際やってみたかったそのセリフを口にした。
「コーション、グリーン。オーケー、ミコト号……発ッ進！」
ういーん。
ういーん。
がっちゃん、がっちゃん。
自分のほおが熱くなるのがわかる。だけどわたしは、それに勝る興奮でもって、聖戦の世界に向けて歩き始めたのだった。

■9■

本館入り口の壁際に、一人の少年が人待ちげに佇んでいた。ワイシャツに水色のネクタイ。ブルーのハーフズボン。黒のハイソックスに革靴と、もし星の瞳女学院が共学だったら、男子の制服もかくやあらむと思わせる凛々しさだ。……ひょっとして、仮装祭を受けて、本気で狙ったコーディネートなのかもしれなかった。
悔しいことに、バリ似合ってる。
そこだけ空気が違っている。玄関を行き交う来訪者も遠慮し距離を開け、文字通り鉄仮面であるはずのさすがのロボット軍団も、彼には近寄れないでいた。

椿明(つばきあきら)くん。

肩まで伸びた、黒く、つややかな髪の毛。前髪が、繊細なかんばせに、甘くかかっている。

目鼻立ちは、一生懸命きりりとして少年らしく。ただし唇はどうしても果実酒のようにほんのり赤くて。

体つきは華奢で柔らかで。肩が薄くて、指が細くて。しかもあの透明感のあるすべすべで、つるつるな白い肌からは、花とでも形容したいとてもいい匂いがするのだ。

その目が瞬きするたびに、宇宙が一つ消滅し、新たな宇宙が誕生する。

椿くん。

彼は、地球上に億万といる少年たちの中で、たった一握り、神様から儚さという特質を与えられた男の子。

子供から青年へと急成長する一時期に、ほんのひとときだけ出現し、あっという間に霞み消える刹那の存在。

美少年――

もし神話の時代に生きていたなら、きっと白色の大貝の上に立たされたであろう。

もし人類四大文明の荒ぶる時代に生を受けたならば、その身を賭けて戦争すら起こったに違いない美しい男の子だった。

今、椿くんはその瑞々しい頬を染め、形のいい唇を開いた。

「早川さん……」

もし、彼につり合う少女が（自分の他）いるとしたら、現状での最有力候補が、そこに登場したのである。

早川愛香(はやかわあいか)さん。

「おはようございます、椿様……　＞ハート＜　」
恭しく、幸せ一杯に一礼する。
目鼻立ちはあくまで優しく、麗しく。ほおは果実のようにほんのり赤くて。形のよい唇には、開く時を夢みる薔薇のつぼみように薄い紅（べに）を引いている。
しっとりとした黒髪は、お人形さんのように腰まで伸びて。前髪は切り下げ、愛らしいかんばせに、品の良い翳りを与えている。
華奢で、肩が薄くて。腰が高くて、つまり足がすらりと長く。手の指は白く細くて、つやつやな爪。
その体を抱きしめたならば、きっとマシュマロのように柔らかで。その瑞々しい張りのある肌からは、甘やかな香（こう）のいい匂いがするのだろう。
そんな――

「本日はわたくしの我が儘をきいてくださって、誠にありがとうございます……」
「う、うん。そ、それはいいんだけど。き、きみのその格好……」

そんな――超優良物件を可愛らしく包んでいるのが。
素朴な白いブラウスに、肩ひも付きの紺のプリーツスカートだ。胸元には赤いリボンが花開いている。（そして、黒のハイソックスに黒のローファーだ。チェック！）
もう、直感でわかった。あれは――

「ハイ！　中学の制服です！　着てみてあらためて思ったんですが、違和感ないんですよ！　おかしいですよね！　わたくし、中学生に戻ったように見えませんか？」
「そのものだよ。ほんとに、あのころに戻ったみたいだ……。感激で、胸がドキドキしてるよ！」

「まぁ……！　でも、椿様だってそのお召し物。とてもお似合いです……。我が校に、今すぐにでも転校してほしいくらい……素敵です……！」
「あ、うん、あり、ありががと、ありがとう――！」
早川さん、両手で頬を覆い隠し、赤らみを隠した。椿くんも首から耳まで真っ赤にさせ、視線をさまよわせている。盗み見ていた客・ロボット（ヤラリー）らもほおを染め、わたしもこっ恥ずかしさに身悶えしたくなる。それほどの、二人の幼い可愛らしさだった。
「――ところで、仮装のテーマは、“ロボット”じゃなかったっけ？」
椿くん、なんとか話題を振る。
「そうなんですが、特別にお許しを得ました。大切なお客様である椿様を不作法なくご案内したいし、“コレ”も仮装のうちってことで。実はわたくし、生徒会の副会長を拝命しているんですよ。いえ、生徒会なんて偉そうですけど、実際は皆さんの小間使いみたいなものです。だから、今日だけは、いわゆる役得ってことで、我を通しました。……あ、もしかしてわたくしのロボット姿を期待されてました？」
椿くん、ぶんぶんと首を振った。
「こっちのほうが何十倍もいいよ！　今日は来てよかった……」
「まぁ……　＞ハート＜」
また赤らむ二人なのであった。

はようどっかに行きなはれ……。
わたしはいいかげん体が痒くなる感覚を持て余し――
そこでふいに、意識を改めたのだった。
もしかしてあれは、早川さんの挑戦の表れなのかもしれない、という勘働きである。どこかで二人を観察しているわたしへの、早川さんによる心理攻撃が早速開始された。つまりこちらの動揺を狙った振る舞いなのかもしれなかった。

とすれば、うかつにも感情を乱してしまったわたしは、うかうかと術に嵌ってしまったわたしは――愚か者決定である。
もちろん、今の時点で考え過ぎかもしれないが。つい数時間前にミスったばかりだ。反省して気を引き締めることにしよう。

「では、椿様。わたくしの、大事な、とても大事な、今日限りの王子様……」
「早川、さん……」
「せめて、かりそめでもいい、愛香、愛香と呼び捨てに……」
「あ、ああ、あ、愛、香……」
「嬉しい……。幸せです……。明、とお呼びしていいですか？」
「愛香……」
「明……」
「愛香、愛香……」
「ご案内致します。……忘れないで。今日一日は、あなたは、わたくしのいとしい恋人なのですから……！」
「――」
真っ赤な顔で早川さんは椿くんの手を取り――その手を結んだまま――
二人は、初々しく、揃って歩きはじめるのだった。

## 謎の文化祭（五）

■１０■

文芸部の、『詩』の発表展示室があった。ふーん……。

天文クラブの、『天体写真』のパネル展示会があった。お嬢様も、夜更かしすることあるんだね……。

鉄道愛好会の、『関東大回り』ルポルタージュが、写真、記事のパネルで展示されていた。けっこう凝った構図の写真、資料、旅程表、詳細なしかも熱の入った文章、などなど、お嬢様のあいだにも鉄子さんが増殖しているらしいことが分かる。

美術同好会と華道部が共同で作品を展示している教室では、今年の文化祭テーマにも則った、機械部品や電気部品を素材とした『生け花』や、フランソワ＝オーギュスト＝ルネ・ロダンの『考える人』をはじめとした有名立体作品を模したオブジェが並んでいる。なかなかの力作ぞろい。でも、これは外したと思うんだ。お嬢様がたにとっては斬新なのかもしれないが、残念ながらわたしらにはポピュラーなもので、いまさら感動は感じられない。そうね、もう一歩進んで、動きを取り入れる、すなわち表現の翼を４次元時空にまで広げ、物体に生命を与えてみたら、どうかしら。つまりそれは、既存の作品に己の自由な想像を付与するってこと。そんなの邪道、あるいは陳腐と思われるかも知れないけど、いや、でも挑戦する姿勢こそが芸術じゃないかと思うの。

……なにをまじめに批評してるんだ、わたしは？

いつのまにか、引き込まれていた。さすが名門校の文化祭だ。どの展示品も一途に真面目に一生懸命に作成されており、知らずその熱に当てられてしまっていた。

何が凄いって、それらを前にすると、自問し反省を促されたりすることだ。この人たちは真剣に取り組んでこのような立派な成果をあげた。翻って、一体自分は、何をなして今まで生きてきたのか――と。

恐るべし、星の瞳女学院……あああいけない、いけない！

ふぅ……！　深呼吸。

ピンチにスマイル、勝利をゲット、だ。

わたしはなかば灼熱の場から逃れるように、二人の監視に意識を戻した。

でも、こっちはこっちで、別の意味で熱かったのだ。

もう早川さんは、一時も手を放さなかった。

それどころか逆に、椿くんの腕を抱くように体を密着させている。甘えるように顔を寄せて、展示品を解説するにかこつけて、椿くんの耳に柔らかく息を吹き入れている。椿くん、自分の肘が早川さんの胸に押しつけられ、ほおずりせんまでに肉薄されて、嬉しいのか困っているのか、どちらなのか困った顔しているのだった。まぁ、嬉しいのだろうけど。

二人は、いや早川さんは副会長さんは、いっそスキャンダラスと言いたい、ベタベタなようすを周囲に見せつけながら歩き回った。

各教室めぐりはもとより。

講堂で催されたロボット演劇（ちなみに『ロミオとジュリエット』）にも、食事に立ちよったメイド（ロボット）喫茶にも、わざわざ二人がけの肘掛長椅子を用意させたりで、片時もスキンシップを怠らない。（もちろん、食べさせあったり、ドリンクを分け合ったり。基本技。）トイレに行くときすら二人一緒（！）で、人目がなければ一緒に中に入っていってしまいかねないほどの勢いだった。

またそんな早川さんの行動をすべて許す（どころか積極的に応援し、ガードさえしている）、周囲も異常だった。二人は長椅子の例に限らず、どこに行っても最敬礼・最高級のサービスで迎えられた。ロボットたちにである。ロボットに仮装した、エリートたちにである。

なにが、自分はただの小間使いにすぎない、だ！

とんでもない権力者だった。

この学校の生徒会副会長、すなわち来期の会長職がほぼ確実と見なされている者、という存在がどんな重みをもっているのか。椿くんはまだ気づかない。おそらくは最後まで気づかずで終わるのだろう。逆に気づいてしまえば、パンピー最下層で小心者の椿くん、自然なふるまいは、とても出来なくなってしまうに違いない。つまりは、驚くべきは早川さんの、その立場をも、何もかも全力を投入して臨んできた、その気概、勝負魂というものだった。

敵に不足なし――！

名門校の選ばれし者たちの真摯な作品群。そして、早川さん。わたしはこの二つの滾るような熱源に、ダンボール箱の中で、さながら蒸し焼きにされる思いだった。

しかも、だ。その上さらに、第三の熱源の発生も、感覚してしまったのである。

ああ、どうしよう……。

向こうでは、早川さんが止まらない。その熱に当てられ、椿くんも舞い上がっている。

「――遠い未来。科学技術が発達して、ロボットの存在が不思議でもなんでもない世界。そんな世界をご想像下さい。想像いただけたら、次に、その世界から人間を消し去ってみるのです。何らかの原

因で人間たちがいなくなった未来の地球。その世界では、どんなことが起こるのでしょうか。わたくしは、そこでは、ロボットたちが、人間のふりをし始めるのではないかと思うのです。なぜなら、ロボットたちの存在意義は、人間への奉仕だからです。自分たちを創造してくれたマスターへの愛情表現、素粒子一つ分の不純物さえない、それは尊い愛なのです。かつてのマスターたちの栄光を守るため、あるいは、巨大な喪失感より自らを慰めるため、彼らは自分たちがロボットだということに気づかないふりしながら、人間を演じ、人間の帰還を永遠に待ち続けるのではないでしょうか」

「そのように捉えると、今まで見てきた全てが反転します。書道も、バンド活動も、漫才もそして演劇も、それらが鮮やかであれば鮮やかであるほど、滑稽であれば滑稽であるほど、美しければ美しいほど、悲しさがよりくっきりと浮き彫りにされる。この楽しいお祭りの空気の中で、ぼくは実に寒々とした感慨を抱かされました。だけど、ここでぼくから一つ、提案があるのです。今きみは、人類を消してロボットたちの悲劇を演出して見せてくれました。その逆は考えられないでしょうか。つまり、未来の世界から愛すべきロボットたちのほうを消してしまうのです。人間たちはロボットを創造する手段も完全に失ってしまう。二度と彼らに会える可能性がない、としてみるのです。このとき、ぼくら人類が味わう喪失感は、さきのきみが示してくれた喪失感に劣らないほどのものになるのではと、ぼくには思えるのです」

「さすがは椿様、いえ、明。わたくしのかけがえのない人よ。ご指摘の通り、まさにそれが今年の文化祭の大テーマ、“ロボット”なのです。人間とロボットの互いの存在意義。共存、共栄。そしてその実現の可能性のサジェスチョンこそが、今回、わたくしたちがもっとも訴えたかったテーマなのです。そこに、わたくしたちがロボットに扮した意味があったのです」

「いまこそ納得がいった思いです。今日、開始時間に門をくぐったとき、ぼくはロボットたちの大歓迎を受け、さらには熱烈なドリン

クサービスの攻勢を受けました。あれは、遠い未来で再び出会えた両者の感動を、具象させたものだったのですね」
「そう受け取ってくださるのは大変光栄なことです。ただ残念ながら、それは誤解なのです。正直にもうし上げて、偶然の一致です。ドリンクサービスの一件は、本日の開始30分前に、誰ともなく急遽思いついたアイデアだったのです。漠然と、単に、いい考えだと思っただけで、そのときは、とてもこのような深い思想に、いたってはおりませんでした」
「事実はそうなのかもしれません。ですが、それは誇ってもいいことではないでしょうか。早川さん、いえ、愛香。ぼくのいとしい方よ。きみたちはこの文化祭のために、寝る間も惜しむほど精一杯の努力をなされたはずです。そして魅力的なアイデアというものは、えてしてそのような環境から、まるで火花がスパァクするように、瞬間的に生まれるものだと認識しています。どうでしょう、アイデアを得たというその事実が、皆さんの勝利を証していると考えられないでしょうか。偶然というのは後から付いてきたただの結果にすぎないと思います」
「嬉しい。……９００のロボットを代表してお礼もうし上げます。手前味噌かもしれませんが、わたくしたち、ドラマチックな出会いをしたと、思いませんか」
「ぼくは、ロボットの代表がきみという人間であったことがとても嬉しい。……他のロボットたちには申し訳ないけれど」
「まぁ……明ったら。悪い人」
「愛香……きみこそ、憎い人だ」
「ア・キ・ラ……ウフフ」
「ア・イ・カ……ウフフ」
ウフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフ……。
わたしは今この瞬間にも、自分のこのダンボール箱をブチ破り鬼

のごとく外に踊り出たかった！
それほどの熱せられぶりだった。
熱い！　苦しい！
もう、全身が汗まみれだった。上気して、気を失いそうなくらい。
それほどの――
エクスタシーだった！！！
（お願い、見て、見て、見て――！）
（こっちを見て――！）
（こんな素敵なわたしを、容赦なく見て、蔑み、貶しながら楽しんでくださいッ！）
（明……明……あうあ、あふ、うあああ……あっあああ……明……明……あ、あ、ふぅン……！）
見て！　見て！　見て！　わたしの、このいやらしい、ふしだらな姿を――！
――！
ああ、第三の熱源！
それは他ならぬ、自分自身だったのだ――

## 謎の文化祭（六）

■１１■

校舎最西端。通称西棟。階段を3階まで上がって曲がると、すぐにトイレがあり、そこから向こうへ行く廊下には、

『この先はご遠慮下さい』

の立て看板があった。

学校関係者以外、立ち入り禁止区画。いまさらだが早川さんは平然と、その先へ椿くんをエスコートするのだった。

今までと違って、わたしを隠してくれる群衆がない。さらには、直線の、見通しが良すぎる場所である。わたしは階段側の壁に立ち、ミラーで状況を把握した。こんなときは、ごてごてと飾り付けられる、ロボットのメカメカとした体は便利だなぁと思うのだ。それはともかく、二人は、向こう端の教室に入ったもよう。それを確認してから、わたしは廊下を進み始めた。

廊下西側には3年生たちの、今は空っぽの教室が並び、東側の一面の窓からは、まだお祭り真っ最中のキャンパスのようすが一望できた。

つまり何が言いたいのかというと、少し時間差があった、ということだ。

その教室に到着して、開かれた出入り口からそっと覗き込むと、そこに見えた光景というのが――

――あすなろ抱き！

そろそろ高度を落とし始めた太陽が、教室の中の二人を、荘厳に照らしている。

早川さんは外向きに窓辺に立ち、その背中から椿くんが、両腕を彼女の胸に回している。
二人は、まるで塑像のように、神聖なまま動かず、静謐な空気が二人を取り囲み――
「――」
「――」

よくやった……。
よくやったよ、早川さん――
一秒の狂いもなく、最高のタイミングで、わたしにこの絵を見せつけることに成功した。
さすが、早川愛香。実力は本物だ。このガッコのてっぺんに、立てるほどの人物だ――

わたしは賛辞を惜しまなかった。負けそうなのに、それでも相手を称賛できる、このわたしのいじらしさ、潔さ。ああ、なんてわたしのこの器量――！

コホンッ……さて、解説したい。
この勝負、椿くんを、オトされたら、わたしの負け。
つまり、早川さんが挑んでいたのは、わたしという生身の人間ではないことをここであらためて指摘しておきたい。
彼女が挑んだ相手とは、わたしと椿くん二人が、これまで歩んできた、日々、そのものだ。
椿くんと出会ってから、決して短くはない月日が立っている。その間の、毎日の思い出の積み重ね――
二人で慈しみ、育(はぐく)んできた、“絆”、というものだったのだ。
そして確信をもって言うのだが、この絆、けっして脆くはないし、細くもない。
今回、早川さんが挑んだのは、いわば鋼索(ワイヤロープ)級のモンスターだった

のだ。
もちろん、そんなしがらみを超越して、一気に恋に落ちてしまう、という事象は存在する。
何十年と育んできた愛も、たった一瞬の恋に破れることもある。
早川さんは、それを狙った。
彼女は今日という一日、たった一太刀に、全力を注入したのだ。
その魂魄込めた斬撃に、わたしと椿くんのあいだにある絆は、はたして堪えられるのか、どうか――？
今日は、その、勝負だったのである。

……と、まじめに解説してみたところで、どうしてもわたしの唇には、不謹慎な笑みが浮かんでしまうのだ。
勝つ。
わたしが、勝つ。
最後は、わたしが勝つ――という自信だった。
それも、悲劇的なまでに、どうしようもないくらいに、圧倒的に、勝ってしまうのだ。
あすなろ抱き？
いまこの瞬間、一時的な勝利感を味わわせてやることくらい、慈悲の一つを垂れたほどのことでしかない。
わたしにとって、事態は残念ながらそれほどのものにしかすぎなかったのである。
ああ、楽しかったバトルも終わりだ。そこはかとなく、一抹の、寂しさを覚えるくらいに……。
「……」
なぜ、こんな強気になれるのか？
その根拠はなんなのか？
ほかでもない、早川さん自身が、教えてくれる。
自身気づかないままに、そのスイッチを押してくれるのだ。
“これにて終了”。

その幕を下ろす、作動ボタンを、だ――

「なめて……」

と彼女が言った。

「わたくしのよだれを、なめてください……」

と彼女が言ったのである。

早川さんは丁寧に身をふりほどくと、椿くんに至近距離で向き直り――

以下、早川さんのセリフだけが続く。それこそ剣戟の響きのように。

「高校に入って彼女ができたら、あのころわたくしを好きだった気持ちは嘘になるの？」

「どんなに好きな気持ちも、時間がたてば、色褪せちゃうものなの？」

「そんなの……わたくしは嫌です」

「触って……わたくしに、触って……」

ここで物理攻撃が繰り出される。早川さんは両手で椿くんの右手を取り、自分の胸に押し当てたのだ。椿くんはもう、さきほどから顔真っ赤っか以上に真っ赤になっている。今にもＫＯされそうだ。

「中学のあの頃のこと、憶えていらっしゃいますか？　夕日の照らす教室の中、わたくし達たった二人だけで、委員会のお仕事をしたあのときのことを……」

「『椿くん、そっちのカードは全部チェック終わった？』『待って、あと１枚……はい、お終い！』『やったね。あー疲れちゃった！』」

「わたくしは開け放たれた窓辺に立ち、外を眺めました。そこには、熱心な仕事ぶりのご褒美のような、それはそれは美しい夕方の、まさに黄金の風景が広がっていました。今でも鮮明に思い出せます。

風もとても心地よかった……」
「椿様、あなたはその時、私の背後に立ち……」
「『ほんとだ、綺麗な光景だね』とおっしゃったのです……」
「本当は、椿様……」
「その時、わたくしを……後ろから抱きしめたかったのではありませんか」
「わたくしは……いまこそ告白します。抱かれたかった……」
「この、わたくしの体を見て下さい」

椿くんの右手に手を重ね、強引に乳房を握らせる。

「この、子供体形……」
「抱かれなかったあの時から……椿様、わたくしのこの体は、あの瞬間から、時が止まったままなのです」

うまい言い回しだ。わたしは感心する。

「いま、運命が巡り巡って、その願いが叶いました」
「わたくしの体はやっと、育ち始める――」
「椿様、お嫌ですか？　中学生の体した女子高生は、相手になりませんか？」
「誓います。わたくしはこれから、美しい肉体に成長を始めるでしょう。その過程を、確かめては頂けませんか？」
「椿様――」
「私の彼氏――本当の恋人に、なってください――！」

至近距離である。右腕を窮屈なまま曲げ、ゆっくりと人差し指を口に入れ、そして抜き出す。
そのまま指を上に向け、眼前でおどけるように軽く振る。

「いま、彼女さまがいらっしゃることは承知しています。卜部美琴さま……。そのよだれの“日課”を、覗き見してしまったことがあるのです」
「そのチャンスを、わたくしにも与えてほしい」
「わたくしのよだれもなめてから、考えてほしいのです」
「椿様にとって、わたくしのと、卜部さまのと、どちらが甘く感じるか――」
「それを確かめてから、あらためて恋人を、決めてほしいのです――お願い！」
「お願い！！！」

■12■

女子中学生。
男子が、その思春期の初っぱなに出会う性的対象。
それが、ストレートど真ん中。だれもが憧れの、美少女だったら――

フロイトなんぞ持ち出す必要はない。それはハッキリとした統計的100％の真実だ。
――その美少女中学生は、その男子のオナニー人生において、一生涯を通じて万能のカードのごとく君臨（つかえる）する、セクシークィーンとなるのである。
否定はできないでしょう？（しらないけど）
仮に、なんらイベントも発生せず、片思いのまま、初恋のまま、ただ清らかな思い出を残したまま、中学卒業を機に進路が永久に分かれたら……最強（最悪）である。その美しい少女を封印する方法は、まず存在しない、と言ってしまえるでしょう。
美少女中学生というものは、男子の脳髄という大奥に一生住み続

け、時に権能を及ぼす魔の美妾なのだ。
それはやっかいこの上ない、現実には存在しない究極の美女、という怪異であり――
その男の子にとってはたおやかな、可憐な、永遠のロリータなのである！

そうなのです。

絶対、そうなのです。

そんな大妖怪が今、一人の少年の前に出現している。その男の子の生命は、もはや風前の灯火と言ってどこが言いすぎだと非難されようかっ！
早川さん。彼女の今回のミッションにあたって、その仮装を選んだのは、戦略的に大正解だったといえるだろう。
椿くんが取り殺される、という状況下で、わたしは意地に賭けても、そんな敵を公正に称賛してやるのだ。
わたしが勝つに決まってる！　この思いに揺らぎがないからだ。
ああ今回、実は、初めから結末が見えていた、勝負だったのだ。
「――！」
――ああ、言ってやる！　おくめんもなく言ってやる。

いったいどこの誰が、わが“麻薬よだれ”に勝てるというのだ！？

これまで育んできた愛という絆に絶対の自信がある。その上に、この反則ものの技だ――！
これで何でわたしが負けると思うのだ？
わたしが勝つに決まってる！
この思いに揺らぎはない。
わたしが勝つに決まってる！

この思いに揺らぎはない。
わたしが勝つに決まってる！
くどい！　この思いに揺らぎはない。

……揺らぎはないけれど！

恥をあえてさらす。
実際はわたしは、ここが正念場なのだと、祈る気持ちで、堪え忍んでいたのだった。

椿くん――！
椿くん――！
ああ、椿くん――！　椿くん――！

「――！」

そして……。

待って待って、その果てに。

時は、ついに動き出す――

## 謎の文化祭（七）

■13■

「ごめん……本当にごめん」

と、椿くんが言ったのだ！！！

その瞬間、わたしは歓喜に身が震え、そのまま昇天する思いだった。

椿明――！

わたしの――わたしの――明！　明！　明――！！！

ああわたしのあなた！　天使よ御子よ――！　王子様よそのほほ笑みよ――！

「ぼくにはやっぱりできない。きみのよだれを、なめるわけにはいかない。それが、美琴とぼくの大切な“絆”なんだから……。裏切れない……」

いまこそ――

いまこそ、早川愛香――その人物よ――その器の大きさよ――

見事だった！

まばゆい笑顔で、泣き顔で、絶対涙せず――微笑んで――！　微笑んで――！　ああ！！

「……どうしても……なめて……くださらないの、ね……」

それは、震える細い声。

「ごめん……ごめん……」

「わたくしの方が、もしかしたら、甘かったのかも、しれないのに……」
「ごめん……」
そして早川さんは、一粒の綺麗な涙を、こぼしたのだ。とうとう堪えきれず、椿くんの胸に顔を埋める――嗚咽が漏れる――
勝敗は決した。
最初から分かっていたこととはいえ、わたしは今、感無量の思いだった。
「――」
そのとき、どんな心理が働いたのか、今となっては解説できない。
わたしはそのとき――
そのとき、心を神か――あるいは悪魔に――奪われてしまった、としか言いようがなかった。
それは良きライバルへの心からの餞(はなむけ)のつもりだったのか――
あるいは、死者に鞭打つ嗜虐的性癖の発露だったのか――
わたしは――
そのときわたしは、運命的な、一つの提案を、口にしてしまっていたのである。
「早川さんの望むように、確かめてさしあげたらいいわ……」

■14■

二人がいっしょに、こちらに向き。静かに自然に、体を離した。
わたしはゆっくりと、ロボットの体を教室の中に入れた。
「もしかして、美琴なの……？」

やっぱり最後まで気づかなかったようだ。あなたの彼女がそばにいたっていうのに、なんて鈍感なんだろう。でもまぁ、今は許す。

わたしは両手で頭のかぶり物を取り外す。首を軽く振って、髪の毛を整える。前髪の隙間から目が現れたが、そのままにした。それより、頭部だけにしろ脱ぐのは数時間ぶりだ。顔が冷やされて、気持ちいい。実際には変わらないのだけど、呼吸も一気に楽になった気がした。

「確かめてもいい、とは、どういうことですの」

こちらは、もしかして気づいていたかもしれない才媛だ。もうしっかりとした常の口調に戻り、動揺の素振りを見せないでいる。

私はルールを説明する。

「明には目をつぶって準備してもらう。そのあと、早川さんとわたしでジャンケンして、順番を決める。勝った方から先によだれをなめてもらう。明は、どちらが、より甘かったのか、先か後かで答えてくれたらいいの。これでどうかしら、早川さん」

これが、わたしの提案だった。

結果は火を見るよりも明らかである。早川さんにとっては、屈辱の上塗りになること必定である。トドメを刺されること、確実な申し出だった。

だが今、彼女は、すでに失うものはない。残されているものは、わたしたちのよだれの日課に関する、純粋な興味だけ。好奇心は、何よりも強い動機となる。例えさらなる痛みをともなうことになるにしろ、覚悟の上で、挑んでくるに違いなかった。

はたして早川さんは、一瞬難しい顔をしたあとに、次のように回答したのだった。

「条件を付加させてください。まず、明は、椅子に座り体を安定させること。ことが終わるまで、明は右手で鼻をつまんで、匂いを極力かがないようにすること。当然、口は少し開き気味にして待機し、わたくしたちの指があてがわれたら、速やかに味を確かめること。さらに――」

軽く目をつむり、考えを整理する。
「――わたくしたちの方は、左手小指のそれも先の部分だけを使うこと。明の口にあてがうときは、その指を水平垂直に差し入れること。あと、ことの最中は、極力音を立てないこと。……これでどうかしら、卜部さま」
わたしは簡潔かつ心を込めて答えた。
「素晴らしいわ……」
「ではこの勝負、受けます。明、椅子に座ってください。お願いします」
凛とした態度で、早川さんが言ったのだった。

早川さんがこの場の主導権を握り、人の動きを指図する。さらには、ただ味を確かめるだけだったはずのことが、勝負事にすり替えられている。
わたしはそれに対し、無言で通し余裕を見せつけていた。
「美琴……ほんとにいいんだね？」
椿くんのその一言に、軽く頷くだけですませたりする。
そんなわたしのようすを見て、早川さんは、やはり無理か、という表情を一瞬見せたのだった。
椿くんが椅子に座った。目を瞑る。
スタンバイ、オーケー……。

実は――
再勝負が決定したその瞬間から、わたしは興奮の渦にあったのだ。
その精神の昂ぶりを堪えに堪え、もはや我慢の限度だった。今も、爆発しそうな感情を必死に押さえつけ、わたしはかろうじてだ。冷静さを装った、だが微妙に震えてしまう声で、こう言い聞かせたのである。
「明……絶対、目を、開けないでね」

この言葉に雰囲気に、鈍感な椿くんもさすがに気づき、はっきりと顔を青ざめさせた。
「な――美琴！　きみまさか！？」
「絶対、目を開かないで、ね。もし目を開けたら――」
「――」
「わたし、キレちゃって、何をするかわからない、よ？」
「――！」
椿くんが、完全に沈黙する。これでよし。次にわたしは、猛禽類の目でもって、可哀そうな仔ウサギに顔を向けるのだ。もはやはっきりと知れる、興奮で震える声で。
「さぁ、は・じ・め・ま・しょう・か――！」
主導権を奪取したはず、この場は自分が仕切っているはず――
そう思っていたはずの早川、副生徒会長殿――
一瞬にして――
立場が変わる。入れ替わる。わたしに、取って代わられる――！
今、彼女は何が目の前で進行しているのか、当事者として参加しているはずなのに、事態を把握できないことに焦っている。
それどころか、得体の知れない恐怖感に圧迫されているのだろう、顔面を白くさせて――
強固な意志で表情を保ってはいるが、頭の中は、パニック寸前に違いない。
だが早川さん。わたしの良きライバル、だった友よ。驚くのは、これからなのよ？　このさい庶民のそのやり口を、徹底的に身に染みて、覚えていって、もらいましょう――！
あはは？　アハハ？　アハハハハハハハハハハハ――！
わたしは、ロボットの両側面にデコレーションさせていたそれ――安全ハサミを、もぎ取った！

この手の質感、重量感――頭の中の血が踊り沸き返る！
シャキン、という音がした。その瞬間。
わたしの身を包んでいたロボットのガワが、ダンボール箱が――
一瞬にして粉々になり――
爆散したのだった――！

## 謎の文化祭（八）

■15■

しゃきんッ、しゃきんッ――と、わたしの両の手に現れた、その武器は――

息つく間もなく風を切り、光り輝き、宙を舞い――

鉄の歯が、獲物を捕らえて喰い刻み――

わたしの身を包んでいたロボットのガワが、ダンボール箱が――

一瞬にして粉々になり――

爆散し――！

ダンボールの無数の破片が、まるで花吹雪のように空中に舞い上がり――

日の光に、煌めき、飛びはね、広がり、散らばり――

嵐となり――

そして――数秒後。

降りしきる紙吹雪の中から燦然と現れたのは――完璧な。

そう、完璧な――わたしのハダカ、だったのである！

この瞬間、わたしは堪えに堪えていた歓喜を大爆発させたのだ！

（明……明……あうあ、あふ、うあああ……あっあああ……明……明……あ、あ、ふぅン……！）

見て！　見て！　見て！　わたしの、このいやらしい、ふしだらな姿を！

この、わたしを、見てくださいッ――！！！

■１６■

ダンボール箱を爆散させてその中央に出現したこのわたし――ロボットに扮するために、ドレスシャツは着てはいるものの、その前のボタンはがら空きで。

下着は何も着けず。

スカートもなく。

下着は何も着けていないという格好で。

衣服を収納したランバーバッグを、下腹部に回した一本のベルトで、腰の部分に結わえ付けているだけという、ようするにそんなハダカだったのである。

早川さん、まん丸な目で、絶句、絶句、絶句――！

わたしはベルトのバックルを外し、バッグを床に落とした。

生命線である安全ハサミ。これだけはこのまま――両足の、黒ソックスの中に差し入れる。ちょっとしたこだわり。ゴム下に穴を破り、ハサミの先を出し、安定させる。

わたしは、まったくもって人を見下す目つきで、悠々と、ドレスシャツを脱ぎ捨てた。

ぷるるんるるんるるんん……。

わたしは、ハダカ――

ハダカになり――

このわたしの、なんてグラマラスな、このカラダ！　おお、なんというスケベな体なのでしょう！

わたしは本当に、頭がクラクラして――

上気した顔付きで――

わたしは、知らず右手人差し指を、口に含んでいて――

ちゅぱちゅぱ……ちゅるり……。

指を引き抜いて――その指に。

“よだれ”はねっとり絡みつき――

“よだれ”は輝きながら透明な、糸を引き――

“よだれ”は生暖かく、匂いして――

わたしは――

さきほど作ったルールも何もなかった。そんなの、初めから意味がなかったのだ。

わたしは――

わたしは、その人差し指を、明の小さなお口の中に、ずぶずぶと挿入させちゃったんだ！　アハハハハ……！

そしたら明、瞬間的に、鼻血を噴いたんだよ……。うふふふふふ……！

「なんて、なんて破廉恥なんでしょう……」

ようやく、早川さんが声を絞り出したのだった。

わたしはそんな彼女に顔を向けた。

「今日一日、わたしは裸に箱を被せた格好で、みんなの中を歩き回った。これは、とても興奮する体験だったわ……」

人差し指を引っこ抜き、目の前でしゃぶってみせる。わたしも、鼻血を一滴垂らしてしまう――

「なんて、激甘……」

にまり、と笑む。

「！」

「破廉恥だったのは確か。だけどその性の官能が、本能の雄叫びが――明に伝わって、興奮させ、鼻血を流させた」

「――」

「これが、わたしと明の、よだれによる“絆”――」

「――」

「わたしはね、成功するためなら、勝負に勝つためなら、なんでもするの。……どうする？」

わたしは残酷だ、サドだ。嗜虐的性癖の持ち主だ――

「あなたも、試してみる？　フフフ……」

「――」

「あなたも裸になって、破廉恥になって、よだれをなめさせたら、もしかして明、あなたにも、鼻血を流して見せてくれるかもしれないわよ……？」

「！」

わたしはとことんサディストだ、悪意の塊だ！　ここで、わたしは――

つらつらと、いやらしいまでに、彼女の全身を眺め渡したのだ。

「ああ、でも、あなたに、そんな勇気はないよね……早川愛香さん」

「！」

とうとう彼女は怒気を表にした！　見え透いた安い挑発に、乗ったのだ！

笑えるほどもの凄い、核爆級のセリフを口にして――！

「……わたくしの、この、中学生ロリータ体形を、甘く見ないことね」

両目に放射線を光らせて！

彼女は、真っ赤なリボンを外すために手を胸元に持っていき――

ああもうわたしは――

わたしは、生涯これほど楽しいことはなかろうかと思うくらいに、事態の進展に舞い上がってしまったのだ！

「ちょっと待って！」

さすがに椿くんが口をはさんでくる。万一の事故に遭遇しないようしっかりと、ぎゅううと、両目をつむった顔のまま。

恋のライバルは、徹底的に叩きつぶす。再起不能なまでに、すり潰す。

椿くんと言えど、邪魔はさせない。私は手のひらで、彼の口をふさぐ。

だから――

「ちょっと待ちな――」

だからそんな声がよそから打ち込まれたとき、わたしは、そして早川さんも、心臓が飛び出るほど驚いたのだ。

## 謎の文化祭（九）

■17■

弾けるように振り向き見やるその先に、教室の入り口に――
その女が腕を組み、傲然と突っ立っていたのである。
三下魔女こと、丘歩子（おかあゆこ）だった――！

見た目、シャープな感じのする、眼鏡の美少女。
小学生のような背丈に、アンバランスな巨乳をくっつけた女だ。
今は半袖パーカーにショートパンツといった普通の格好で、一度目をそらしたら一般人と紛れ二度と思い返せないという平凡な服装で――　凡人で――　低レベルで――

いやいやいやいや――
論点はそこじゃない。

―なんであなたがそこにいる《・・・・・・・・・・・・・・》？

なんでこのタイミングで、そこに立っているのだ！？

わたしも早川さんも、まるでわけわからない事態の展開に体が固まってしまっている。丘さんは、そんなようすに満足そうに、ニヤリと穢れた笑みを見せたのだった。

「アンタらの勝負を黙って最後まで見守るつもりだったんだけど」
彼女は言った。

「コトが、明を賭けての、“よだれ勝負”となったのなら、見過ごすわけいかない」
彼女は宣言した。
「私も、参加するからね！」
おお！　お口のクソ魔女！　そうだった、わたしのよだれに、耐性のある唯一の女子高生！
コイツの存在を、すっかり――忘れてた！
そうだ今日は文化祭！　星の瞳祭！　このあいだの昼時間、彼女はしっかりと、伏線を張っていたじゃないか！　そうなのだ。来ていたのだ。来ていたのだ、しっかりと！
わたしは、自分のうかつさと、ということは今まで自分の方が監視されていて、気づけなかったという事実に、屈辱でまるで骨がバラバラになるほど体が震えてしまって――！
制止できなかったのだ。
三下魔女こと、丘歩子――！
見た目、シャープな感じのする、眼鏡の美少女。
小学生のような背丈に、アンバランスな巨乳をくっつけたその女。
その女が、フンフンフンと楽しげに、幸せそうな顔つきで――
服を脱ぎ捨て始めたその行動を、だ！
ああ、三下魔女こと、丘歩子――！

見た目、シャープな感じのする、眼鏡の美少女。
小学生のような背丈に、アンバランスなまるでメロンのような巨乳をくっつけたその女。
その女が（靴と靴下と眼鏡を残して）とうとう素っ裸になり――
明を見て、恥じらいの乙女のように、ポッと、頬を染めたのだった！

■18■

嗚呼ここに、都立・風見台高校を代表する美少女二人が、ついに並び立ったのである！
ハダカで！
そのおっぱいは腰つきは、まるでふるふるで！　めろめろで！
椿くんが両目を堅く瞑り、顔が茹で蛸で、墨ならぬ鼻血を噴き出している。押さえている白いハンカチが真っ赤だ。
……このやろう、薄目を開けてしまったに違いないよ。あとでキってやる！

だがしかし！　この場で一番の衝撃を受けたのは誰あろう、星の瞳女学院高等学校代表の、早川愛香さんその人だったのである。
本当に可哀そう！
この、明くん鼻血流せ勝負！
わたしや丘さんといった魔物に対し、優秀なれど普通の人の範疇に入る彼女が、勝てるわけ最初からなかったのだ。
いや、そんなことではないようだ。

彼女は、早川さんは、その綺麗な両目を、まるで汚らわしいものを見せつけられたかのようにゆがめ――
ずっと――
ずっと丘さんを、凝視し続けていたのだ。

丘歩子――
見た目、シャープな感じのする、眼鏡の美少女。
小学生のような背丈に、アンバランスな巨乳をくっつけたその女。

小柄な自分よりも、さらにちっちゃい女の子。
その裸のそのおっぱいの、なんて、なんて、なんてなんてなんて――！

よせばいいのに。丘さん、嘲笑とともに淫魔っぽく体を揺さぶって見せたのだ。

「――！！！」
ついに声にならない悲鳴を上げた！
「なんて、なんて破廉恥なの！　これ以上あんたらバカな恥女につき合ってらんないわ！　この底辺助平変態糞詰まり便秘冷え性不潔病原菌女ッ！」
ぶるぶる体を震わせて、心からの叫びだ。
椅子を投げつけてきた！　うわあっ！
こっちに立ち直るひまも与えず、強引に椿くんの腕を取り、引き摺ったのだ。むしろこの場から積極的に脱出したがっていた椿くんでもあって、二人はあっという間に教室の出口に移動する。早川さん、一瞥。ここでようやく、余裕を取り戻したか、酷薄な笑みを見せた。
その左腕には、椿明。
その右腕には、あらかじめ教室に隠し置いていたのだろう、折り

たたまれたロボットの仮装セット2組を抱えて！
わたしは悲鳴を上げた。（ロボット！？）
丘さんが、私以上の悲鳴を上げた！「それはダメやめなさいッ！」
早川さんは唇を歪め、
「油断したわね、おマヌケ……！」
わたしは丘さんは争うようにダッシュして二人を取り押さえようとした。早川さんは廊下の向こうに大声を張り上げた。
「お兄さん方〜！　はやく来て〜！　なんと風見台高校女子のヌードでぇ〜〜す！」
もちろんフェイント、フェイクに決まってる！　だがしかし、そこが悲しい女の子の性（さが）だ。わたしと丘さん、一瞬、うろたえてしまった。

その一瞬に、早川さん椿くんが、逃げ去っていたのだった――

## ■19■

「このバカ――！」
わたしは追いかけようと脱ぎ捨てた服に手を伸ばした丘さんを、その後ろからケツ蹴っ飛ばしてやった。丘さんは悲鳴を上げて裸のまま教室の床を机を跳ねとばしながら転がる。
「あんたがメチャクチャにしたのよ！　このドチビ！　大根役者のクサレ下女がっ！」
「アンタこそ――！！」
丘さんが怒りの形相で立ち上がってくる。
「――そもそもアンタが失敗したのが原因じゃないサ！」
張り手を飛ばしてくる。わたしはその腕を巻き込み、投げ技の大技を喰らわしてやった。おっぱい回しながら空を飛べ、三流魔女、

ざまあみろ！
わたしは武闘派、丘さんは頭脳派――？　とんでもない！
わたしは頭脳派だ。丘さんも頭脳派だ。
わたしは武闘派だ。丘さんも武闘派だ。
そしてどっちでも、わたしの方が段互いに上なのだ。間違えないでほしいものだ――！
床に倒れ落ちたその上に、踵を踏み落とす！
そのわたしの美しい脚に、丘さんが蛇のように体を絡め、関節技をかけてくる。
わたしは大股を広げたまま床に叩きつけられた。ガーッと、頭に血が上った！　コイツ殺す！　今殺す！
自由な脚で蹴りつけ束縛を破ると、脱げかけた安全ハサミに手を伸ばす――
「あんたがしゃしゃり出てこなかったら――今ごろは――！」
丘さんが限界を超える大声を振りしぼった！
「今はそれどころじゃないんだ！　いいかげん私の話を聞け――！」
顔を真っ赤にさせ、睨み付け――
「星の瞳女学院のロボットには、―細工が施されているんだ《・・・・・・・・・・》！　上野（うえの）、公平（こうへい）の――！」

わたしの動きが、ビタッ、と停止した。

このわたしが、たかが誰かの名前を叫ばれたくらいで、感情を吹き飛ばされた――
「上野公平……」
それほどの名前だったのである。上野公平――大魔王！
「……なんで、このタイミングで、その名が出てくる？　あんたら二人は、いっつもメチャクチャだよ？　たのむからどっかよその惑星系に移住していってくれないかな？　ブラックホールなんてどう？」

「あのロボットの箱を被ることによって発動してしまう！　二人が、正確には、明が、あの“魔の箱”を被ってしまうことによって、悪魔が起動してしまうんだっ！！！」
一人忘我の境地に至った丘さんの、それは絶叫だった。
「明が魔の箱を被るかどうか、賭だった！　こっちに分のある有利な賭だった！　オッズだって、１対１０００００００というべらぼうな――でも、けっきょく勝ったのは公平！　あの悪魔の方だった！
まさかあの中坊女が、この部屋に箱を準備してたなんて、誰が予想できる？」
「つまりやっぱあんたがミスったんじゃないか！」
「バカ！　そもそもアンタが昨夜、ミスらなきゃ、魔の箱どころか、なんにも起こらなかった事じゃないさ！」

わたしの背筋に悪寒が走った――

昨夜のミス？　昨夜のミス？　昨夜のミス？
「何のこと……」
――あの、犬（ワンコ）のこと？
ちょっとまってよ……。本当に、一体なんのことよ。教えてよ。
仮に犬のことだとしたってさ、ホラ、このとおり、文化祭は無事に開催されているんだよ？
文化祭が開催された時点で、犬の侵入問題は、すなわちドアの戸締まり問題は、うやむやに、事実上問題なしと決定されたものと思って当然ジャン……。

まさにその時だった。
校舎内から。
キャンパスから。
不思議な、静かな、しかも熱を帯びた、とても奇妙などよめきが、起こったのである。

丘さんが、慟哭した――
「明が……明が……明が、“箱”を、被ってしまった！　もうお終いだ――！」

まさにこの世の終わりが訪れた――
そんな、彼女の真実の嘆きに――
もはや猶予の一秒もないことが理屈でなく感得される。
彼女の言うとおり、何かが、何かが始まってしまったのだ！？
もはやその“何か”の発動阻止の段階ではない。かくなるうえは、一刻でも早く、この、起こってしまったという（なんだかまだわかってないことだが）事態を解除することである――

なによりも――

椿明――
彼の身に――？！

わたしの――　わたしの――　大切な――
彼の身に――？！

「――！」

わたしは、立ち上がる。そして、走り始めていたのだった。

## 謎の文化祭（一〇）

■２０■

「アンタ裸ッ――！」
丘さんの言葉を振り切って――
わたしは――校舎を、廊下を疾走する！

その廊下の東側の一面の窓からは、まだお祭り真っ最中のキャンパスのようすが一望できたのだった。
そこでは、ロボットが――
あの９００体ものロボットたちが、その動きを、その活動を、同時に、一斉に――
停止、させていて……。

舞台の上で、楽器の演奏中に――
大紙に大筆で大書している真っ最中に――
うぃーん、と笑えるツッコミを入れたその時に――
飛び入り大歓迎の社交ダンス大会で、スローステップした直後に――
大道芸のジャグリングを披露しようと、カラーボールを放りあげたその瞬間に――
無料ドリンクを振る舞っている最中に、どぼどぼと、ジュースをカップから溢れさせながら――
――全ロボットが、同時に、その動作を、大停止させていたのだった！

『宇宙船から地表に降り立つと、そこは、ロボットの大量に打ち捨てられた、人類の滅亡した星なのであった』

そんな、ＳＦ的情景が展開されて――

静かな、しかも熱を帯びた、とても奇妙などよめきは、そのシュールな光景をいきなり眼前で体験させられた、来訪者たちの感動のうなり声。

名門・星の瞳女学院高等学校、奇祭『仮装文化祭』最大の出し物――

大テーマ“ロボット”の、これぞ神髄！

全校をあげた大パフォーマンスが今、始まったのだろうか――！？

「違う――！」

わたしを追っかけてきた丘さんが叫ぶのだ、悲痛な声で！

「あれは――あれは――」

悪意の発動の証！

覚醒した証明がわりに棺桶に引っ掻いた、悪魔のその手の、９００本もの指の、爪の跡――！

「！」

いやでも感じる相手の、そのスケールのでかさ、その強さ！

対して、わたしらと言ったら――

「どーすんの！　私ら、全裸だよ！　わかってんの！？」

嗚呼、都立・風見台高校を代表する肉体派美少女コンビが、ハダカで！　（靴と靴下を残した）全裸で！

恥ずかしくて、顔も体ぜんたいも真っ赤で――あっはぁんんんんっっっ！

そのおっぱいは腰つきは、まるでグラマーで――いゃあああんんんん！

淫らで、すっごく淫猥で　喘ぎ声を漏らしながら、体液で股を濡

れ濡れにさせながら――
ぷるるんぷるるんぷるるんんん……とさせながら！
立ち入り禁止区画。人はいない。
だがちらほらと遠くからの目撃者はいて――
その人らにとってわたしらは、これからの悪夢の到来を告げる、魔女の凶兆の先走りとも見えただろう。
この、お嬢様学校の廊下を全裸で突っ走るわたしたち二人は、目出度くも都市伝説になったのだ。
階段まで来た。わたしは階段を――躊躇なく――
階段を――最上階、４階へと駆け上がる！
「どこ行くつもりなんだよ！　恥ずかしいッ！　恥ずかしいよぅ！」
丘さんの泣き声だった――
私は高く評価する！　早川さんの、その頭脳を才能を――！
早川さんが、わたしのロボット変装を予想し、その逆手を取るべく、あの教室にあらかじめロボットの衣装を用意できたように。
わたしも、早川さんのたくらみが理解できるのだ――
二人がロボットの仮装セットを持ち出して逃げたという情報。
椿くんがロボットを被ってしまったという情報。
これだけ聞かされたなら、普通なら、外に飛び出して、そこにわらわらといるロボットたちの仲間入りをしたと考えるのが妥当だ。
なにしろ、そこにいる彼女達は強力な味方なのだから。
だが違うのだ。
わたしは、妙な自信とともに断言する。
彼女は、そんな女じゃない。見くびってはいけない。
木の葉の中に隠れる木の葉のパターンではない。彼女は、木の葉じゃないんだ。

「いったいどこに行こうとしてるの――？」
わたしは脳内地図（マップ）を思い起こし、あらためて確信をもって簡潔に答えた。
「生徒会室――」
早川さんの牙城だ。
そこに、二人は隠れている。おそらく。
彼女は――わたしたち二人は、ロボットを追ってキャンパス内を必死に探し回るのだろう。そう予想しながら、笑いながら、エリートの部屋の中で寛ぎながら、優雅に紅茶を啜ったりする。彼女は、そんなタイプなのである。
そして、戯れにロボットを被り、即席のロミジュリごっこでもしたのだろう。
「間違ってたらどーするつもり！？　私ら――」
終わりだよ？　うるさいな、そんなこと、わかってる。リスクに怯えて何も出来ないあなたとは、わたしは人間の素材からして、違うんです――
生徒会室前に到着した。ドアに、鍵が掛かっていた。丘さんが、絶望の表情になった――
わたしは安全ハサミ一丁を右手に握りしめた。
「必殺、安全ハサミ――ドリル！」
右手を高速で繰り返し左右に捻り、ある程度歯を開いたハサミを錐揉みさせる――
ドア板が高級木材であったことが幸いした。ドアノブの横をわた

しのハサミが穿孔する。丘さんが目を丸くした。
「待って、待ちなさい――」
ついにロック機構が顔を出した。私は躊躇なく破壊した。同時にハサミも使い物にならなくなる。あと残機は一丁のみだ。実は手も相当痛めてしまったのだが、口にはしない。
「鍵は壊しちゃだめだ――」
さっきからコイツは何をほざいているのか？　本当に目障りでうるさい。チチだけのバカ女！　死ね！
わたしは丘さんを軽蔑の心で無視して、ドアを開け、中に突入したのだった。

■２１■

だが――勢いよく突入した直後にはもう、わたしは足を止めていたのだ。

「おお……」

思わず感嘆のため息も、もらしていたのである。

そこは、一つの教室ほどもある、だだっ広い、しかも金がふんだんにかけられた部屋だった。床は広々と赤い絨毯が敷き詰められ、天井にはなんとシャンデリアが煌めいている。壁の調度品は古い歴史を感じさせる逸品、絶品揃いで、その最たる物である会長用の重厚なデスクが、奥の窓際に、王様然として据えられていたのだ。今一番景気のいい上場企業の社長室だってこうはいかないだろう。

そのような部屋の中――

「ビンゴ……」

果たして、目の前に。

絨毯の上に。

シャンデリアの光を無機質に反射させたダンボールロボットが２体、キャンパスの他のロボット同様に動作を停止させて、まるで石像のようにそこに置かれていたのである。

１体は、部屋の真ん中で、左足を一歩前に、左腕を後ろ気味に、右腕を前に差し出すようにして、……なんとなく握手しようとする直前の形のまま、硬直している。

いや、違った。よく見るとその１体は、筐体に微振動を起こしている。さらには耳をすますと、「ＶＯ・ＶＯ・ＶＯ・ＶＯ・ＶＯ……」という小声、明らかに口まねによる機械音を、箱の内側から発

生させていたのだ。
目を転じると、もう1体は、部屋のより奥の方で絨毯に倒れていて、こちらはまるで人間が死んだみたいに寸毫の動きもない。
これは一体何なんだろうか？　やっぱり何らかの、パフォーマンスなのじゃないかしら？
絢爛たる生徒会役員室の中で、ウイルスに襲われ狂い死にしたロボット会長の、図。
非現実的な場面に遭遇し、わたしは思考が働かず、呆然と、突っ立ったままで――
「明――！」
丘さんが絶叫し、どちらか1体に駆け寄ろうとした。
おかげで、そのおかげで、わたしは条件反射的に。かろうじて、体を再び動かすことができたのである。
くるりと体を回転させ、丘さんを逆にドアの方へ蹴り返す。
自然と、言葉が口から飛び出ていた。
「勝手なマネしないでよね！　この場はわたしが仕切ってんだから――」
ドアに叩きつけられた衝撃で、丘さん、冷静さを取り戻したようだった。
床に尻餅をついた格好のまま、こちらを睨み付けてきたものの、けっきょく抗議の言葉はなくて。
逆に、不貞不貞しく、
「こうなったら、今さら遅い早いの違いなんてないさ。好きにしたらいい……」
と言い放ち、そして。すべてを諦めたように、裸の肩を落としたのである。
わたしは――
丘さんから手番を渡されて、わたしは、再び部屋の中に振り向い

て。
先ほどとは打って変わって、そのときにはもう――
わたしは、持ち前の、攻めの意識を取り戻すことができていたのだった。

ええ、そうよ。わたしの好きにさせてもらう。言われるまでもない。
たとえ行く手にどんな厄災が待ち構えていようとも。
わたしが、自身の手を持って――
切り開くのだ。
わたしの、未来を――これからの人生を――！

（明ッ――！）

裸の体に、勇気が、張りが戻った。胸の鼓動が活発になり、筋肉がしなる。新鮮な一呼吸ごとに、頭脳が気迫に震える。

おおうッ！　わたしよ！　卜部のわたしよ――！

心技体に、ひさびさの充足感を感じた。
わたしは最後の安全ハサミを手にすると、まずは手前側の1体。
“直立するロボット”――に向かって、気合いを込めて足を踏み出したのだった。

■22■

ロボットと人間の互いの存在意義、共存とその可能性。

そもそもロボットとは何だろう。人間とは何だろう。
ひいては、生命とは何だろう――
この、形の定まらない、色もない、何となくふやふやとしているモノ。それでいて無限の可能性を有したソレは、さながら宇宙そのもののようにも思われる。
ロボットは、人間が生み出した一つの生命の形。だとしたら、ロボットは1台1台、その内側に、宇宙を持っていると言えるのではないだろうか。誤解を恐れず言えば、それは一つの、閉曲面の宇宙なのである――

わたしは、宇宙を一つ、その外側から切り裂いた。

ダンボール箱の正面を縦割りにした。切り口を両手で左右に開くと、姿を現したのは、まさに早川さん。追いかけていた早川愛香その人に、間違いなかった。わたしの推理は、ここに正しく証明されたのである……。

「――」

わたしは、震える。わたしは、震えたのだ。

その時――
わたしは、彼女のその有様を、どう表現したらいいのか、その言葉を失ってしまったのである。
どうしたら伝えられようか、このおぞましさ――
その羞恥心と、怒りを？
その虚脱感と、感動と、エロス、その恐怖を――

「――」

早川さんは、虚ろな目。すなわち——
今の今まで、だ。彼女は、“ロボット”という“閉ざされた宇宙”の中で、身動きを許されず——
その宇宙のロボットに——
ロボットに、そのロボットの内側で、そのロボット自身に自身の裏側で——
強淫、されていたのである。

名門・星の瞳女学院の副生徒会長が、美しい顔と黒髪を汚され、着ていた中学生の制服をボロボロにされ、半裸の状態で——
半死半生の状態で——

上野公平・作、“魔の箱”……。

見るがいい。切り裂かれた頭部、体部の、二つのダンボール箱。その内側には、—ダンボール紙を材料とした繊毛が、無数に、隙間なくびっしりと生えており——
口、陰部、肛門それぞれに、—ダンボール紙製の極太長大なる魔羅が1本ずつ《・・・・・・・・・・・・・・・・・・》、繊毛を、まるで陰毛のように掻き分けて、悪夢の塔のように屹立していたのである。
おそらくは、箱にハサミが入る寸前まで、罠に掛かった犠牲者を陵辱し続けていたのだろう。
箱を切断したのが効いたのか、今は電線を断たれた電気機械のように、魔鞭毛と魔器の、その固有運動を停止させている。ただ、その無数の一本一本はいまだ白濁した魔液をじゅくじゅくと分泌させており、犠牲者の衣服を腐食させ続けているのだった。
箱を割ったときから、むん、とした、分泌液の甘臭い匂いが立ち込めていた。察するに、衣服を食い破った粘液は、皮膚に達したのち、肉に染み込み、淫薬としても作用しているに違いない。

わたしは早川さんからダンボール箱を引っぺがす。魔羅が抜け、内側を上にして、床の絨毯に落ちた。……

わたしはしゃがみ、肉感リアルな奇形魔羅の1本に、ハサミを入れる。歯が肉に切り込んだ瞬間、パンッ、という音がして、液を飛び散らし、圧縮空気が抜け、一気に萎んだのだった。

この魔羅も、そして繊毛も、主材料が“箱の内側部分”という、著しく限られた物量で作られている。案の定、魔羅は“張りぼて”であって、その張り子の皮の厚さは、ミクロン単位なのであろう、信じられないくらいに薄かった。なのに人の体を支障なく貪る強度を保っていたのだから、やはり上野氏の科学技術は、黒魔術の領域に達している……。

わたしは顔をしかめた。

箱の残骸を、蹴り飛ばした。

ただひたすら、汚らわしかった。

早川さんは、虚ろな目。今もって、硬直したまま、突っ立っている。

異音の正体は――魔羅をほおばった苦悶の声。口の隙間から漏れる、無理強いされた快楽の喘ぎ声だった。

そして、今こそ理解できる。

全ロボット動作停止のカラクリは――触手によってツボ、経絡を刺激され、さらに魔液によって肉を犯されて、神経系を制圧された結果だったのである。

ああ……！

早川さん。わたしの、良きライバルだった才能ある、善良なる人の子よ――！

今、動けぬその体の中で、一体何を思考しているのであろうか…

…。

その時、さすがのわたしも、『不憫』という文字を、脳裏に思い浮かべたのだ。

私は早川さんを抱きかかえ、壁際のソファーに座らせた。意識して成分を調整した“解毒よだれ”を作ると、人差し指に濡らし、その指を彼女の口の中、舌に、塗りつける。

それしかやれることがない。

その味は、よほど苦かったに違いない。ほどなく早川さん、薬効による反応を示し始める。鼻をぐずらせ、ぽろぽろと涙をこぼし始めたのだった。

「じっとしてなさい……」

それしかかける言葉がない――

――

――嗚呼！

もちろん、これで終わりではないのである！

ここで、やっと半分なのだ――嗚呼！

わたしは振り向いた。

わたしはその時、もしかして今の早川さんよりも、人生に絶望していたのかもしれなかった。

さっきの丘さんのセリフがよみがえる。

こうなったら、今さら遅い早いの違いなんてないさ……。

正直、わたしは顔を両手で覆い、泣きたかった。

それでも――

わたしは――

わたしは、運命を切り開く安全ハサミを持ち直し、残る1体。

“横臥するロボット”――に向かって、鉛のような足を踏み出したのである。

## 謎の文化祭（一二）

■２３■

そのロボットは、顔を横に向けた、うつ伏せの形で絨毯に倒れていたのだった。
今度は内側からの音もなく、微振動もない。それが何を意味するのか、わたしは――強いて考えることをやめ、ともすれば虚脱してしまいそうになる自分を叱咤しながら、そのロボットの背中をハサミで切り開いたのである。
「あ、ああ、ああああ……！」
わかっていたことだった！　認めたくなかった、嘘だと信じたかったことだった――！

背中から姿を現したのは、完全に失神している椿くん、だった……。

「――」
名門・星の瞳女学院高等学校、特待生男子生徒（仮）の制服をボロボロにされた、半裸の美少年。
全身の肌には魔液がぬめり、プリンとしたその桃のような瑞々しいお尻と、無理矢理開かされた柔らかな花のようなお口には、ボコボコ突起付きの怒張したダンボール魔羅がねじ込まれ……その状態で。
床に、倒れ伏していたのだ――
わたしはその2本とも根本から切断し、萎んだ残骸を引っこ抜き、嫌悪感も怒気も露わに壁に投げつけたのである。

――

泣きたかった！！！

とうとう、犯されてしまった椿くん！

本来なら、半狂乱ものの事態だった――！

だが――

（だけど――！）

だが、だが――！

わたしは凝視する！

（おおお……！！！）

失神している、椿くん――なのだ！

すなわち、汚されたのは、肉体だけ……。わたしはそこに一筋の光明をみる思いだった。

最弱の名をほしいままにしている椿くんの、中でも必殺最強の大弱点、“全身性感帯”が、今度ばかりは幸いした……と言えなくはないだろうか？

おそらくは椿くん。魔の箱のトラップが発動したその瞬間、ほぼゼロ秒で、まるで雷に直撃されたように、自分の意識を吹っ飛ばしたに違いなかった。

（なんとかできるかもしれない……）

これだったら、うまくケアすれば、トラウマを避けられるかもしれない、はずだ――

わたしはその希望を胸に、椿くんを仰向けにひっくり返して、そして――

その瞬間、全身を直撃した無力感に、体を硬直させてしまったのである。

わたしは――

わたしは、上野公平という人物を、よほど過小評価していたのだ。

それを、思い知らされた一撃だった。

目の前の、目を疑う光景――

椿くんの、大事な、大事な……男性器が。

ちっちゃい、サクランボのような彼の男の子のシンボルが。

ダンボール製の悪魔魔羅に、尿道を！

にィ～ヨヨヨぅ～ううう～～どどどどどォ～～～おおおお、をっっっ！

犯されている、そんな光景だった……。

■23■

もちろん最初から、椿くんのチ○ポコが無事にすんでいるはずはない、と覚悟はしていたことだ。

が――

それはおそらく“オナホ〇ル”のような、椿くん、つまり男性向けに開発された、言わば“順当な道具”が使われるはずだと、思いこんでいたのだ！
その点については、上野氏に、逆説的だが一種の信頼を寄せていた、と言ってもいい。
それが――
それが――
「うううう……！」
悪魔を、一瞬たりとも信じたわたしが悪かったのだ、だが！
だれが、だれが、こんなこと思いつく――？
チ〇ポコの穴を使って、チ〇ポコでセッ〇スする！？！
わたしが失神したかった。頭の中に、黒い蒸気が、渦巻く思いだった――

■２４■

どのくらい時間がたったのだろう。わたしはともかくも、そのやりたくない、だけどわたし以外の人にやらせたくない、作業に取りかかったのだ！
椿くんの体から、ダンボール魔羅を引っこ抜く。
簡潔に書けばこれだけだが、実際にヤる、しかも女の身になってみれば、はたして気の遠くなる作業だった。
だが、救いもある。そんなヤな時間は、そんなにかからない。つまり――

ああ……もしかして。極太魔羅が小さいチ〇ポコ穴（尿道）に捻り込まれているという4次元的光景を起想させてしまったかもしれない。もちろんもちろん、それは違う。

ダンボール魔羅は、ちゃんとサイズを合わせた、“極細で短い”物だ。たとえるならば、“一寸釘”を想像してもらえたらいいだろう。すなわち、ムダ毛を一本引っこ抜く要領で、抜き取れる。

それだったら――

――一分もかからず、数秒で終わる作業である。

だが――

「ううう……！」

わたしは、ここでまたしても、強烈な無力感に襲われたのである。

いったい、上野氏よ！？　あんたは、どんだけな奴なのよ――？

極細短小であるはずの悪魔魔羅。ちょいと引き抜いてお終いであったはずの“釘魔羅”。それが……。

左手で肉チンポをつまみ、右手で紙チンポを引っこ抜いているのだが……。

抜いても抜いても、いつまでもいつまでも、ズルズルと、紙縒（こより）と化したダンボール魔羅が、出てくる出てくる……、出てくる出てくる……。

軽妙なBGMの流れる中で。

道化マジシャンが滑稽に。

しかし手際よく。

おのれのシルクハットから――鳩やら花束やら、紙テープ、紙吹

雪、ウサギ、トランプ、カラーボール、国旗付きロープなどなどなどを際限なく噴出させてみせるように――

わたしは、椿くんのおチンチンから、紙ヒモを際限なく、1メートル、2メートル……と、引き抜き続けているのだった。

バカバカしくも、極めて真剣に！

もういい加減、わたしは、喚きたかった！

わたしの苦労、この思い、だれにも理解できないよ！

特にここ、是非わかってほしい。

わたしはこの作業において、絶対。そう、絶対にだ。

紙ヒモを、途中で千切れさすことが許されなかった、のである。

ああ、なんという極悪魔羅！

仮に千切って体内（繰り返すが、チンチン内だ！）に残留物を残してしまったら。それを取り除くために、外科手術機関か、はたまた上野氏自身に、椿くんの身を預けるしかなくなるのだ。それはどちらも絶望的風景で、マジに全力でお断りしたい未来図である――！

しかも、苦労は重なる。

椿くんが、反応し始めたのだ。

さきほど、全身性感帯ゆえに意識を飛ばした――喪心した、と言った。たしかに、いまだに彼は、目を覚ましていない。絶賛気絶中である。

だが！　彼のこの美しい繊細な身体が――

全身性感帯の、その中でも一番過敏なトップエリア、生殖器の――

さらにその内に秘められた、神聖なる精液の通り道。通常ならば絶対手の触れられない秘奥の極肉を――

毛羽付き、よじれた紙ヒモに、ずるずると、何メートルも擦り続けられているのである！！！

脳のない肉体といえども、これは辛抱堪らん刺激だったろう！

「あん……あん……あん……あん……」
と、このわたしですら気が狂いそうになるほどの甘い艶声を、椿くん、口から漏らし始めたのだ！
１センチ、１ミリ引くごとに、肉体も顕著にピクンピクンと反応を示し始め、この分だと切らずに作業することが困難になること必定だった。

そしてふと気づいたときには、そばに、二人のハダカの美少女が、獲物を見つめる猫のように四つん這いになって、にじり寄っていた、というわけだ……。

チ〇ポコを勝手にいじくられて可愛ゆく喘いでいる、清らかな、憧れの、超絶美少年。しかも、恥ずかしさで死んでしまいそうなほど扇情的な半裸の状態で、でも今、お人形さんのように無抵抗に気絶なさっておられて、されるがまま……。

桃色の目をして、グフーッブフーッと鼻息荒い、眼鏡を曇らせた丘さんである。そして。

まだ動きがぎこちないものの、鼻血を垂れ流すまで十分に回復した早川さん、であった。

本当に、しょうがなかったのである。このままだと、絶望的だったのである。
わたしは、猫の手も借りたかったほどだったのである。
だから、二人に命じて、椿くんの体を、これ以上動かないように、取り押さえさせたのだ。

二人が、唯々諾々として従ったのは言うまでもない。

## 謎の文化祭（一三）

■２５■

このあとのできごとは、あまりにも破廉恥すぎて、このわたしが記憶から除去したいと思ったほど、それほどの、異常事態になったのだった。

上野氏の魔の箱の分泌液に濡れていた椿くん、そして早川さんであったのだが、当然この二人を介抱したわたし、そして丘さんも、その汚れをもらってしまって……。

もともと薬品に耐性のあるわたしら二人だったのだけど、それでも上野氏の魔液の力には、少なからず影響を受けてしまって……。

リビドーが刺激され。

ついには、一人の裸の美少年を、三人の全裸美少女が奪い合う、組んずほぐれつのキャットファイトを繰り広げるに至ってしまった、というわけです。

いえ――

途中までは、わたしらは、きちんと自制できていたのだ。

三人とも、詳しく説明するまでもなく、一紙縒残留問題のコトの重大さ《・・・・・・・・・・・・・・》は、十分に理解できていたからだ。

しかし……。

自分の身体を、神経を、粘液に犯され。

動かさないように、男の子に肌を密着させた状態で。

美少年の大事な部分を、（治療という大義名分で）思う存分にいたぶり、そのさまを見せつけられて。

椿くんの喘ぎ声に鼓膜を刺激されて。

気づいてみれば全員裸だという状況で。
永遠に伸び出てくるかと思われた紙縒が、無事に全部引き抜かれたその瞬間。三人の目の前で、椿くんが盛大に夢精してしまい――
それが、引き金になったのだ。

あとはもう前述のとおり、一人を奪い合う三人による大乱痴気騒ぎに発展したというわけである。
わたしは初っぱなに、本当にかろうじてだ。椿くんの口の中に、“解毒よだれ”を届けることができた、それだけが、評価できる唯一の行為だったと言えよう。その後のことはもう、思い出したくもない！　三人とも、女の醜悪を晒した、の一言につきた。互いに相手を押し退け、殴り、蹴飛ばし、力ずくで椿くんを独り占めにしようと抱きしめ、貪り――
時には三人一緒になって、唇を、耳を、鼻を、乳首を、おへそを、足指を、チ〇ポを、お尻を、肛門を――
触り、揉み、つねり、ほじくり、キスし、嘗め、噛みつき、しゃぶり――
無抵抗の美少年に屈辱的なポーズを取らせ、その白い手を、細い指を、端正な顔を、自分の体に擦りつけ――
途中から覚醒を始めた椿くん、悲鳴を上げながら弱々しく抵抗し出して、おかげでますますヒートアップして――
泥沼状態となって――
そのような痴態を、延々と繰り広げたのだ。
このときはまさに、際限なく続くかと思われた、狂気の一時であったのです……。

嗚呼、悪夢。ここに、かのように極まれり――

破廉恥沙汰の最中に、頭の片隅で冷静にそう思い――
わたしは、本当に。

その時、本当に。
本当に、浅はかだったのである。

■26■

つまり――
その時、上野氏による悪夢は、ここに極まった、とそう思った。
全然、まるっきり、間違っていたのだ。
わたしは本当に、上野氏という悪魔を、いや魔王を、過小評価していたのだ。
すなわち。
今までの長い長い騒動は、氏にとってみれば、ただの前戯にすぎなくて――
本番は――
本当の悪夢は――
これから、始まったのだ。

未来永劫、地獄の責め苦とばかりに続くかと思われた乱痴気騒ぎ。
それが――
一瞬で終わりを告げ、本当の悪夢に取って替わられる――
そんな大転換が、目の前で起こったのだ……。

いきなりだ。
そう、いきなり――
生徒会室の、鍵の壊れたドアを開けて、ソイツが中に入ってきたのである！
ソイツとは――

■27■

ソイツとは――

――あの、一見してシェパードに見える、大型犬、だった。

わたしは自分の目を疑う――

犬だ、犬だ、あの犬だ。昨夜の犬だ。間違いなくあの犬だ。ミスってしまった、昨夜のあの犬だ！

なんなの、これは一体どういうこと！？

この犬は、あれからどうしていたの？

とっくに、守衛に捕獲、処分されていたのではなかったのか？

そこにいる、ということは、つまり奇跡的にセンサーに引っかからず、どこかで今まで眠っていたのか？

ありえない、ありえない、そんなことありえない！

――

それとも、前提が誤っていたのか？

守衛の飼い犬だったのか？

とにかく――

なぜ、このタイミングで、この場に出てきたのだ？！

だがこの時、混乱の渦に巻き込まれていたのは、実は意外なことに、わたし一人だけだったようで。

「しまったッ……！」

と、丘さんが嫌悪と怒りの形相になって身を緊張させ。

そして、早川さんが――
隣にいたわたしの鼓膜を破かんばかりの、凄まじい悲鳴をあげ――
ソイツの名を絶叫したのだった――
「ヨハネ――！！！」

■２８■

次の瞬間の、早川さんの反射的動作こそ、人外のものだった！
飛び跳ねるやいなや――
一瞬で窓に走り、開き、なんと――
外にジャンプしたのだ！

顔から一気に血の気が引く！
ここ――４階だぞ――！？！
そしてほとんど同時に、これが大事件となりうるに十分と認定せざるを得ない、不吉ワードが頭を占拠したのだった。
『超名門校の、副生徒会長が、生徒会室で、薬をキメて、淫行に耽ったあげく、全裸で、投身した――！』
まさに日本をひっくり返す、大醜聞に発展すること必定な事態が、起こってしまったのだ――

が――

わたしは、もはや現実と夢の世界の境界を、見失っていたのだ。
ここは、“大悪夢”の中だったのだ。なんとならば――

おおッ！

見よッ！

四つ足動物の、その移動のスピードよ――！！！

まるで、テレポーテーション、だった！

人間の視神経の、反応速度限界、例えるならばムービーフィルムが1コマ、フィルムを送ったとき――

そこには――

なかば空中に飛び出ていた早川さん、その足首を銜（くわ）える犬の光景があったのである。

怪物と表現すべき大型犬が、全身の筋力を総動員させて首を振る――

早川さんは、逆に部屋の中央に、投げ飛ばされ、転がされ――

わたしは、丘さんと一緒になって、椿くんの両脇を抱えながら、部屋の壁にまで後退する。

わたしたちの見ている前で、よろよろと絨毯の上に跪き、両手を組み、窓の方向に向かって祈りを捧げる早川さんの姿があった。

それは天に向けられたものなのか、はたまた、暴力を振るう獣に向けたものなのか、判別がつかず――

「無駄よ――」

丘さんがあっさり判別する。――獣の方だ。

「早川さんが、あの犬を家に拾って帰ったその日の内に――」

嫌悪感も露わに、吐き捨てた。

「――調教完了してるってわけさ。早川さんは現在、あの犬の……支配下にある」
「……なにをしゃべっているのか、わからない」
いや、分かっている。認めたくないだけだった。
それを証明する惨状が、開始されたのである。
早川さんは、自発的に四つん這いになると、わたしたちに丸見えになるのも関わらず、その美しい股を淫猥に開いて――
ああ、そして！
わたし、丘さん、そして椿くん……の目の前で！
ヨハネが。
その獣の逆毛で覆われた畜生魔羅を、早川さんに、出し入れし始め――
やがて、耐えきれず、自ら腰を振り、切ない声をあげ始める早川さん、という図になったのである。

椿くんが悲痛な叫び声を上げて、動かぬ体で犬に飛びかかろうとした。
わたしと丘さんは、それを必死になって取り押さえる。
当然だった。
敵わないからだ。
人間は、犬に敵わないからだ。
ペットを、特に犬を、愛玩動物と思ってはいけない。
ごく普通の飼い犬であっても、本気を出せば、人間の骨くらい簡単に噛み砕く。
ましてや、超大型犬である。山犬、狼、と想定してちょうどいいくらいだった。
さらには、武器どころか防具、衣服すらないアホ３００％の状態で、いったい何ができると言うのだろう！
「――！」
この、わたしが、だ。

いまだもって、バカ丸出しで、だ。
ただただ、眼前の悲劇を不様に傍観している、手出し出来ないでいる理由が、それであって――！
椿くんが、表現不可能な、万感の思いに慟哭し始め――
何かが壊れる（殺される）音がした。それは、椿くんの心の中から聞こえたような気がして――
わたしは――！
（クソクソクソクソクソクソクソクソクソ――ッ！！！）
わたしは、怒りと焦りで、体が炎に焼かれる思いで――ッ！
ああ、神仏はいないッ！
いるのは、人と、魔物だけだ――！
そして悪魔は、地獄の羅刹は、どうして人にここまで容赦がないものなのか。
その時。
「グ・グ・グ・グ・グ……」
という怪奇音声が聞こえて――
聞こえてきてしまって――
その音の――
その発生源に気づいたとき、わたしは総毛立ち――
それは、その音は――
ヨハネの、声帯が、発生する音で――
つまり。

犬の声、だったのである！
ヨハネが、犬が、笑っている、その音だったのである！

ヨハネが――

言葉を――しゃべったのだ。

犬の声帯が、人間の言葉を、空気に振るわせて。
早川さんの上に乗ったまま、ヨハネが顔をこちらに向け、わたしを睨んで、嗤って。
わたしはおのれの正気を疑わざるを得なくなって。
だがはっきりと――
「グッグッグッ……ミゴト……ヅギ・ワ……オマエ・ダ……」

許されるならば、卒倒したかった！
が、犬は、ヨハネは、続けてこう言ったのだ。
椿くんを見つめて。
「ゾノ・ヅギ・ワ……アギラ……オマエ・ダ……オマエ・ド……オマエ・ド……ゼッグズッ！」
あんまりだった――！

このとき、丘さんが、椿くんの前に盾になるように立ちふさがったのだ。
「いい加減になさいッ！　アンタの“純情路線”はどうなったのよ！　見損なったわ！　この半端野郎！　いい？　その汚い毛の一本でも明に触れてごらんなさいな。はっきり、私、アンタのこと、許さないからね――！」
「丘さん……」
わたしは声に硬さをにじませる。状況を――
「説明しなさい！　ただちに！　何もかも！」

「――」
「丘さん！」
長く待つまでもなかった。丘さんは、その背中を震わせ始めたのだ。涙までこぼして！
「……あの犬の頭蓋には、アンテナの針が打ち込まれているんさ。犬の全身の神経、つまり感覚が、そのアンテナに支配されているんだ。アンテナは電波で別の場所にあるインターフェイスにリンクされ、そこで、一人の人間の頭脳と繋がっている。つまり――」
丘さんは吐きだした。
「もう理解したろう？　あの犬は今、上野公平、その人なんだよ――！」
「――」
「グ・グ・グ・グ・グ……」
と、上野氏が嗤った。
わたしは――
「――」
ああ、この宇宙には。悪魔すらいなかった――！
いるのは唯、人だけだったということだ。

■２９■

私は丘さんの背後に隠れ、左の靴を脱いだ。手に持つと踵の部分を横にスライドさせる。空洞が現れる。そこに収納していた電子器機を取り出した。ミニ・ケータイだ。このとき、この状況で、逆襲の手段と期待した隠し武器だった。

――が、スイッチを入れて、わたしは絶望にうめき声を漏らす。
圏外だった。まさか嘘だろうと目を疑ったのだが、液晶は冷酷なまでにその主張を変えない。でも、これはよほどおかしな事態だった。この地域が圏外などありえなく、現に昨夜は、電波状況の異常がないことを確認済みだった。それがなぜ、こんな時に限って、計らったように役に立たなくなったのだろう？
今更だが、代わりに拳銃を仕込んでこなかったことを後悔するのだ。
こんなわたしを横目で見て、丘さんが早口に解説する。
「ここら一帯の電波は、今、公平の制圧下にある。説明したでしょ、電波を使ってるって。彼のアレ用の変態電波だから、そんじょそこらの電波とはものが違うことくらいは想像できるよね。それが９００あるんだ。普通のケータイなんかの電波が、付け入れる隙なんかないんだよ――」
わたしは聞きとがめた。
「９００――！？　ちょっと待ちなさい。なによそれ、あれ、あれ……、え、あれ全部――」
「そうだよッ！」
丘さんが捨て鉢に叫んだのだった。
「星の瞳女学院高等学校、全生徒。あのロボット全部が、電波塔になっていて、かつ、リモート・アクチュエーターなんだよ！　なんだい？　今更なにバカづらさげてんのさ？　ロボットの魔羅が、自動反応・自立式の自動機械（オートマ）とでも思ってたんかよ？　ことセッ○スに意地汚い公平の奴が、そんなもったいないマネするわきゃねーだろー！　９００体、全部同時に、公平一人で、１台ずつ、一人ひとりを、９００人、同時に、公平一人で、一人で、ひとひとひとひと――！」
もう、気がふれているとしか思えない。そんな彼女の絶叫だった。
「――９００人を同時進行で、一人で相手してるんだよッ！　犬になっているたった今も！　あのバケモノは！」

「――」
わたしは改めて犬に目を向ける。
同時に頭の中で計算する。どうしても計算してしまうのだ。そんな性格が恨めしくなる。
とりあえず、魔羅だけに対象を絞ろう。それにしたってだ――
ロボット1台につき、3本の魔羅である。ということは、270本の魔羅である。
その1本1本の魔羅を、かの男は、同時に、個別に、操作しているのだと、彼女は主張してるのである。
それも、今、犬の姿で、犬の一物を操作しながら、早川さんと続行中に、だ――
「――」
わたし、もはや言葉がない。
「公平はね――」
丘さんが言う。
「――かつて、1024個もの睾丸を陰嚢に溜め込んだ事さえあるんだ！　900人の“同時逆輪姦”なんて、あいつにかかったら、さほどのモノでもないんさ！」
もの凄い説得力だった。
「“ナノマシン”、て知ってる？」
丘さんが畳みかけてくる。
「……名前くらいは、知ってる」
「今からの話は、それをイメージしてくれたら分かりやすい。いや、誤解するな。さすがの変態科学力を持ってしても、素粒子機械なんか作れっこない。今の公平に作れるのは、せいぜい、“細胞マシン”がいいとこだわ」
「それでも十分に凄い、けど？」
「それを、犬の睾丸に仕込んだ！」
「――」
「アンタが昨夜、犬の侵入を許してしまったそのあとに、あの犬、

何をしたか、想像がつく？」
「――」
「９００体のロボットの内側に、その細胞マシン含有精液を、射精して回ったんだよ！」
「――」
わたしは即座に計算する。どうしても、計算してしまうのだ。
ロボットは、大小２個の箱からなっている。つまり、計１８００個の箱の数である。
それ全部に、きわめて短時間のうちに、精液を付けて回った、と彼女は主張しているのだ――
「箱内部に付着した細胞マシンは直ちに活動を開始し、たった数時間で“工事”を完了させてしまった。あとは、“ＧＯ”信号の発令を、待つだけだったのさ！　明が箱を被った、という信号をね！」
「――」
「バケモノなんだよ！　いま、私らが相手してんのは、そんなバケモノなんだよ！　美琴ッ！　アンタ、いっつも生意気なことぬかすくせに、こんなときくらい本当に役立って見せてよ！　口先女！」
言ってくれるわ……。
わたしは不敵に笑顔を浮かべる。
だが内実は――
はっきり、絶望状態だったのである。
上野公平！
このわたしをして、歯が立たない。
相手が悪すぎた――
それが、正直なところ、だったのだ……。

■29■

はっきり言って、今回は事実上、わたしの負けだった。挽回もできず、性奴隷として陵辱される順番をでくの坊のように待っているという屈辱的な状況だった。わたしは歯がみしたまま、苦い無力感を味わいながら、立ちつくすばかりで、なんら有効な手だてを講じることができなかったのである。ただただ、おのれの不様さかげんを、現在進行形で思い知らされていたのだ。

もう一度言おう。いや、何度でも、言おう。

わたしの、負け。

わたしの、負け……だったのである。

ヨハネが体を震わせた。一仕事、終わったのだ。

ゆっくりと、犬の体を回し、こちら、わたしに！　顔を向ける。

あの、気味の悪い声で、笑い声を発すると、続けて、意味の取れる言葉を吐いたのだった。

「オマエ・ノ・バン……ダッダ・ガ……ギ・ガ……ガワッダ……」

そこでいきなり、その獣の目を、椿くんに向けたのである。

「アギラ……オマエ・ダ！　オマエ・ド……オマエ・ド……！」

体が震え、唾液を垂らし、まさに狂犬病ぜんとした犬が、ふらつくように前進を始めたのだった。

丘さんが、恐怖のあまり……そう、武者震いした、ということにしておこう。それでも、もう健気と言ってやりたい、意地で立ちふさがり、その背に椿くんを匿ったのだ。

わたしは――

今回、負けを学習した。そして――

わたしは今回。学習したことがもう一つあることに気づかされる

のだ。
それは、神はおわす。ということだ。かの存在を信じる人間がいるかぎり、神は存在する。
つまり、神がいるということは、人間が存在する、ということになるのだ、と――

わたしらが陥った地獄。
そこからの逆転劇は、かのように、始まったのである。

■３０■

「サ――」
わたしが早川さんに向かってその言葉を投げかける、まさに寸前のことだった。

彼女の方が先に、行動を起こしたのだ。
心身に重大なダメージを喰らって、まともに動けるはずのない早川さん。
一体なぜ、彼女に、あのような真似ができたのか――

起因は、もちろん、ヨハネであろう。
ヨハネが、順番を変更したからである。
ヨハネが、次の標的として、明を選んだからである。
だから――
早川愛香。その愛の深さを、かのように、見せつけたのだ――
――
早川さんが、噛んだのだ。
ヨハネの睾丸を、犬の睾丸を――！

ヨハネがギャンと悲鳴を上げ、感電したかのように硬直し、そのままバタンと音を立てて床に倒れた。同時に早川さんも気を喪失する。

ヨハネは動かない。動き出そうとしない――！？

おそらくは、アンテナには、突発的な過剰感覚に対する安全回路（セイフティ）が設けられていたのだろう。それしか考えられなかった。

案の定、今――

ヨハネが、くすんくすんと、犬本来の鳴き声をあげ、夢から覚めたように、おどおどと、まぎれもなく犬の動作で、困惑の顔をこちらに向けたのである。

この瞬間、ヨハネは悪魔の憑依から解放されたのだ！

わたしはとっさにケータイの液晶画面をチェックする――

アンテナが立っている！

千載一遇のチャンスだった。

ここでカードを切らなくて、いつ切るというのか！

わたしは、わたしの持ち札すべてを、ここでオープンしたのだった――

昨夜仕掛けた手品のタネ１つ目、２つ目を、一気に発動させたのだ。

わたしはケータイに向かって、ほとんど怒鳴るように声を叩きつけた。

「わたしは“サロメ”――！！！」

とたん――

全校に、キャンパスに、わたしの今の声が、大音量で、響き渡ったのである。

わたしの１つ目のカード。それはこの、“校内放送ジャック”だ

った。昨夜、放送室に忍び込み、回線に端末を割り込ませていたのだ。すなわち、この手にしているミニ・ケータイこそが、現在ただ一つの、放送マイクになっているのだ。
では、最後の2つ目とはなんなのか――？
わたしは繰り返した。
「わたしは“サロメ”――！！！」

念を入れてもう一度、繰り返す。これで計3回だ――
「わたしは“サロメ”――！！！」
一回呼吸を整えた。そして、ついに命令を声に表したのだ。なるべく高飛車な感じが出るように――
「この“サロメ”の言葉に耳を傾け、その意をくみ、ただちに形に示すがよい！　わたしは“サロメ”。わが望みは――“ロボット”の首であるっ！　“サロメ”のこの声を聞いた者は、ただちに、すべての、ロボットの頭をもぎ取り、銀の皿に盛り付けるべし！」
再び息を吸って、続けて怒鳴ったのだった。
「――ついでに体の方も、ダンボール箱破いてよねっ！　わたしは“サロメ”だよ。“サロメ”の言うことを聞かなきゃだめだよ！　期待してるからっ！　頼んだよ――！」

目を丸くさせている丘さんが、当然だが説明を求めてきた。
「今の、なに？　“サロメ”って、キーワードのようだけど……」
もちろん、キーワードである。わたしはもはや、余裕であった。今のようにときおり見せる、丘さんの乏しい知恵の発露に、やさしげな頷きを見せたりもできるほど。
「わたしは昨夜、3つの仕事をした。一つは、ロボットの仕様をスパイすること。二つ目は、校内放送をいつでも乗っ取れるようにすること。最後の三つ目が、今のコレ――」

催眠術、であった。

昨夜、教室と放送室の他、もう一ヶ所、訪問した場所がある。
屋上・給水塔であった。
全校の、飲み水の貯水タンクであった。
そこでわたしは、わが卜部一族の中でも、限られた者にしかできない力業、“マウス・ウォーター・クラッシュ”を発揮したのである。
“マウス・ウォーター・クラッシュ”――！
“麻薬よだれ”の大量放出。
それこそ、寿命を削る勢いで、唾液腺の枯れあがるほどまでに、タンクの水に、よだれをぶちまけたのである。
「――そしてそのよだれっていうのが、いつものよだれではなかった、というわけ？」
丘さんが合いの手を入れる。
「そう。催眠効果が表れるように成分調整した、特製のよだれ――」
“サロメ”の言葉に従うように。
一度飲んだら、何度でも飲みたくなるように。人に、飲むことを勧めたくなるように――
丘さんが、フンと鼻で笑う。
「どうりで……。ドリンク無料サービスとか、なんか変だと思ったんだ」
さすがの私も、その時、その味にまでは気が及ばなかった……と、彼女は認めたのだった。
わたしと丘さんが、期せず、同時にドアの方へ顔を向ける。
いまや、その騒動の音が、壁越しに聞こえてきていた。
意識をサロメに操られた学祭来訪者が、ロボットを破壊する音で

ある。
思い出してほしい。
来訪者のほとんどは、他校の少年男子や、お嬢様目当ての青年たちであったことを。
ドリンクを飲んだのは、彼らの他にも、守衛、教師、学校関係者すべてがそうであったことを。
そして――
サロメの言葉に従い、箱を破ればそこには――
思春期真っ盛りの男子連中が、いまだ生臭い男盛りのおっさん連中が、その夢にまで見たお姫様が、憧れの制服を破られた半裸の状態で、言いなりの状態で、現れるのである。
――
ロボット９００体に対し、人間はその数倍だ。
たちまちのうちに、奪い合いとなり、ついには女性の来訪者、女教師をも巻き込んだ、大狂騒、大乱闘となり――
千を超す輪姦のコロニーが、まるでシャーレの寒天培地に広がる黒菌のごとく形成され――
そこからもあぶれてしまった男達は、目を血走らせ、新たな獲物を求めて、校舎の外、内をかけずり回り――
１階、２階、３階、４階と、押し寄せて――
もうここまで狂乱されたら、“サロメ”の命令も通じないだろう。
わたしは覚悟を決めて、ケータイを踵に戻したのだった。

丘さんが、こちらに顔を向けて、笑った。
「この、悪魔め……」
わたしも、鼻で笑って返す。
「最高の褒め言葉ね……」
そしてわたしは、カレに顔を向けたのだった。

ヨハネ――

９００の電波塔を一度機に破壊されたら、いかな上野氏の変態電波とて、以前のような性能は発揮できないはずである。今、そのワンコは、まったくの正常状態のままに、黒々とした瞳で、わたしを見詰めていたのだった。
わたしを、解放してください……と。
再び悪魔に体を乗っ取られる前に、わたしを永久に救ってください……と。

犬――

お互いにその存在を認め合う、数万年来の、人類の、唯一にして最良の、友であった。

「ヨハネ……」

次に生まれ変わってきたときは、今度こそ、わが風見台にいらっしゃい。そのときは、みんなでキミのその顔に、チャーミングな眉毛を描いて、あげるから……。
そしてわたしは、安全ハサミを走らせたのだった。なるべく苦しまないように、魂込めて。
「――」
ヨハネが、首筋から血を噴き上げ、床に眠るように横倒れになった――

私は死を見届けると、直ちに次の行動に移った。
窓からカーテンを引っぺがすと、椿くんを抱きかかえ、わたしと彼、二人の体を包んだのである。

「どーすんのさ？」

同じようにカーテンを外し、自分と早川さんの体に巻き付けながら丘さんが訊いてくる。
「だれでもいいから、服を奪って、キャンパスから脱出する」
丘さん、一つ頷く。
「で、どーすんのさ。この現状」
「もうわたしらの手には負えない。大人たちに任すわ……」
やっぱり丘さん、納得するように一つ頷いたのだった。

奇妙な論理がまかり通る世界の住人。大人たち。
そこで罪を被されるのは、はたして誰になるのやら？

わたし、こと、卜部美琴？
上野公平？
それとも、早川愛香？
ひょっとして、丘歩子も対象に入ってる？
大穴で、椿明くんも？

「フン……！」
わたしはここで鼻で笑ってやるのだ。
勝手にしたらいい！　たとえ――
そう、たとえ、どんな結果を、どんな罰を押っつけられようとも、そのときはそのとき。
うまく泳ぎ切ってやるだけさ！
わたしの未来は、わたし自身の手で、切り開く――

押し寄せる群衆の足音が迫っていた。
わたしはケガを負った右手で、血塗られた安全ハサミを振りかざした。

「さあ、行こう――！」

## 謎の文化祭（一三）（後書き）

お読み下さってありがとうございます。
もしよろしかったら続編がありますので、そちらの方もよろしくお願いします。

小説『謎の彼女X』（？）
ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３３００ｑ／

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0957h/

小説『謎の彼女Ｘ』

2011年1月24日23時46分発行